

SigmaSystemCenter 3.1

インストレーションガイド

—第2版—

免責事項

本書の内容はすべて日本電気株式会社が所有する著作権に保護されています。

本書の内容の一部または全部を無断で転載および複製することは禁止されています。

本書の内容は将来予告なしに変更することがあります。

日本電気株式会社は、本書の技術的もしくは編集上の間違い、欠落について、一切責任を負いません。

日本電気株式会社は、本書の内容に関し、その正確性、有用性、確実性その他いかなる保証もいたしません。

商標

▪ SigmaSystemCenter、WebSAM、Netvisor、InterSecVM、iStorage、ESMPRO、EXPRESSBUILDER、EXPRESSSCOPE、およびSIGMABLADEは日本電気株式会社の登録商標です。

▪ Microsoft、Windows、Windows Server、Windows Vista、Internet Explorer、SQL ServerおよびHyper-Vは米国Microsoft Corporationの米国およびその他の国における登録商標または商標です。

▪ LinuxはLinus Torvalds氏の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

▪ Red Hatは、Red Hat, Inc.の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

▪ Intel、Itaniumは、Intel社の米国およびその他の国における登録商標または商標です。

▪ Apache、Apache Tomcat、Tomcatは、Apache Software Foundationの登録商標または商標です。

▪ NetApp、Data ONTAP、FilerView、MultiStore、vFiler、SnapshotおよびFlexVolは、米国およびその他の国におけるNetApp, Inc.の登録商標または商標です。

その他、本書に記載のシステム名、会社名、製品名は、各社の登録商標もしくは商標です。

なお、® マーク、TMマークは本書に明記しておりません。

目次

はじめに.....	vii
対象読者と目的.....	vii
本書の構成.....	vii
SigmaSystemCenter マニュアル体系.....	viii
本書の表記規則.....	x
1. SigmaSystemCenterのインストールの概要.....	3
1.1. 本書の読み方.....	4
1.2. SigmaSystemCenterのインストーラ.....	5
1.2.1.SigmaSystemCenterのインストールモード.....	5
1.3. SigmaSystemCenter 3.1のDVD-R構成.....	6
2. インストールを実行する.....	7
2.1. インストールを始める前に.....	8
2.1.1.システムの構成 / 動作環境の確認.....	8
2.1.2.管理サーバに事前にインストールが必要なソフトウェア.....	8
2.1.3.DHCPサーバの構築.....	10
2.1.4.Windowsファイアウォールの設定に関する注意.....	11
2.1.5.インストール実行前の注意.....	11
2.1.6.Windows Vista以降、またはWindows Server 2008以降にインストールする際の注意.....	11
2.1.7.ESMPRO/ServerManagerユーザグループ設定に関する注意.....	11
2.1.8.DPMサーバのインストールに関する注意.....	12
2.1.9.SQL Server 2012 Express以外のSQL Serverを使用する場合.....	12
2.1.10.管理サーバのインストールに関する注意.....	14
2.2. 管理サーバコンポーネントのインストール.....	15
2.3. 管理サーバコンポーネントを個別にインストールする.....	16
2.3.1.インストールを実行するには.....	16
2.3.2.コンポーネントの選択.....	16
2.3.3.インストール先フォルダの選択.....	18
2.3.4.SQL Server情報の設定.....	19
2.3.5.Windowsファイアウォールの指定.....	21
2.3.6.ESMPRO/ServerManagerの設定.....	22
2.3.7.DPMの設定.....	24
2.3.8.インストールの開始.....	25
2.3.9.インストールの完了.....	26
2.4. 管理サーバコンポーネントを一括でインストールする.....	27
2.4.1.インストールを実行するには.....	27
2.5. 管理サーバコンポーネントをインストールした後に.....	31
2.5.1.DPMサーバをインストールした場合.....	31
2.5.2.Out-of-Band (OOB) Management機能でPETを受信する場合.....	31
2.6. 管理対象マシンコンポーネントのインストール.....	33
2.7. Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへインストーラ画面からインストールする.....	35
2.7.1.インストールを実行するには.....	35
2.7.2.コンポーネントの選択.....	36
2.7.3.Windowsファイアウォールの指定.....	36
2.7.4.DPMの設定.....	37
2.7.5.インストールの開始.....	38
2.7.6.インストールの完了.....	39
2.8. Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへインストーラ画面表示なしでインストールする.....	40

2.8.1.インストールを実行するには.....	40
2.9. Windows Server 2008 Server Core / Windows Server 2012 Server Core管理対象マシンへインストールする	43
2.9.1.インストールを実行するには.....	43
2.10. Linux管理対象マシンへインストールする.....	44
2.10.1.DPMクライアントのインストールに向け準備する.....	44
2.10.2.DPMクライアントをインストールするには.....	46
3. アップグレードインストールを実行する.....	49
3.1. SigmaSystemCenter 3.1へのアップグレードインストール	50
3.2. インストール (アップグレード) を始める前に	51
3.2.1.動作環境の確認・準備	51
3.2.2.管理サーバOSのWindows Server 2003のサポート廃止について	51
3.2.3.アップグレードインストールを行う際の注意.....	52
3.2.4.管理サーバに事前にインストールが必要なソフトウェア	53
3.2.5.Windowsファイアウォールの設定に関する注意	54
3.2.6.インストール (アップグレード) 実行前の注意.....	54
3.2.7.SigmaSystemCenter 1.1のSystemProvisioning Connector Framework をアンインストールする	54
3.2.8.DPMサーバ (管理サーバ for DPM) をアップグレードインストールする際の注意	55
3.2.9.SystemProvisioningのアップグレードインストールに関する注意.....	56
3.2.10.管理サーバ for DPM (HP-UX) と連携している場合	57
3.2.11.NetvisorProと連携している場合	57
3.2.12.Windows Vista以降、またはWindows Server 2008以降にインストールする際の注意	58
3.2.13.SQL Server 2012 Express以外のSQL Serverを使用する場合	58
3.2.14.SystemProvisioningの構成情報データベースをリモートのSQLに構築している場合	59
3.2.15.管理サーバのアップグレードインストールに関する注意	59
3.3. 管理サーバコンポーネントをインストール (アップグレード) する	60
3.3.1.DPMのサービスを停止する.....	60
3.3.2.インストール (アップグレード) を実行するには.....	62
3.3.3.コンポーネントの選択.....	63
3.3.4.インストール先フォルダの選択.....	65
3.3.5.SQL Server情報の設定.....	66
3.3.6.Windowsファイアウォールの指定	69
3.3.7.ESMPRO/ServerManagerの設定	70
3.3.8.インストール (アップグレード) の開始.....	71
3.3.9.インストール (アップグレード) の完了.....	72
3.4. Apache Tomcatをアンインストールする	74
3.4.1.SigmaSystemCenter 1.1のApache Tomcatをアンインストールするには	74
3.4.2.SigmaSystemCenter 1.2のApache Tomcatをアンインストールするには	75
3.4.3.SigmaSystemCenter 1.3のApache Tomcatをアンインストールするには	75
3.4.4.SigmaSystemCenter 2.0、および2.1のApache Tomcatをアンインストールするには	76
3.5. 管理サーバコンポーネントをアップグレードインストールした後に.....	77
3.5.1.DPMサーバをアップグレードインストールした場合	77
3.5.2.SigmaSystemCenter 2.1以前でDPMをSystemProvisioningと別マシンにインストールしていた場合	78
3.5.3.SystemMonitor性能監視をアップグレードインストールした場合	78
3.5.4.SystemProvisioningをアップグレードインストールした場合	79
3.5.5.SigmaSystemCenter 1.3以前のバージョンからアップグレードした場合	81
3.5.6.SigmaSystemCenter 2.0以降のバージョンからアップグレードした場合	84
3.5.7.SigmaSystemCenter 2.1以前のESMPRO/ServerManager Ver.4からアップグレードインストールした場合	93
3.6. 管理対象マシンコンポーネントをアップグレードインストールする	94
3.7. Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへアップグレードインストールする	96
3.7.1.アップグレードインストールを実行するには.....	96
3.7.2.コンポーネントの選択	97
3.7.3.Windowsファイアウォールの指定	97
3.7.4.DPMの設定	98
3.7.5.アップグレードインストールの開始	99

3.7.6.アップグレードインストールの完了	100
3.8. Windows Server 2008 Server Core管理対象マシンへアップグレードインストールする	101
3.9. Linux管理対象マシンへアップグレードインストールする	102
3.10. DPMクライアントを自動でアップグレードする	103
4. アンインストールを実行する	105
4.1. 管理サーバコンポーネントのアンインストール	106
4.2. アンインストールを始める前に	107
4.2.1.アンインストール実行前の注意	107
4.2.2.DPMサーバをアンインストールする際の注意	107
4.2.3.Windows Vista以降、またはWindows Server 2008以降からアンインストールする際の注意	107
4.3. 管理サーバコンポーネントを個別にアンインストールする	108
4.3.1.アンインストールを実行するには	108
4.3.2.コンポーネントの選択	109
4.3.3.SystemProvisioningの設定	109
4.3.4.ESMPRO/ServerManagerの設定	110
4.3.5.アンインストールの開始	111
4.3.6.アンインストールの完了	112
4.3.7.Java 2 Runtime Environmentをアンインストールするには	112
4.3.8.ESMPRO/ServerManagerをアンインストールした場合の注意	112
4.3.9.SystemProvisioning、およびESMPRO/ServerManagerをアンインストールした場合の注意	113
4.3.10.SQL Server 2012 Expressをアンインストールするには	114
4.4. 管理サーバコンポーネントを一括でアンインストールする	116
4.4.1.アンインストールを実行するには	116
4.4.2.ESMPRO/ServerManagerをアンインストールするには	117
4.4.3.Java 2 Runtime Environmentをアンインストールするには	118
4.4.4.SystemProvisioning、およびESMPRO/ServerManagerをアンインストールした場合の注意	118
4.4.5.SQL Server 2012 Expressをアンインストールするには	118
4.5. 管理対象マシンコンポーネントのアンインストール	119
5. トラブルシューティング	121
5.1. インストール / アップグレード / アンインストール時のエラー	122
5.1.1.アップグレードインストール時に構成情報データベースのコンパートに失敗する	122
5.1.2.管理サーバ for DPM (HP-UX) が連携設定された状態でのアップグレード時のエラー	123
5.1.3.ESMPRO/ServerManagerインストール / アンインストール時のメッセージについて	124
5.1.4.ESMPRO/ServerManagerアンインストール後のメッセージについて	124
5.1.5.SystemProvisioningのブラウザ画面表示が不正となる	125
5.1.6.管理サーバにインストール後、Webコンソールが起動できない	125
付録 A ネットワークとプロトコル	129
管理サーバ	129
管理対象マシン	133
その他	135
付録 B ターミナルサービスでの操作	137
付録 C 改版履歴	139
付録 D ライセンス情報	141

はじめに

対象読者と目的

「SigmaSystemCenter インストールガイド」は、SigmaSystemCenter のインストール、アップグレードインストール、およびアンインストールを行うシステム管理者を対象読者とし、それぞれの方法について説明します。

本書の構成

セクション I SigmaSystemCenter のインストール

- 1 「SigmaSystemCenter のインストールの概要」: インストールの進め方、インストーラについて説明します。
- 2 「インストールを実行する」: インストール手順を説明します。
- 3 「アップグレードインストールを実行する」: 前のバージョンからのアップグレードインストール手順を説明します。
- 4 「アンインストールを実行する」: アンインストール手順を説明します。
- 5 「トラブルシューティング」: SigmaSystemCenter のインストール、アップグレードインストール、およびアンインストール中に問題が起こった際の対処方法について説明します。

付録

- 付録 A 「ネットワークとプロトコル」
- 付録 B 「ターミナルサービスでの操作」
- 付録 C 「改版履歴」
- 付録 D 「ライセンス情報」

SigmaSystemCenter マニュアル体系

SigmaSystemCenter のマニュアルは、各製品、およびコンポーネントごとに以下のように構成されています。

また、本書内では、各マニュアルは「本書での呼び方」の名称で記載します。

製品 / コンポーネント名	マニュアル名	本書での呼び方
SigmaSystemCenter 3.1	SigmaSystemCenter 3.1 ファーストステップガイド	SigmaSystemCenter ファーストステップガイド
	SigmaSystemCenter 3.1 インストレーションガイド	SigmaSystemCenter インストレーションガイド
	SigmaSystemCenter 3.1 コンフィグレーションガイド	SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド
	SigmaSystemCenter 3.1 リファレンスガイド	SigmaSystemCenter リファレンスガイド
ESMPRO/ServerManager 5.63	ESMPRO/ServerManager Ver.5.6 インストレーションガイド	ESMPRO/ServerManager インストレーションガイド
WebSAM DeploymentManager 6.1	WebSAM DeploymentManager Ver6.1 ファーストステップガイド	DeploymentManager ファーストステップガイド
	WebSAM DeploymentManager Ver6.1 インストレーションガイド	DeploymentManager インストレーションガイド
	WebSAM DeploymentManager Ver6.1 オペレーションガイド	DeploymentManager オペレーションガイド
	WebSAM DeploymentManager Ver6.1 リファレンスガイド	DeploymentManager リファレンスガイド
SystemMonitor性能監視 5.2	SystemMonitor性能監視 5.2 ユーザーズガイド	SystemMonitor性能監視 ユーザーズガイド
	SigmaSystemCenter 仮想マシンサーバ (ESX)プロビジョニングソリューションガイド	SigmaSystemCenter 仮想マシンサーバプロビジョニングソリューションガイド
	SigmaSystemCenter sscコマンドリファレンス	sscコマンドリファレンス
	SigmaSystemCenter クラスタ構築手順	SigmaSystemCenterクラスタ構築手順
	SigmaSystemCenter ネットワークアダプタ冗長化構築資料	SigmaSystemCenterネットワークアダプタ冗長化構築資料
	SigmaSystemCenter ブートコンフィグ運用ガイド	SigmaSystemCenterブートコンフィグ運用ガイド

関連情報: SigmaSystemCenter のすべての最新のマニュアルは、以下の URL から入手できます。

<http://www.nec.co.jp/WebSAM/SigmaSystemCenter/>

SigmaSystemCenter の製品概要、インストール、設定、運用、保守に関する情報は、以下の4つのマニュアルに含みます。各マニュアルの役割を以下に示します。

「SigmaSystemCenter ファーストステップガイド」

SigmaSystemCenter を使用するユーザを対象読者とし、製品概要、システム設計方法、動作環境などについて記載します。

「SigmaSystemCenter インストレーションガイド」

SigmaSystemCenter のインストール、アップグレードインストール、およびアンインストールを行うシステム管理者を対象読者とし、それぞれの方法について説明します。

「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」

インストール後の設定全般を行うシステム管理者と、その後の運用・保守を行うシステム管理者を対象読者とし、インストール後の設定から運用に関する操作手順を実際の流れに則して説明します。また、保守の操作についても説明します。

「SigmaSystemCenter リファレンスガイド」

SigmaSystemCenter の管理者を対象読者とし、SigmaSystemCenter の機能説明、操作画面一覧、操作方法、メンテナンス関連情報、およびトラブルシューティング情報などを記載します。「SigmaSystemCenter インストレーションガイド」、および「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」を補完する役割を持ちます。

本書の表記規則

本書では、注意すべき事項、重要な事項、および関連情報を以下のように表記します。

注: は、機能、操作、および設定に関する注意事項、警告事項、および補足事項です。

関連情報: は、参照先の情報の場所を表します。

また、本章では以下の表記法を使用します。

表記	使用方法	例
[] 角かっこ	画面に表示される項目 (テキストボックス、チェックボックス、タブなど) の前後	[マシン名] テキストボックスにマシン名を入力します。 [すべて] チェックボックス
「 」 かぎかっこ	画面名 (ダイアログボックス、ウィンドウなど)、他のマニュアル名の前後	「設定」ウィンドウ 「インストレーションガイド」
コマンドライン中の [] 角かっこ	かっこ内の値の指定が省略可能であることを示します。	add [/a] Gr1
モノスペースフォント (courier new)	コマンドライン、システムからの出力 (メッセージ、プロンプトなど)	以下のコマンドを実行してください。 replace Gr1
モノスペースフォント斜体 (courier new)	ユーザが有効な値に置き換えて入力する項目 値の中にスペースが含まれる場合は " " (二重引用符) で値を囲んでください。	add <i>GroupName</i> InstallPath=" <i>Install Path</i> "

セクション I SigmaSystemCenter のインストール操作

このセクションでは、SigmaSystemCenter のインストール、アップグレードインストール、アンインストール、および操作中のトラブルへの対処方法について記載します。

- 1 SigmaSystemCenter のインストールの概要
- 2 インストールを実行する
- 3 アップグレードインストールを実行する
- 4 アンインストールを実行する
- 5 トラブルシューティング

1. SigmaSystemCenter のインストールの概要

本章では、本書の読み方、および SigmaSystemCenter のインストール、アンインストールを行うインストーラについて説明します。

本章で説明する項目は以下の通りです。

- 1.1 本書の読み方4
- 1.2 SigmaSystemCenter のインストーラ5
- 1.3 SigmaSystemCenter 3.1 の DVD-R 構成.....6

1.1. 本書の読み方

本書では、SigmaSystemCenter のインストール、アップグレードインストール、およびアンインストールの手順を説明します。

次節以降では、SigmaSystemCenter のインストーラの基本的な機能と構成について説明します。

SigmaSystemCenter 3.1 を新規にインストールする場合は、「2 インストールを実行する」を参照し、インストールしてください。

ご利用のシステムに既に SigmaSystemCenter 3.0 以前のバージョンをインストール済みで、SigmaSystemCenter 3.1 へアップグレードインストールする場合は、「3 アップグレードインストールを実行する」を参照し、アップグレードインストールしてください。

SigmaSystemCenter 3.1 をアンインストールする場合は、「4 アンインストールを実行する」を参照し、アンインストールしてください。

1.2. SigmaSystemCenter のインストーラ

SigmaSystemCenter は、SigmaSystemCenter のインストーラによりインストール、およびアンインストールができます。

インストーラは、SigmaSystemCenter の管理サーバを対象にした管理サーバコンポーネントのインストール / アンインストール、および SigmaSystemCenter の管理対象マシンを対象にした管理対象マシンコンポーネントのインストール / アンインストールができます。

アンインストールは、「プログラムと機能」画面から実施します。

注: UNC パス、もしくはネットワークドライブを割り当てたドライブ上で、インストーラは実行できません。DVDドライブ上のインストーラを実行してください。

1.2.1. SigmaSystemCenterのインストールモード

SigmaSystemCenter のインストーラは、2 つのインストールモードを兼ね備えています。

◆ 個別インストール / アンインストール

インストーラのウィザード画面に従い、インストール / アンインストールを実行するモードです。

コンポーネントを選択して、インストール / アンインストールすることができます。

◆ 一括インストール / アンインストール

コマンドから、インストール / アンインストールを実行するモードです。

一括インストールは、SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R に収録されているすべてのコンポーネントをインストールします。インストール実行時に、コマンドからオプションを指定することにより、インストール先や Windows ファイアウォールなどを指定することができます。

一括アンインストールは、インストールされているすべてのコンポーネントをアンインストールします。

注: 一部、一括でアンインストールできないコンポーネントがあります。

一括インストール / アンインストールでは、インストール / アンインストール中にインストーラのウィザード画面は表示されず、ユーザからの入力はありません。

1.3. SigmaSystemCenter 3.1 の DVD-R 構成

SigmaSystemCenter のインストーラ、および各ソフトウェアコンポーネントは、次の通り SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R に収録されています。

SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R	
ManagerSetup.exe	管理サーバコンポーネント用インストーラ
ManagerSetup.ini	管理サーバコンポーネント用設定ファイル
AgentSetup.exe	管理対象マシンコンポーネント用インストーラ
AgentSetup.ini	管理対象マシンコンポーネント用設定ファイル
└ dotNet Framework40¥	.NET Framework 4 再頒布可能パッケージ, Windows Installer 4.5 Redistributable
└ ja¥	.NET Framework 4 日本語 Language Pack
└ SQLEXPRESS¥	SQL Server 2012 Express
└ DPM¥	DeploymentManager, Java 2 Runtime Environment
└ SMM¥	ESMPRO/ServerManager
└ RMP¥	SystemMonitor性能監視
└ PVM¥	SystemProvisioning
└ OpsMgrConnector¥	System Center Operations Manager 2007 コネクタ

2. インストールを実行する

本章では、SigmaSystemCenter のインストール手順について説明します。管理サーバコンポーネントと管理対象マシンコンポーネントを、個別でインストールする場合と一括でインストールする場合について説明します。

本章で説明する項目は以下の通りです。

- 2.1 インストールを始める前に.....8
- 2.2 管理サーバコンポーネントのインストール..... 15
- 2.3 管理サーバコンポーネントを個別にインストールする..... 16
- 2.4 管理サーバコンポーネントを一括でインストールする..... 27
- 2.5 管理サーバコンポーネントをインストールした後に..... 31
- 2.6 管理対象マシンコンポーネントのインストール..... 33
- 2.7 Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへインストーラ画面からインストールする..... 35
- 2.8 Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへインストーラ画面表示なしでインストールする 40
- 2.9 Windows Server 2008 Server Core / Windows Server 2012 Server Core 管理対象マシンへインストールする..... 43
- 2.10 Linux 管理対象マシンへインストールする..... 44

2.1. インストールを始める前に

SigmaSystemCenter 3.1 のインストールを始める前に、本節をよく読んでください。

2.1.1. システムの構成 / 動作環境の確認

SigmaSystemCenter は、インストールする機能を、管理サーバ、管理対象マシンの構成に基づき、インストールする必要があります。機能に関する情報や、システム構成に関しては、「SigmaSystemCenter ファーストステップガイド」の「2.1. SigmaSystemCenter のシステム構成の検討」を参照してください。

また、インストールを始める前に、必ず最新の動作環境がご利用の環境に適しているか確認する必要があります。最新の動作環境に関しては、「SigmaSystemCenter ファーストステップガイド」の「3. 動作環境」を参照してください。

SigmaSystemCenter 3.1 update 1 は、ESMPRO/ServerManager Ver. 5.52 以降に対応しています。SigmaSystemCenter インストーラ以外から ESMPRO/ServerManager をインストールして使用される場合は、Ver. 5.52 以降であることを確認してください。

2.1.2. 管理サーバに事前にインストールが必要なソフトウェア

SigmaSystemCenter を管理サーバにインストールする前に、別途インストールが必要なソフトウェアがあります。

管理サーバには、以下のソフトウェアが必要です。

- ◆ .NET Framework 4
- ◆ インターネットインフォメーションサービス (IIS)
- ◆ ASP.NET v2.0 (Windows Server 2012 の場合は、ASP.NET 3.5)
- ◆ ASP.NET v4.0 (Windows Server 2012 の場合は、ASP.NET 4.5)

<Windows Server 2008 / Windows Server 2008 R2 の場合>

注:

- .NET Framework 4 は、SigmaSystemCenter のインストーラからインストールされるため、別途インストールは不要です。
 - ASP.NET v4.0 は、IIS がインストールされている環境に .NET Framework 4 をインストールした際に自動でインストールされるため、別途インストールは不要です。
-

DPM サーバ、および SystemProvisioning をインストールする場合は、下記のインストール手順に従ってインストールしてください。

- ◆ インターネットインフォメーションサービス (IIS)、および ASP.NET v2.0 のインストール手順
 1. [サーバー マネージャ] を起動します。
 2. 左ペインの [役割] を右クリックし、[役割の追加] を選択します。
 3. 「役割の追加」ウィザードが表示されます。
 4. 左ペインの [サーバーの役割] をクリックします。
 5. [Web サーバー (IIS)] チェックボックスをオンにして、[次へ(N)] をクリックします。
 6. 「Web サーバー (IIS)」画面で [次へ(N)] をクリックします。
 7. 「役割サービスの選択」画面で、[静的なコンテンツ] チェックボックス、[ASP.NET] チェックボックス、[IIS 管理コンソール] チェックボックス、および [IIS 6 メタベース 互換] チェックボックスをオンにして、[次へ(N)] をクリックします。
 8. 「インストール オプションの確認」画面で [インストール(I)] をクリックします。インストールが開始されます。
 9. 「インストールの結果」画面で [閉じる(O)] をクリックします。

注: 既に「Web サーバー (IIS)」がインストールされている場合は、「Web サーバー (IIS)」の [役割サービス] で、[静的なコンテンツ]、[ASP.NET]、[IIS 管理コンソール]、および [IIS 6 メタベース互換] のすべてをインストールしてください。

<Windows Server 2012 の場合>

注: Windows Server 2012 の場合は、既定で .NET Framework 4.5 がインストールされているため、別途インストールは不要です。

DPM サーバ、および SystemProvisioning をインストールする場合は、下記のインストール手順に従ってインストールしてください。

- ◆ インターネットインフォメーションサービス (IIS)、および ASP.NET 3.5、および ASP.NET 4.5 のインストール手順

注: .NET Framework 3.5 Feature、ASP.NET 3.5 は DPM サーバをインストールする場合に必要です。DPM サーバをインストールせず、SystemProvisioning をインストールする場合は、インストールする必要はありません

1. [サーバー マネージャ] を起動します。
2. 左ペインの [ダッシュボード] をクリックし、[役割と機能の追加] を選択します。
3. 「役割と機能の追加」ウィザードが表示されますので、[次へ(N)] をクリックします。
4. 「インストールの種類を選択」画面が表示されますので、[役割ベースまたは機能ベースのインストール] をオンにし、[次へ(N)] をクリックします。
5. 「対象サーバーの選択」画面が表示されますので、該当するマシンを選択して [次へ(N)] をクリックします。

6. [役割] プルダウンボックスから [Web サーバー (IIS)] チェックボックスをオンにします。
7. 「Web サーバー (IIS) に必要な機能を追加しますか？」画面が表示されますので、[機能の追加] をクリックします。
8. 「サーバーの役割の選択」画面に戻りますので、[次へ(N)] をクリックします。
9. 「機能の選択」画面が表示されます。DPM サーバをインストールする場合は、[機能] プルダウンボックスから [.NET Framework 3.5 Features] チェックボックスをオンにし、[次へ(N)] をクリックします。
10. 「Web サーバーの役割 (IIS)」画面が表示されますので、[次へ(N)] をクリックします。
11. 「役割サービスの選択」画面が表示されます。以下のチェックボックスをオンにして、[次へ(N)] をクリックします。
 - [Web サーバー] - [HTTP 共通機能] - [静的なコンテンツ] チェックボックス
 - (DPM サーバをインストールする場合のみ)
 - [Web サーバー] - [アプリケーション開発] - [ASP.NET 3.5] チェックボックス
 - [Web サーバー] - [アプリケーション開発] - [ASP.NET 4.5] チェックボックス
 - [管理ツール] - [IIS 管理コンソール] チェックボックス
 - [管理ツール] - [IIS6 管理互換] - [IIS 6 メタベース互換] チェックボックス

注: 既に「Web サーバー (IIS)」がインストールされている場合は、「Web サーバー (IIS)」の [役割サービスの追加] で、[静的なコンテンツ]、[ASP.NET 3.5]、[ASP.NET 4.5]、[IIS 6 メタベース互換]、および [IIS 管理コンソール] のすべてをインストールしてください。

12. 「インストール オプションの確認」画面が表示されます。[.NET Framework 3.5 Features] チェックボックスをオンにした場合は、[代替ソース パスの指定] をクリックします。それ以外の場合は、手順 14 に進んでください。
13. 「代替ソース パスの指定」画面が表示されますので、[パス] に Windows Server 2012 インストールメディアのサイド バイ サイド ストア (SxS) フォルダーを指定して、[OK] をクリックします。
14. 「インストール オプションの確認」画面で、[インストール(I)] をクリックします。インストールが開始されます。
15. インストールが完了したら、[閉じる] をクリックします。

2.1.3. DHCPサーバの構築

DPM を使用する場合には、DPM サーバと同一のネットワーク内に DHCP サーバが必要で
す。DHCP サーバを設置しない場合、SigmaSystemCenter の一部の機能が制限されま
す。SigmaSystemCenter をインストールする前に DHCP サーバを準備してください。

詳細、および DHCP サーバの設定方法については、「DeploymentManager ファーストステップガイド」の「2.2.1 ネットワーク環境について」、および「DeploymentManager インストールガイド」の「1.2.2 DHCP サーバを設定する」を参照してください。

2.1.4. Windowsファイアウォールの設定に関する注意

- ◆ "Windows Firewall / Internet Connection Sharing (ICS)" サービスが開始状態の場合、インストーラの設定で Windows ファイアウォールの例外リストにプログラム、またはポートを追加するように指定すると、インストーラは例外リストにプログラム、またはポートを追加します。
- ◆ SigmaSystemCenter をインストールした後に、Windows ファイアウォールを使用するように変更する場合は、手動で例外リストにプログラム、またはポートを追加してください。詳細は、「付録 A ネットワークとプロトコル」を参照してください。

2.1.5. インストール実行前の注意

SigmaSystemCenter のインストールを始める前に、必ず使用しているアプリケーション、および Web ブラウザをすべて終了してください。

2.1.6. Windows Vista以降、またはWindows Server 2008 以降にインストールする際の注意

Windows Vista 以降、または Windows Server 2008 以降の環境でインストーラを実行すると、「ユーザー アカウント制御」画面が表示される場合があります。その場合、[許可] をクリックして、続行してください。

2.1.7. ESMPRO/ServerManagerユーザグループ設定に関する注意

セキュリティ上の理由から、ESMPRO/ServerManager で Windows GUI を使用するユーザは、「ESMPRO ユーザグループ」と呼ばれるグループに属していなければなりません。

「ESMPRO ユーザグループ」は ESMPRO/ServerManager のインストール時に決定されます。既定では Administrators グループが指定されますが、任意のグループを指定することもできます。

任意のグループを指定する場合は、ESMPRO/ServerManager をインストールする前に、Windows のユーザ / グループ管理機能を使用してユーザグループを作成しておき、インストール時にそのグループを指定してください。

このセキュリティ機能をより有効にするために、ESMPRO/ServerManager は NTFS のドライブにインストールすることを推奨します。

なお、「ESMPRO ユーザグループ」をグローバルグループとして登録する場合は、同じ名前のローカルグループが存在しないようにしてください。また、バックアップドメインコントローラの場合は、必ずグローバルグループ指定するようにしてください。

2.1.8. DPMサーバのインストールに関する注意

- ◆ DHCP サーバを使用する場合、1つのネットワークセグメントを複数の DPM サーバで管理することはできません。
- ◆ DPM サーバと NetvisorPro を同一マシンにインストールする場合、DPM と NetvisorPro の TFTP サービスの連携設定を行う必要があります。

連携設定を行わないと、互いの TFTP サービスが競合し、正常に動作しない場合があります。

詳細、およびインストール時の設定については、「DeploymentManager インストレーションガイド」の「付録 E DPM サーバと NetvisorPro V を同一マシンで使用する」、および NetvisorPro のユーザーズガイドの手順を参照してください。

- ◆ DPM サーバのインストールを行う際には、管理用 LAN とのネットワークが接続されていることを確認して行ってください。
ネットワークが接続されていない状態でインストールを行った場合は、初期設定に失敗し、DPM サーバのインストールが失敗する可能性があります。この場合、DPM サーバのインストール直前までロールバックが行われます。再度、SigmaSystemCenter インストーラから DPM サーバ、およびインストールが実施されていないコンポーネントのインストールを行ってください。
- ◆ DPM サーバをインストールするマシンは、コントロールパネルの [ネットワーク接続] から固定 IP アドレスを設定してください。
- ◆ その他の注意については、「DeploymentManager インストレーションガイド」の「2.1 DPM サーバをインストールする」を参照してください。

2.1.9. SQL Server 2012 Express以外のSQL Serverを使用する場合

SigmaSystemCenter は、本製品に同梱された SQL Server 2012 Express を既定でインストールしますが、事前に SQL Server 2005 / 2008 / 2008 R2 / 2012 のインスタンスをインストールしておく、そのインスタンスを使用することができます。

注:

- SQL Server 2005 は、以前のバージョンからアップグレードに際してのみ、使用をサポートします。
 - SQL Server 2005 / 2008 / 2008 R2 / 2012 の上位エディションをインストールすると、データベースの復旧モデルは既定で「完全」に設定されます。このため、ジャーナルログが記録されるようになり、データベースが増加します。対処として、単純復旧モデルに設定するようにしてください。
-

1. SigmaSystemCenter をインストールするまでの事前準備

SQL Server 2012 Express 以外の SQL Server を使用する場合は、SigmaSystemCenter をインストールする前に SQL Server のインスタンスをインストールします。

以下の表は、各コンポーネントが使用する SQL Server のインスタンスとなります。

コンポーネント	インスタンス名
SystemProvisioning、および SystemMonitor性能監視	SSCCMDB (既定値)
DeploymentManager	DPMDBI (固定値)

注:

- SystemProvisioning、および SystemMonitor 性能監視が使用する SQL Server のインスタンスをインストールする場合、「機能の選択」画面で、[データベースエンジンサービス] を選択してください。
- DeploymentManager が使用する SQL Server のインスタンスをインストールする場合、「機能の選択」画面で、[データベースエンジンサービス]、および [SQL Server レプリケーション] を選択してください。また、インスタンス名は必ず "DPMDBI" にする必要があります。

DPMDBI インスタンスが既に存在する場合は、DPM サーバのインストーラが DPMDBI インスタンスにデータベースを構築します。

2. SigmaSystemCenter をインストール

- SystemProvisioning、および SystemMonitor 性能監視の場合
SigmaSystemCenter をインストールする際に、SystemProvisioning、および SystemMonitor 性能監視のインスタンスを指定します。SigmaSystemCenter をインストールする方法は以下となります。
 - 管理サーバコンポーネントを個別にインストールする場合
SigmaSystemCenter インストールウィザードの「SQL Server 情報の設定 ("既に存在する SQL Server 2005 / 2008 / 2012 インスタンスを使用する")」画面 から、インスタンス名を指定してください。詳細については、「2.3.4 SQL Server 情報の設定」を参照してください。
 - 管理サーバコンポーネントを一括でインストールする場合
オプション "/INSTANCENAME" にインスタンス名を指定して、SigmaSystemCenter インストーラを実行してください。詳細については、「2.4.1 インストールを実行するには」を参照してください。
- DeploymentManager の場合
SigmaSystemCenter をインストールする際の設定は特にありません。

2.1.10. 管理サーバのインストールに関する注意

SigmaSystemCenter 管理サーバをドメインコントローラにすることはできません。

SigmaSystemCenter は、データベースとして SQL Server を使用します。

Microsoft 社が、SQL Server のドメインコントローラへのインストールを推奨していないため、SigmaSystemCenter として管理サーバをドメインコントローラにすることは推奨できません。

詳細は、以下を参照してください。

- ◆ SQL Server 2005 をご使用の場合
[http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/ms144228\(v=SQL.90\)](http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/ms144228(v=SQL.90))
- ◆ SQL Server 2008 をご使用の場合
[http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/ms143506\(v=SQL.100\)](http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/ms143506(v=SQL.100))
- ◆ SQL Server 2008 R2 をご使用の場合
[http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/ms143506\(v=SQL.105\)](http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/ms143506(v=SQL.105))
- ◆ SQL Server 2012 をご使用の場合
[http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/ms143506\(v=sql.110\)](http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/ms143506(v=sql.110))

2.2. 管理サーバコンポーネントのインストール

次節以降では、管理サーバコンポーネントをインストールする手順を説明します。

管理サーバコンポーネントを個別にインストールする場合は、「2.3 管理サーバコンポーネントを個別にインストールする」を参照してください。

すべての管理サーバコンポーネントを一括でインストールする場合は、「2.4 管理サーバコンポーネントを一括でインストールする」を参照してください。

管理サーバコンポーネントのインストール完了後に別途設定が必要な場合があります。すべてのコンポーネントのインストールが完了した後、「2.5 管理サーバコンポーネントをインストールした後に」を参照し、必要に応じて設定してください。

2.3. 管理サーバコンポーネントを個別にインストールする

管理サーバへ管理サーバコンポーネントを個別にインストールする手順を説明します。

オプション、パラメータを指定せずにインストーラ (ManagerSetup.exe) を起動すると、各コンポーネントをインストールするためのウィザードが開始します。

コンポーネントを個別にインストールする場合、本節を参照し、必要なコンポーネントをインストールしてください。

2.3.1. インストールを実行するには

1. SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R を DVD/CD-RW ドライブに挿入します。
2. コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行し、インストーラを起動します。

インストール DVD-R: ¥ManagerSetup.exe

3. インストーラが起動し、ウィザードが開始します。



ウィザードに従ってインストールを実行してください。

「2.3.2 コンポーネントの選択」～「2.3.9 インストールの完了」では、各ウィザード画面の流れに沿って説明します。

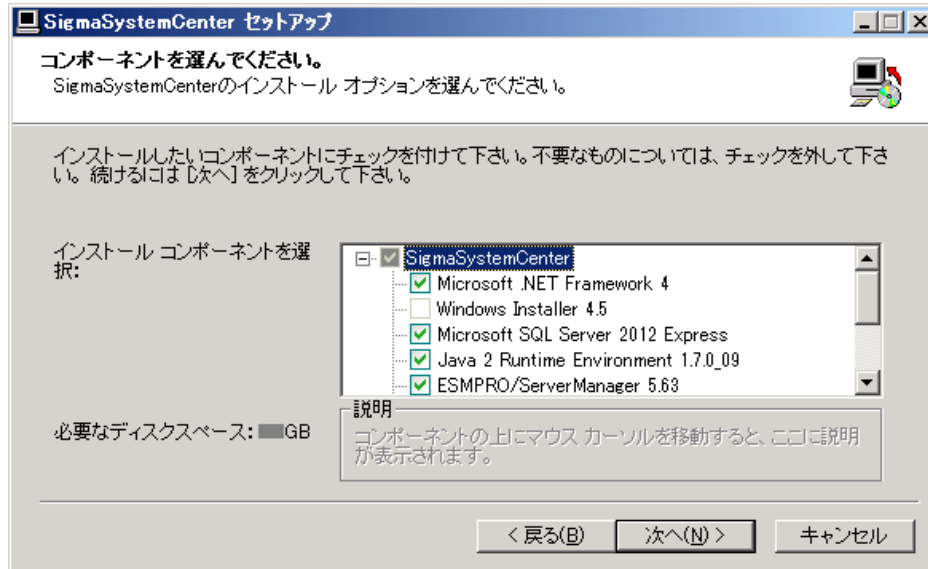
2.3.2. コンポーネントの選択

「コンポーネントの選択」画面が表示されます。

インストールするコンポーネントを選択してください。

本バージョンのコンポーネントが既にインストールされている場合は選択できません。

選択完了後、[次へ(N)>] をクリックします。



SigmaSystemCenter	この項目を選択した場合、以下の選択可能なすべてのコンポーネントが自動的に選択されます。
.NET Framework 4	.NET Framework 4をインストールします。
Windows Installer 4.5	Windows Installer 4.5をインストールします。
SQL Server 2012 Express	SQL Server 2012 Expressをインストールします。
Java 2 Runtime Environment	Java 2 Runtime Environmentをインストールします。
ESMPRO/ServerManager	ESMPRO/ServerManagerをインストールします。 この項目を選択した場合、[.NET Framework 4] も自動的に選択されます。
DPM サーバ	DPMサーバをインストールします。 この項目は、IISがインストールされている場合のみ選択可能です。 この項目を選択した場合、[.NET Framework 4]、[Windows Installer 4.5]、および [Java 2 Runtime Environment] も自動的に選択されます。
SystemMonitor 性能監視	SystemMonitor性能監視をインストールします。 この項目を選択した場合、[.NET Framework 4]、[Windows Installer 4.5]、および [SQL Server 2012 Express] も自動的に選択されます。 既に存在するSQL Server 2005 / 2008 / 2008 R2 / 2012 インスタンスを使用する場合、手動で [SQL Server 2012 Express] チェックボックスをオフにしてください。

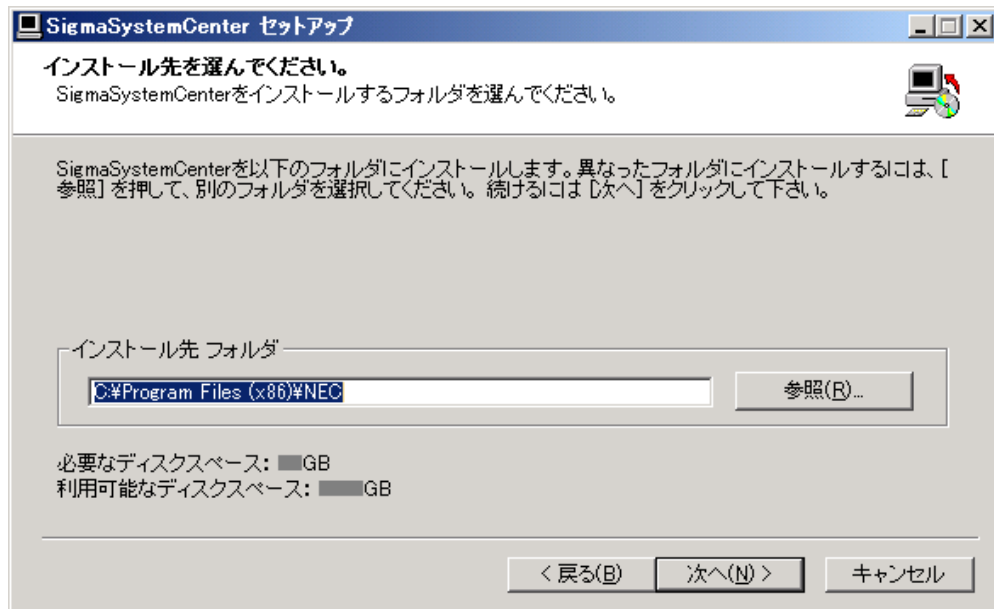
2 インストールを実行する

SystemProvisioning	SystemProvisioningをインストールします。 IISがインストールされている場合のみ選択可能です。 この項目を選択した場合、[.NET Framework 4]、 [Windows Installer 4.5]、および [SQL Server 2012 Express] も自動的に選択されます。 既に存在するSQL Server 2005 / 2008 / 2008 R2 / 2012 インスタンスを使用する場合、手動で [SQL Server 2012 Express] チェックボックスをオフにしてください。
---------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

2.3.3. インストール先フォルダの選択

「2.3.2 コンポーネントの選択」で ESMPRO/ServerManager、DPM サーバ、SystemMonitor 性能監視、および SystemProvisioning を選択していた場合、「インストール先フォルダの設定」画面が表示されます。

コンポーネントのインストール先フォルダを指定し、[次へ(N)>] をクリックします。



インストール先フォルダ	ESMPRO/ServerManager、DPMサーバ、 SystemMonitor性能監視、およびSystemProvisioningの インストール先フォルダを指定します。 80文字まで入力できます。 ただし、ESMPRO/ServerManagerをインストールする場 合は、Unicode特有の文字を含むフォルダは指定しないで ください。 既定値は x86 OSでは (%ProgramFiles%\%NEC) x64 OSでは (%ProgramFiles(x86)\%NEC) です。
--------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

注:

- ・ Java 2 Runtime Environment はインストール先フォルダの変更はできません。
- ・ x64 OS では、インストール先フォルダに%ProgramFiles%を指定することはできません。

2.3.4. SQL Server情報の設定

「2.3.2 コンポーネントの選択」で、SystemMonitor 性能監視、SystemProvisioningを選択していた場合、「SQL Server 情報の設定」画面が表示されます。また、SQL Server 2012 Express の選択 / 非選択によって、設定画面が異なります。

SystemMonitor 性能監視、および SystemProvisioning が使用する SQL Server 情報の設定を行い、[次へ(N)>] をクリックします。

注: [SQL Server 2012 Express をインストールする]、[既に存在する SQL Server 2005 / 2008 / 2012 インスタンスを使用する] の有効の切り替えをするには、「2.3.2 コンポーネントの選択」まで戻って [SQL Server 2012 Express] チェックボックスを変更してください。

◆ SQL Server 2012 Express を選択した場合

SQL Server 2012 Express をインストールする

ローカルマシン上に新規にSQL Server 2012 Expressのインスタンスをインストールします。この画面では、以下のSQLの情報が指定できます。Windows認証モードでインストールされます。「2.3.2 コンポーネントの選択」で [SQL Server 2012 Express] を選択した場合、この項目が有効になります。

2 インストールを実行する

インスタンス名	SQLのインスタンス名を指定します。 16文字まで入力できます。 既定値は (SSCCMDB) です。
インストール先フォルダ	SQLのインストール先フォルダを指定します。 57文字まで入力できます。 既定値は (%ProgramFiles%\Microsoft SQL Server) です。 x64 OSで、インストールするSQL Serverの指定にSQL Server 2012 x86を選択した場合の既定値は (%ProgramFiles(x86)\Microsoft SQL Server)です。
データベースのインストール先フォルダ	SQLのデータベースのインストール先フォルダを指定します。 57文字まで入力できます。 既定値は (%ProgramFiles%\Microsoft SQL Server) です。 x64 OSで、インストールするSQL Serverの指定にSQL Server 2012 x86を選択した場合の既定値は (%ProgramFiles(x86)\Microsoft SQL Server)です。 実際のインストール先パスは "指定したインストール先フォルダ\MSSQL11.<インスタンス名>\MSSQL\Data" になります。
インストールする SQL Server の指定	インストールするSQL Serverを指定します。 この項目は、x86 OSでは入力不可です。
SQL Server 2012 x64	ローカルマシン上にx64アーキテクチャのSQL Server 2012 Expressをインストールします。 既定で選択されています。
SQL Server 2012 x86	ローカルマシン上にx86アーキテクチャのSQL Server 2012 Expressをインストールします。

注:

- ・ [SQL Server 2012 Express をインストールする] が有効になっている状態で、[インスタンス名] に指定したのと同じ名前のインスタンスが既に存在している場合、新規にSQLのインスタンスはインストールされません。
- ・ DPM が使用する SQL インスタンスのインストール先フォルダを指定することはできません。"%ProgramFiles%\Microsoft SQL Server" 固定です。

◆ SQL Server 2012 Express を選択していない場合



<p>既に存在する SQL Server 2005 / 2008 / 2012 インスタンスを使用する</p>	<p>ローカルマシン上にSQL Server 2005 / 2008 / 2012 がインストールされている場合、既存のインスタンスにデータベースを作成します。この画面では、以下のSQLの情報が指定できます。</p> <p>「2.3.2 コンポーネントの選択」で [SQL Server 2012 Express] を選択していない場合、この項目が有効になります。</p>
<p>インスタンス名</p>	<p>SQLのインスタンス名を指定します。</p> <p>16文字まで入力できます。</p> <p>既定値は (SSCCMDB) です。</p>

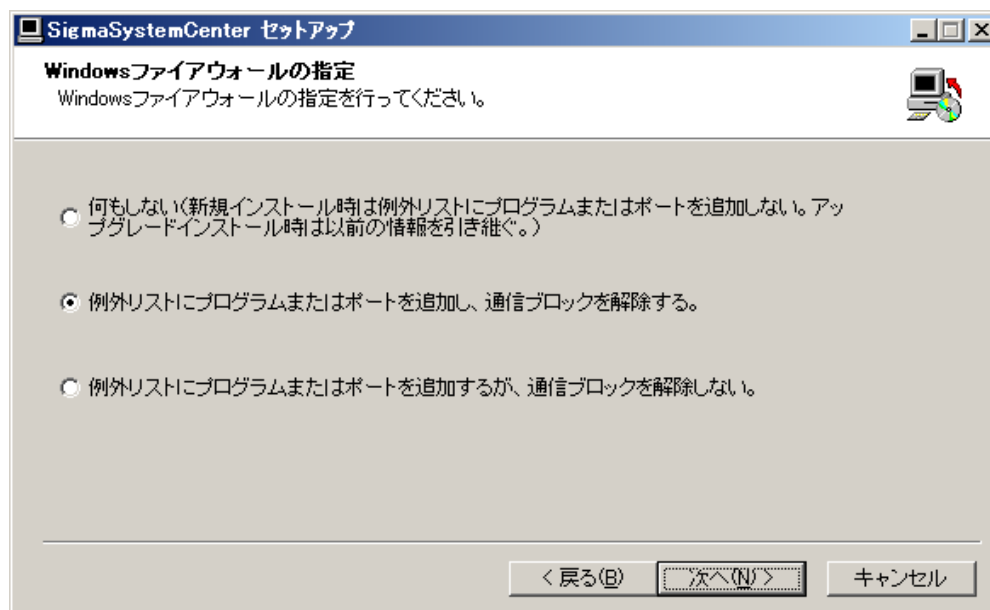
注: [既に存在する SQL Server 2005 / 2008 / 2012 インスタンスを使用する] が有効になっている状態で、[インスタンス名] に指定したのと同じ名前のインスタンスが存在していない場合、[次へ(N)>] をクリックすると、「指定されたインスタンスは存在しません。」というメッセージが表示されます。インスタンスをインストールする場合、「2.3.2 コンポーネントの選択」まで戻って [SQL Server 2012 Express] を選択してください。

2.3.5. Windowsファイアウォールの指定

「2.3.2 コンポーネントの選択」で ESMPRO/ServerManager、DPM サーバ、SystemMonitor 性能監視、および SystemProvisioning を選択していた場合、「Windows ファイアウォールの指定」画面が表示されます。

項目を指定し、[次へ(N)>] をクリックします。

2 インストールを実行する

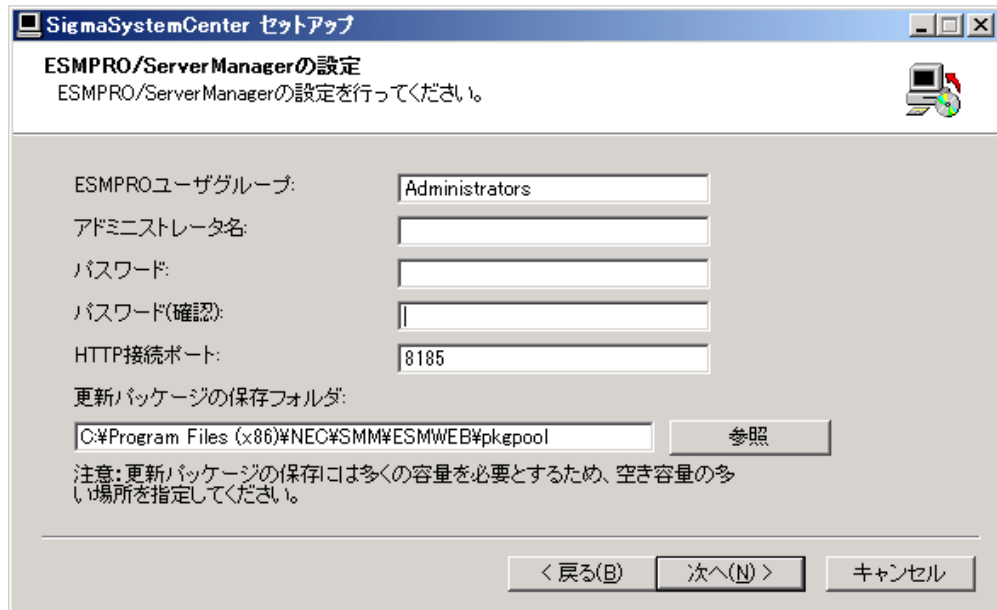


何もしない (新規インストール時は例外リストにプログラムまたはポートを追加しない。アップグレードインストール時には以前の情報を引き継ぐ。)	この項目を選択した場合、新規インストール時に例外リストにプログラム、またはポートを追加しません。後に手動で例外リストにプログラム、またはポートを追加する必要があります。詳細は、「付録 A ネットワークとプロトコル」を参照してください。
例外リストにプログラムまたはポートを追加し、通信ブロックを解除する。	この項目を選択した場合、例外リストにプログラム、またはポートを追加し、通信ブロックを解除します。既定で選択されています。
例外リストにプログラムまたはポートを追加するが、通信ブロックを解除しない。	この項目を選択した場合、例外リストにプログラム、またはポートを追加しますが、通信ブロックは解除しません。後に手動で通信ブロックを解除する必要があります。

2.3.6. ESMPRO/ServerManagerの設定

「2.3.2 コンポーネントの選択」で ESMPRO/ServerManager を選択していた場合、「ESMPRO/ServerManager の設定」画面が表示されます。

ESMPRO/ServerManager をインストールするにあたって必要な情報を設定してください。設定完了後、[次へ(N)>] をクリックします。



ESMPRO ユーザグループ	ESMPRO/ServerManagerのWindows GUIに適切な許可を与えるグループを指定します。 既定ではAdministratorsグループが指定されます。 詳細については「2.1.7 ESMPRO/ServerManagerユーザグループ設定に関する注意」を参照してください。
アドミニストレータ名	ESMPRO/ServerManagerの管理者を指定します。アドミニストレータ名は1～16文字までの半角英数字を入力してください。
パスワード	ESMPRO/ServerManagerにログインするためのパスワードを指定します。パスワードは6～16文字までの半角英数字を入力してください。
パスワード (確認)	確認のため同じパスワードを再入力します。
HTTP 接続ポート	ESMPRO/ServerManagerが使用するHTTP接続ポートを指定します。HTTP接続ポートは1～65535の範囲の値を入力してください。 既定値は (8185) です。
更新パッケージの保存フォルダ	更新パッケージを保存するフォルダを指定します。更新パッケージの保存フォルダには、十分な空き容量を用意してください。 更新パッケージの保存フォルダには、ExpressUpdate機能で使用するファームウェアやソフトウェアの更新パッケージが格納されます。 既定値は (ESMPRO/ServerManagerインストールフォルダ\ESMWEB\pkgpool) です。

注: ESMPRO/ServerManager のインストールフォルダの既定値は以下の通りです。

x86 OS では (%ProgramFiles%\NEC\SMM)

x64 OS では (%ProgramFiles(x86)\NEC\SMM)

2.3.7. DPMの設定

「2.3.2 コンポーネントの選択」で DPM サーバを選択していた場合、「DPM サーバの設定」画面が表示されます。

DPM サーバをインストールするにあたって必要な情報を設定してください。

設定完了後、[次へ(N)>] をクリックします。



管理サーバ IP アドレス	管理サーバIPアドレスを指定します。 以下のいずれかを選択してください。 「ANY」：管理サーバに搭載されているすべてのLANボードをDPMサーバで使用可能とする場合に選択します。 「使用するLANボードに設定しているIPアドレス」：DPMサーバに搭載されている特定のLANボードをDPMサーバで使用可能とする場合に選択します。
DHCP サーバ	DHCPサーバを使用するかどうかを設定します。
DHCP サーバを使用する	DPMのすべての機能を利用するために、通常はこちらを選択してください。既定で選択されています。
DHCP サーバを使用しない	一部機能が利用できません。詳細は、「DeploymentManagerファーストステップガイド」の「付録 B DHCPサーバの導入が困難なお客様へ」を参照してください。
インストールする SQL Server の指定	インストールするSQL Serverを指定します。 この項目は、x86 OSでは入力不可です。
SQL Server 2012 x64	ローカルマシン上にx64アーキテクチャのSQL Server 2012 Expressをインストールします。 既定で選択されています。

SQL Server 2012 x86	ローカルマシン上にx86アーキテクチャのSQL Server 2012 Expressをインストールします。
---------------------	--------------------------------------------------------

2.3.8. インストールの開始

選択したコンポーネントのインストール実行前に、確認のダイアログボックスが表示されます。

[インストール] をクリックするとインストールが開始します。



- ◆ .NET Framework 4、Windows Installer 4.5、SQL Server 2012 Express、または DPM サーバを選択していた場合

.NET Framework 4、Windows Installer 4.5、SQL Server 2012 Express、または DPM サーバのインストール終了後にシステムの再起動が必要な場合は、システムの再起動を促すダイアログボックスが表示されます。

[はい(Y)] をクリックした場合、自動的にシステムの再起動が実施されます。

[いいえ(N)] をクリックした場合、インストーラが終了しますので、手でシステムの再起動を行ってください。コンポーネントのインストールを続行する前に必ずシステムの再起動を行ってください。

再起動後は、「2.3.1 インストールを実行するには」の手順を再度実行して、残りのコンポーネントのインストールを完了してください。
- ◆ ESMPRO/ServerManager を選択していた場合

インストール完了後、環境によっては「このプログラムは正しくインストールされなかった可能性があります」のメッセージが表示される場合があります。

インストールは正常に完了していますので、[このプログラムは正しくインストールされました]、または [キャンセル] をクリックして終了してください。

2.3.9. インストールの完了

選択したすべてのコンポーネントのインストール後、「完了」画面が表示されます。
システムの再起動を促すダイアログボックスが表示された場合は、システムを再起動してください。

以上で管理サーバコンポーネントの個別のインストールは完了です。
「2.5 管理サーバコンポーネントをインストールした後に」を参照し、必要に応じてインストール後の設定を行ってください。

2.4. 管理サーバコンポーネントを一括でインストールする

管理サーバへ管理サーバコンポーネントを一括でインストールする手順を説明します。
インストールオプションとパラメータを指定してインストーラを実行すると、各コンポーネントはウィザードなしでインストールされます。
コンポーネントを一括でインストールする場合、本節を参照し、インストールしてください。

2.4.1. インストールを実行するには

1. SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R を DVD/CD-RW ドライブに挿入します。
2. コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行し、インストールを開始します。

```
インストール DVD-R:¥ManagerSetup.exe /S  
[ /INSTANCENAME=" InstanceName " ]  
[ /FIREWALL=x ] [ /MANAGEMENTSERVERIP=" xxx.xxx.xxx.xxx " ]  
/ADMINNAME=" AdminName " /PASSWORD=" Password "  
[ /D=InstallPath ]
```

例) D:¥ ManagerSetup.exe /S
/INSTANCENAME="SSCCMDB"
/FIREWALL=1 /MANAGEMENTSERVERIP="192.168.1.1"
/ADMINNAME="user" /PASSWORD="password" /D=C:¥Program Files¥NEC

注:

- ・ オプション "/D" に指定するパスには、二重引用符 ("") を含めないでください。
正しい例: 「/D=C:¥Program Files¥NEC」
NG の例: 「/D="C:¥Program Files¥NEC"」
 - ・ オプション "/D" は、必ずコマンドライン指定の最後に指定してください。
 - ・ オプション "/ADMINNAME"、"/PASSWORD" は基本的に必須です。ただし、既に ESM/ServerManager Ver5 以降がインストールされている場合は指定しないでください。
 - ・ コマンドプロンプトで、「ManagerSetup.exe /S <その他のオプション>」を実行すると、すぐにプロンプトが表示され、インストールが終了したように見えます。コマンドプロンプトで、「cmd /c "ManagerSetup.exe /S <その他のオプション>"」を実行すると、インストール処理が終了するまでプロンプトが表示されないようにすることができます。
-

2 インストールを実行する

オプション	説明
/S	一括でインストールを行います。
/INSTANCENAME	SystemMonitor性能監視、および SystemProvisioningが使用するSQLのインスタンス名を指定します。 16文字まで指定できます。 このオプションが指定されていない場合、既定値 (SSCCMDB) が使用されます。
/FIREWALL	DPMサーバ、SystemMonitor性能監視、SystemProvisioning、および ESMPRO/ServerManagerに関するWindowsファイアウォールの指定を行います。x以下いずれかの値を指定します。 このオプションが指定されていない場合、既定値 (1) が使用されます。
0	このオプションを選択した場合、新規インストール時に例外リストにプログラム、またはポートを追加しません。 後に手動で例外リストにプログラム、またはポートを追加する必要があります。詳細は、「付録 A ネットワークとプロトコル」を参照してください。
1	このオプションを選択した場合、例外リストにプログラム、またはポートを追加し、通信ブロックを解除します。 既定で選択されています。
2	このオプションを選択した場合、例外リストにプログラム、またはポートを追加しますが、通信ブロックは解除しません。 後に手動で通信ブロックを解除する必要があります。
/MANAGEMENTSERVERIP	DPMサーバのIPアドレスを指定します。 このオプションが指定されていない場合、DPMサーバが使用するIPアドレスとして、接続されているすべてのIPアドレスが割り当てられます。
/ADMINNAME	ESMPRO/ServerManagerの管理者を指定します。 アドミニストレータ名は1~16文字までの半角英数字を入力してください。(必須 ※1)
/PASSWORD	ESMPRO/ServerManagerにログインするためのパスワードを指定します。 パスワードは6~16文字までの半角英数字を入力してください。(必須 ※1)

/D	<p>DPMサーバ、ESMPRO/ServerManager、SystemMonitor性能監視、およびSystemProvisioningのインストール先パスを指定します。</p> <p>80文字まで指定できます。</p> <p>ただし、ESMPRO/ServerManagerをインストールする場合は、Unicode特有の文字を含むフォルダは指定しないでください。</p> <p>このオプションが指定されていない場合、既定値は x86 OSでは (%ProgramFiles%¥NEC) x64 OSでは (%ProgramFiles(x86)%¥NEC) が使用されます。</p>
----	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

※1 基本的に必須です。ただし、既にESMPRO/ServerManager Ver5以降がインストールされている場合は指定しないでください。

オプション "/S" が指定されていない場合、ウィザードが開始します。この場合、個別インストールとなります。ウィザードに従い個別インストールを進めるか、[キャンセル] をクリックし、一括インストールを再度実行してください。

注:

- ・ 指定必須のオプションが指定されていない場合、インストールは実施されず、中断します。この場合、オプションを正しく指定して再度実行してください。
- ・ SystemMonitor 性能監視、SystemProvisioning が使用する SQL インスタンス、および DeploymentManager が使用する SQL インスタンスは、既定値のパス (%ProgramFiles%¥Microsoft SQL Server) にインストールされます。インストール先フォルダを任意に指定することはできません。また、x64 OS では、ローカルマシン上に x64 アーキテクチャの SQL Server 2012 Express がインストールされます。
- ・ x64 OS では、インストール先フォルダに%ProgramFiles%を指定することはできません。

3. インストールが開始されます。

最初に.NET Framework 4、および Windows Installer 4.5 がインストールされます。

.NET Framework 4、Windows Installer 4.5、SQL Server 2012 Express、および DPM サーバのインストール終了後、システムの再起動が必要な場合はシステムの再起動を促すダイアログボックスが表示されます。

[はい(Y)] をクリックした場合、自動的にシステムの再起動が実施されます。

[いいえ(N)] をクリックした場合、インストーラが終了しますので、手動でシステムの再起動を行ってください。残りのコンポーネントをインストールする前に必ずシステムの再起動を行ってください。

再起動後は、2.の手順に従って再度インストールを実行してください。

コンポーネントのインストール中に画面が表示される場合がありますが、操作は不要で、インストール処理は継続して正常に動作します。

2 インストールを実行する

インストーラは下記の表の終了コードで終了します。インストーラは、インストーラのログと終了コードを以下のファイルに記録します。

<Windows Server 2008 以降の場合>

```
%USERPROFILE%\%AppData%\Local\%SSC%\SetupProvisioning.log
```

注: 以下の方法でログを参照することができます。

1. コマンドプロンプトでカレントディレクトリを移動します。

```
cd %USERPROFILE%\%AppData%\Local\%SSC
```

2. メモ帳でログファイルを開きます。

```
notepad SetupProvisioning.log
```

	終了コード		インストール対象コンポーネント	順番
	再起動不要	再起動必要		
成功	0	64	—	—
エラー ※1	32	96	—	—
エラー ※2	1	65	.NET Framework 4	1
エラー ※2	2	66	Windows Installer 4.5	2
エラー ※2	3	67	SQL Server 2012 Express	3
エラー ※2	4	68	Java 2 Runtime Environment	4
エラー ※2	5	69	ESMPRO/ServerManager	5
エラー ※2	6	70	DPMサーバ	6
エラー ※2	7	71	SystemMonitor性能監視	7
エラー ※2	8	72	SystemProvisioning	8

※1 オプション指定が不正の場合、PVMサービスの停止に失敗した場合、およびIISがインストールされていない場合

※2 対象コンポーネントのインストールに失敗した場合

以上で管理サーバコンポーネントの一括インストールは完了です。

一括インストールの完了後、サーバを再起動してください。

再起動後に「2.5 管理サーバコンポーネントをインストールした後に」を参照し、必要に応じてインストール後の設定を行ってください。

2.5. 管理サーバコンポーネントをインストールした後に

インストール完了後に別途設定が必要な場合があります。SigmaSystemCenter 3.1 のインストールが完了した後、インストール環境、およびインストールしたコンポーネントに応じて本節の設定を行ってください。

2.5.1. DPMサーバをインストールした場合

DPM の設定に関する詳細は、「DeploymentManager リファレンスガイド」の「2.7. 管理サーバの基本情報」を参照してください。

2.5.2. Out-of-Band (OOB) Management機能でPETを受信する場合

Out-of-Band (OOB) Management 機能では、BMC (Baseboard Management Controller) が送信する PET (Platform Event Trap) を受信でき、ハードウェア異常などの検出を契機にポリシーを動作することができます。

Out-of-Band (OOB) Management 機能で PET を受信する場合、管理サーバで以下の設定を行ってください。

なお、Out-of-Band (OOB) Management 機能では、SNMP Trap Serviceを使用して SNMP Trap を受信しますが、ESMPRO/ServerManager でも SNMP Trap を受信するため、下記の手順に従って設定を確認してください。下記の設定が正しく行われていない場合、いずれかが SNMP Trap を正しく受信できない可能性があります。

1. 簡易ネットワーク管理プロトコル (SNMP) をインストールする
 1. [スタート] メニューから [管理ツール] - [サーバマネージャ] をクリックし、「サーバマネージャ」を起動します。
 2. 左ペインの [機能] をクリックした後、右ペインの [機能の追加] をクリックし、「機能の追加ウィザード」を起動します。
 3. 画面中央の一覧から [SNMP サービス] チェックボックスをオンにし、[次へ] をクリックして機能を追加します。
2. SNMP Trap Service を開始する
 1. [スタート] メニューから [コントロールパネル] - [管理ツール] - [サービス] を選択し、サービススナップインを起動します。
 2. "SNMP Trap Service" をダブルクリックし、「SNMP Trap Service のプロパティ」ダイアログボックスを開きます。
 3. [スタートアップの種類(E):] を "自動" に設定し、[開始(S)] をクリックします。
 4. [OK] をクリックし、ダイアログボックスを閉じます。
 5. サービス一覧から "PVMService" を選択し、[サービスの再起動] をクリックします。
3. ESMPRO/ServerManager が同じ管理サーバで動作している場合、ESMPRO/ServerManager の設定を変更し、Windows の SNMPトラップサービスを利用するように変更します。

2 インストールを実行する

1. ESMPRO/ServerManager のアラートビューアを起動します。
2. アラートビューアの「アラート受信設定」ダイアログボックスを開きます。
3. 「SNMP トラップ受信方法」から [SNMP トラップサービスを使用する] チェックボックスをオンにし、[OK] をクリックします。
4. 管理サーバを再起動します。

注: PVM Service 起動時に SNMP コンポーネントがインストールされていない、もしくは利用できない状態の場合、運用ログのウィンドウに「SNMP Trap を受信できません。」というメッセージが表示されます。

この状態では、OOB Management イベントの受信、およびそれを契機としたポリシーアクションは動きませんが、そのほかの動作には影響ありません。

なお、上記手順を行うことで、メッセージは表示されなくなります。

2.6. 管理対象マシンコンポーネントのインストール

次節以降では、管理対象マシンコンポーネントをインストールする手順を説明します。

管理対象マシンの OS によって、インストールが必要となるコンポーネント、およびインストール方法が異なります。

ご利用の環境に応じて必要なコンポーネントをインストールしてください。

Windows (x86 / x64) 管理対象マシン	
ESMPRO/ServerAgent	EXPRESSBUILDER (NEC Expressシリーズに同梱) よりインストール Windows Server 2008以降の場合は、以下のURLから 「SigmaSystemCenter 3.0以降向けNIC関連情報拡張パッチ」をダウンロードしてください。 http://www.nec.co.jp/pfsoft/smsa/download.html
DPM クライアント	Windows Server 2008 Server Core / Windows Server 2012 Server Core 以外 「2.7 Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへインストールする」 または 「2.8 Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへインストール画面表示なしでインストールする」 を参照してインストール
	Windows Server 2008 Server Core / Windows Server 2012 Server Core 「2.9 Windows Server 2008 Server Core / Windows Server 2012 Server Core管理対象マシンへインストールする」 を参照してインストール

Linux 管理対象マシン	
ESMPRO/ServerAgent	EXPRESSBUILDER (NEC Expressシリーズに同梱) よりインストール OSやカーネルをアップデートした場合は、以下のURLからダウンロードしてください。 http://www.express.nec.co.jp/linux/distributions/download.html の「ESMPRO/ServerAgentの詳細・ダウンロード」
DPM クライアント	「2.10 Linux管理対象マシンへインストールする」 を参照してインストール

VMware ESX 管理対象マシン	
ESMPRO/ServerAgent	ESMPRO/ServerAgent for VMwareをインストール UL1032-102 ESMPRO/ServerAgent for VMwareを別途ご購入ください。
DPM クライアント	「2.10 Linux管理対象マシンへインストールする」 を参照してインストール

2 インストールを実行する

VMware ESXi 管理対象マシン	
ESMPRO/ServerAgent	インストール不要
DPM クライアント	インストール不要

Citrix XenServer 管理対象マシン	
ESMPRO/ServerAgent	ESMPRO/ServerAgent for XenServerをインストール XenServer向けESMPRO/ServerAgentは、個別対応となります。お問い合わせください。
DPM クライアント	「2.10 Linux管理対象マシンへインストールする」 を参照してインストール

Microsoft Hyper-V 管理対象マシン	
ESMPRO/ServerAgent	EXPRESSBUILDER (NEC Expressシリーズに同梱) よりインストール
DPM クライアント	「2.7 Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへインストール画面からインストールする」 または 「2.8 Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへインストール画面表示なしでインストールする」 を参照してインストール

Red Hat KVM 管理対象マシン	
ESMPRO/ServerAgent	EXPRESSBUILDER (NEC Expressシリーズに同梱) よりインストール
DPM クライアント	「2.10 Linux管理対象マシンへインストールする」 を参照してインストール

管理対象マシンが仮想マシン	
ESMPRO/ServerAgent	インストール不要
DPM クライアント	仮想マシンのOSに応じて、以下を参照してインストールしてください。 「2.7 Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへインストール画面からインストールする」 または 「2.8 Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへインストール画面表示なしでインストールする」 または 「2.10 Linux管理対象マシンへインストールする」

2.7. Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへインストーラ画面からインストールする

OS が Windows (x86 / x64) の管理対象マシンへは、DPM クライアントをインストールする必要があります。ウィザードを使用して DPM クライアントをインストールする手順を説明します。

オプション、パラメータを指定せずにインストーラ (AgentSetup.exe) を起動すると、コンポーネントをインストールするためのウィザードが開始します。

2.7.1. インストールを実行するには

1. SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R を DVD/CD-RW ドライブに挿入します。
2. コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行し、インストーラを起動します。

インストール DVD-R: ¥AgentSetup.exe

3. インストーラが起動し、ウィザードが起動します。

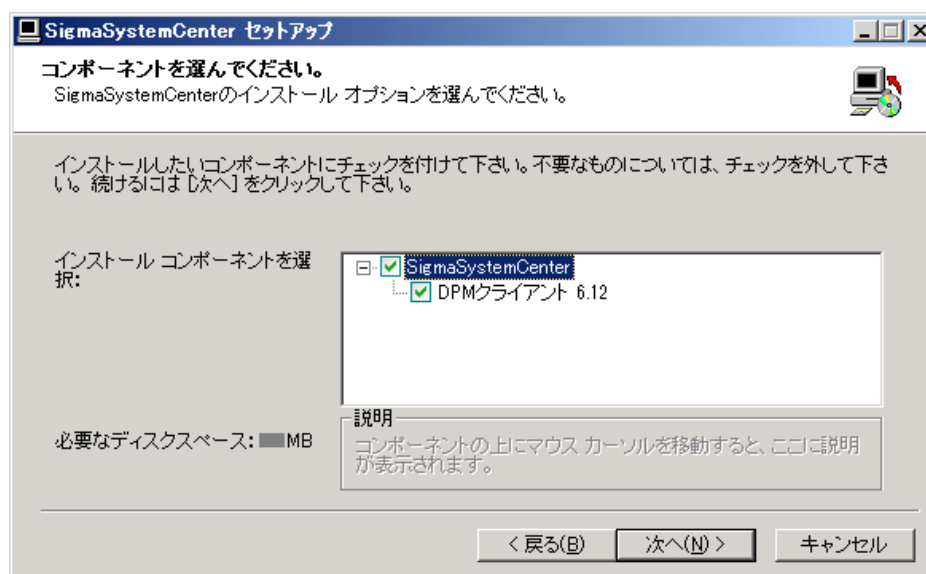


ウィザードに従ってインストールを実行してください。

「2.7.2 コンポーネントの選択」～「2.7.6 インストールの完了」では、各ウィザード画面の流れに沿って説明します。

2.7.2. コンポーネントの選択

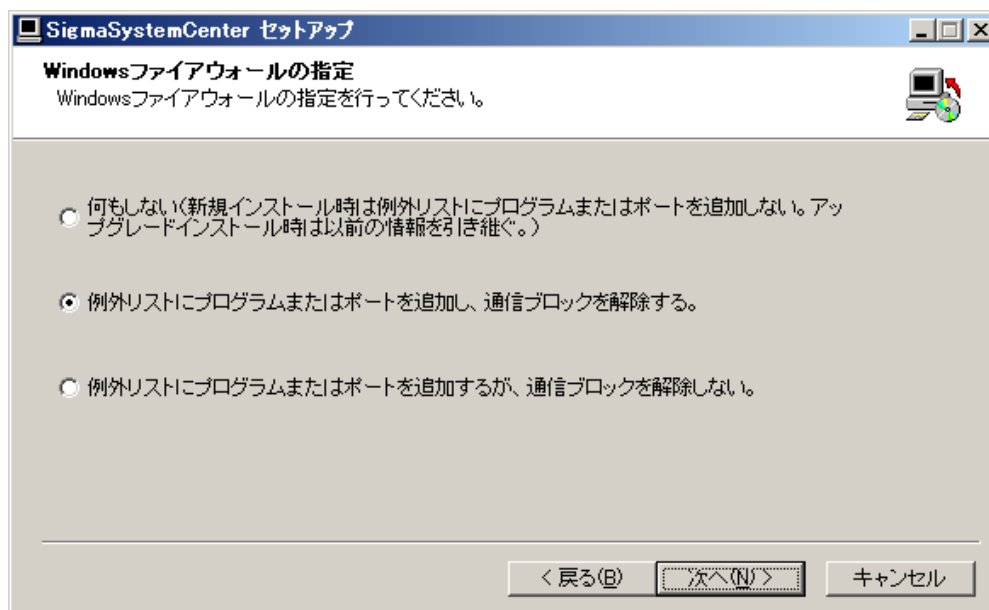
「コンポーネントの選択」画面が表示されます。
インストールするコンポーネントを選択してください。
本バージョンのコンポーネントが既にインストールされている場合は選択できません。
選択完了後、[次へ(N)>] をクリックします。



SigmaSystemCenter	この項目を選択した場合、以下のすべてのコンポーネントが自動的に選択されます。
DPM クライアント	DPMクライアントをインストールします。

2.7.3. Windowsファイアウォールの指定

「Windows ファイアウォールの指定」画面が表示されます。
項目を指定し、[次へ(N)>] をクリックします。



何もしない (新規インストール時は例外リストにプログラムまたはポートを追加しない。アップグレードインストール時には以前の情報を引き継ぐ。)	この項目を選択した場合、新規インストール時に例外リストにプログラム、またはポートを追加しません。後に手動で例外リストにプログラム、またはポートを追加する必要があります。詳細は、「付録 A ネットワークとプロトコル」を参照してください。
例外リストにプログラムまたはポートを追加し、通信ブロックを解除する。	この項目を選択した場合、例外リストにプログラム、またはポートを追加し、通信ブロックを解除します。既定で選択されています。
例外リストにプログラムまたはポートを追加するが、通信ブロックを解除しない。	この項目を選択した場合、例外リストにプログラム、またはポートを追加しますが、通信ブロックは解除しません。後に手動で通信ブロックを解除する必要があります。

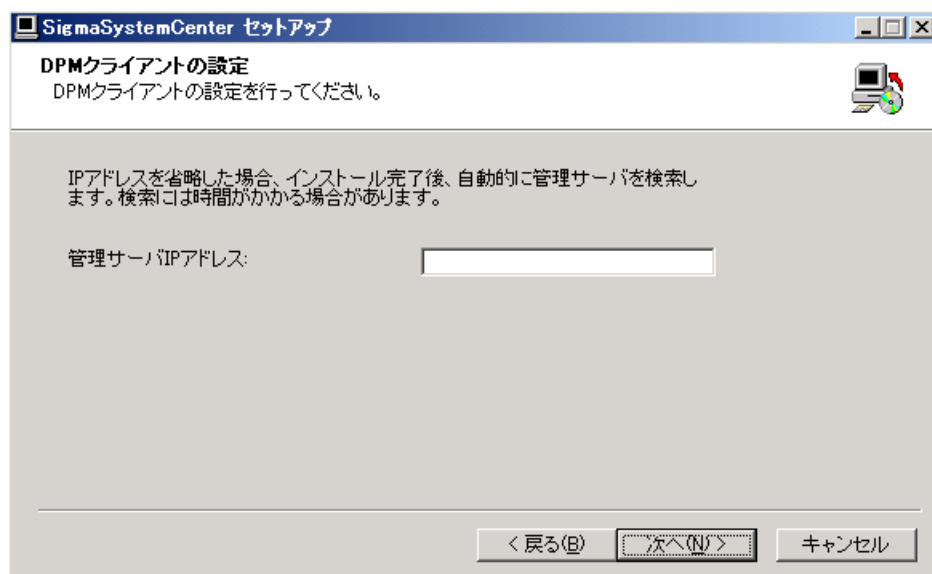
2.7.4. DPMの設定

「DPM クライアントの設定」画面が表示されます。

DPM クライアントをインストールするにあたって必要な情報を設定してください。

設定完了後、[次へ(N)>] をクリックします

2 インストールを実行する

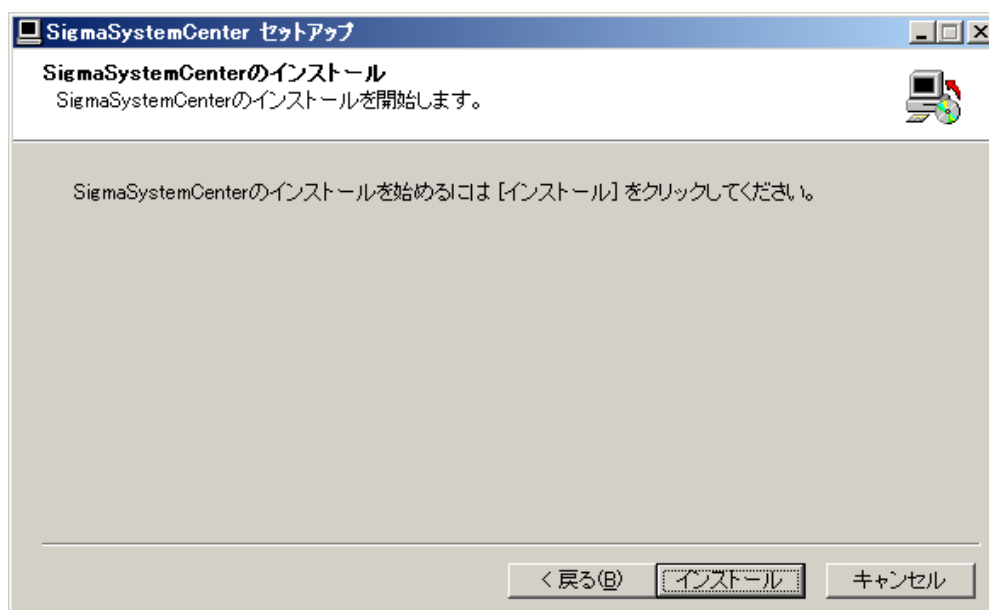


管理サーバ IP アドレス	DPMサーバがインストールされている管理サーバのIPアドレスを指定します。IPアドレスを省略した場合、インストール完了後、自動的に管理サーバを検索します。検索には時間がかかる場合があります。
----------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------

2.7.5. インストールの開始

選択したコンポーネントのインストール実行前に、確認のダイアログボックスが表示されます。

[インストール] をクリックするとインストールが開始します。



注: Windows Server 2008、Windows Vista、Windows 7、Windows Server 2012、もしくは Windows 8 に DPM クライアントをインストールした後、イベントログに以下のメッセージが出力される場合がありますが、動作に問題はありません。

- ・ DeploymentManager Agent Service サービスは、対話型サービスとしてマークされています。しかし、システムは対話型サービスを許可しないように構成されています。このサービスは正常に機能しない可能性があります。
 - ・ DeploymentManager Remote Update Service Client サービスは、対話型サービスとしてマークされています。しかし、システムは対話型サービスを許可しないように構成されています。このサービスは正常に機能しない可能性があります。
-

2.7.6. インストールの完了

選択したすべてのコンポーネントのインストール後、「完了」画面が表示されます。

以上で、ウィザードを使用した管理対象マシンコンポーネントのインストールは完了です。

2.8. Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへインストール画面表示なしでインストールする

OS が Windows (x86 / x64) の管理対象マシンへは、DPM クライアントをインストールする必要があります。ウィザードを使用せずに DPM クライアントをインストールする手順を説明します。

インストールオプションとパラメータを指定してインストールを開始すると、ウィザードを使用せずに DPM クライアントをインストールします。

2.8.1. インストールを実行するには

1. SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R を DVD/CD-RW ドライブに挿入します。
2. コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行し、インストールを開始します。

```
インストール DVD-R: ¥AgentSetup.exe /S [/FIREWALL=x]
[/DPMSERVERIP="xxx.xxx.xxx.xxx"]
```

例) D:¥AgentSetup.exe /S /FIREWALL=1 /DPMSERVERIP="192.168.1.1"

注: コマンドプロンプトで、「AgentSetup.exe /S <その他のオプション>」を実行すると、すぐにプロンプトが表示され、インストールが終了したように見えます。コマンドプロンプトで、「cmd /c "AgentSetup.exe /S <その他のオプション>」を実行すると、インストール処理が終了するまでプロンプトが表示されないようにすることができます。

オプション	説明
/S	一括でインストールを行います。
/FIREWALL	DPMクライアントに関するWindowsファイアウォールの指定を行います。xに以下のいずれかの値を指定します。 このオプションが指定されていない場合、既定値 (1) が使用されます。
0	このオプションを選択した場合、新規インストール時に例外リストにプログラム、またはポートを追加しません。 後に手動で例外リストにプログラム、またはポートを追加する必要があります。詳細は、「付録 A ネットワークとプロトコル」を参照してください。
1	このオプションを選択した場合、例外リストにプログラム、またはポートを追加し、通信ブロックを解除します。 既定で選択されています。

2	このオプションを選択した場合、例外リストにプログラム、またはポートを追加しますが、通信ブロックは解除しません。 後に手動で通信ブロックを解除する必要があります。
/DPMSEVERIP	DPMサーバのIPアドレスを指定します。 このオプションが指定されていない場合、インストール完了後、自動的にDPMサーバを検索します。検索には時間がかかる場合があります。

オプション "/S" が指定されていない場合、ウィザードが開始されます。この場合、ウィザードに従いインストールを進めるか、[キャンセル] をクリックし、一括インストールを再度実行してください。

3. DPMクライアントのインストールが開始されます。インストールは完了まで数分かかりません。

インストーラは下記の表の終了コードで終了します。インストーラは、インストーラのログと終了コードを以下のファイルに記録します。

- Windows 2000 / Windows XP / Windows Server 2003 の場合
%USERPROFILE%\Local Settings\Application Data\SSC\SetupProvisioning.log
- Windows Vista 以降/ Windows Server 2008 以降の場合
%USERPROFILE%\AppData\Local\SSC\SetupProvisioning.log

注: 以下の方法でログを参照することができます。

1. コマンドプロンプトでカレントディレクトリを移動します。

```
cd "%USERPROFILE%\Local Settings\Application Data\SSC"
```

または

```
cd %USERPROFILE%\AppData\Local\SSC
```

2. メモ帳でログファイルをオープンします。

```
notepad SetupProvisioning.log
```

	終了コード	インストール対象コンポーネント	順番
成功	0 (再起動不要)	—	—
エラー ※1	32 (再起動不要)	—	—
エラー ※2	1 (再起動不要)	DPMクライアント	1

※1 オプション指定が不正の場合

※2 対象コンポーネントのインストールに失敗した場合

2 インストールを実行する

以上で、ウィザードを使用しない管理対象マシンコンポーネントのインストールは完了です。

2.9. Windows Server 2008 Server Core / Windows Server 2012 Server Core 管理対象マシンへインストールする

Windows Server 2008 Server Core / Windows Server 2012 Server Core 管理対象マシンへ DPM クライアントをインストールする手順を説明します。

SigmaSystemCenter のインストーラは Windows Server 2008 Server Core / Windows Server 2012 Server Core 管理対象マシンに対応していないため、DPM クライアントを Windows Server 2008 Server Core / Windows Server 2012 Server Core 管理対象マシンにインストールする場合、SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R から個別にインストールする必要があります。

2.9.1. インストールを実行するには

1. SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R を DVD/CD-RW ドライブに挿入します。
2. コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行し、「DeploymentManager セットアップ」画面を起動します。

```
インストール DVD-R: ¥DPM¥Launch.exe
```

3. 「DeploymentManager セットアップ」画面が表示されます。
4. [DPM クライアント] をクリックします。
5. 「確認」ダイアログボックスが表示されます。[はい] をクリックします。
6. 「IP アドレスの入力」ウィザードが表示されます。DPM サーバの IP アドレスを入力します。[次へ] をクリックします。

注: IP アドレスを省略した場合、インストール完了後、自動的に管理サーバを検索します。検索には時間がかかる場合があります。

7. インストールが正常に終了すると、「InstallShield Wizard の完了」が表示されます。[完了] をクリックします。

以上で DPM クライアントのインストールは完了です。

2.10. Linux 管理対象マシンへインストールする

OS が Linux の管理対象マシンへは、DPM クライアントをインストールする必要があります。DPM クライアントをインストールする手順を説明します。

SigmaSystemCenter のインストーラは Linux 管理対象マシンに対応していないため、DPM クライアントを Linux 管理対象マシンにインストールする場合、SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R から個別にインストールする必要があります。

DPM クライアントのインストールの前に、「2.10.1 DPM クライアントのインストールに向け準備する」を参照し、DPM クライアントをインストールする環境を準備してください。DPM クライアントのインストールの注意事項については、「DeploymentManager インストレーションガイド」の「2.2.2. Linux(x86/x64)版をインストールする」も参照してください。

2.10.1. DPMクライアントのインストールに向け準備する

◆ DPM クライアントを動作させるためには以下のライブラリが必要となります。

- libpthread.so.0
- libc.so.* (※)
- ld-linux.so.2

※ *には、数値が入ります。

上記とは別に Red Hat Enterprise Linux 6 以降 (x64)、または ESX (x64) の場合は、以下のパッケージのインストールが必要となります。ただし、Compatibility libraries (x64 OS 環境で x86 OS 用モジュールを動作させるためのライブラリ) をインストールした場合にはインストールは不要です。

- glibc-*.i686.rpm (※1, ※2)

※1 *には、数値が入ります (バージョン・リリース番号)。

※2 インストール時にパッケージの依存関係を無視するオプション (--nodeps) を指定した場合には、必要なパッケージがインストールされていない可能性がありますので、注意してください。

既にインストールされているライブラリは、以下のコマンドを実行して確認してください。以下のコマンドを実行するとライブラリ情報が表示されます。

```
find / -name "ライブラリ名"
```

例)

```
find / -name libpthread.so.0
```

または、

```
find / -name libpthread*
```

(* は、ワイルドカードとなります。)

上記のコマンドの場合、実行結果に以下の情報があれば、ライブラリが既にインストールされています。

/lib/libpthread.so.0

また、ご利用の環境によって DPM クライアントのインストールの前に必要な操作があります。ご利用の環境に応じて、以下の操作を実行してください。

- ◆ Red Hat Enterprise Linux 6 以降で、DPM のディスク複製 OS インストール機能を使用する場合には以下のライブラリが必要です。

- libc.so.* (※)
- ld-linux.so.* (※)
- libcrypt.so.* (※)
- libfreebl3.so

※ *には、数値が入ります。

上記とは別に管理対象マシン環境が x64 OS の場合では、下記のパッケージが必要となります。ただし、Compatibility libraries (x64 OS 環境で x86 OS 用モジュールを動作させるためのライブラリ) をインストールした場合にはインストールは不要です。

- glibc-*-*.i686.rpm (※1、※2)
- nss-softokn-freebl-*-*.i686.rpm (※1、※2)

※1 *には、数値が入ります (バージョン・リリース番号)。

※2 Red Hat Enterprise Linux 6 以降の場合、必要となります。

インストール時にパッケージの依存関係を見捨てるオプション (--nodeps) を指定した場合には、必要なパッケージがインストールされていない可能性がありますので、注意してください。

- ◆ x64 版 Linux OS の管理対象マシンで、リモートアップデートを行う場合には、以下のライブラリが必要となります。

- /lib/libgcc_s.so.1

"/lib/x64" 配下にライブラリ "libgcc_s.so.1"が存在する場合がありますが、別途 "/lib" 配下にライブラリ "libgcc_s.so.1" が必要です。

下記の rpm パッケージをインストールし、ライブラリをインストールしてください。

リモートアップデートを使ってインストールする場合は、ユニキャスト配信で行ってください。

- libgcc-3.4.5-2.i386.rpm

- ◆ 既に Linux OS がインストール済みの管理対象マシンに DPM クライアントをインストールする場合、DPM クライアントで使用する以下のポートを開放してください。

プロトコル	ポート番号
TCP	26510
UDP	26529
TCP	26509

2.10.2. DPMクライアントをインストールするには

注: Red Hat Enterprise Linux AS4 / ES4、SUSE Linux Enterprise 9 の場合は、"/mnt" 部を "/media" に読み替えて作業を進めてください。

SUSE Linux Enterprise 10 の場合は、"/mnt/dvd" 部を "/media/DVD-R のボリュームラベル" に読み替えて作業を進めてください。

1. root アカウントでシステムにログインします。
2. SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R を DVD/CD-RW ドライブに挿入します。
3. 以下のコマンドを実行し、DVD-R をマウントします。この例では、マウントポイントを "/mnt/dvd" と仮定しています。

```
# mount /mnt/dvd
```

4. ディレクトリを変更するために、以下のコマンドを実行します。

```
# cd /mnt/dvd/DPM/Linux/ia32/bin/agent
```

5. depinst.sh を実行します。

```
# ./depinst.sh
```

注: 実行する環境によっては、インストール DVD-R 上の depinst.sh を実行する権限がないため、実行できない場合があります。

このような場合は、インストール DVD-R の Linux ディレクトリ配下にある DPM クライアントのモジュールをハードディスクの適切なディレクトリ配下にコピーし、以下の例のように chmod コマンドですべてのファイルに実行権限を与えてから depinst.sh を起動してください。

例)

```
# cd /mnt/コピー先ディレクトリ/agent  
# chmod 755
```

6. 以下のように DPM 管理サーバの IP アドレス入力要求が表示されます。IP アドレスを省略した場合、インストール完了後、自動的に管理サーバを検索します。検索には時間がかかる場合があります。


```
Enter the IP address of the management server.  
(If you omit the IP address, the DPM client service searches  
the management server automatically, but it might take some  
time.)  
>
```

DPM 管理サーバの IP アドレスを入力し、[Enter] をクリックします。

以上で DPM クライアントのインストールは完了です。

3. アップグレードインストールを実行する

本章では、SigmaSystemCenter 3.0 以前のバージョンがインストールされた環境を SigmaSystemCenter 3.1 へアップグレードインストールする手順について説明します。

本章で説明する項目は以下の通りです。

- 3.1 SigmaSystemCenter 3.1 へのアップグレードインストール 50
- 3.2 インストール (アップグレード) を始める前に 51
- 3.3 管理サーバコンポーネントをインストール (アップグレード) する 60
- 3.4 Apache Tomcat をアンインストールする 74
- 3.5 管理サーバコンポーネントをアップグレードインストールした後に 77
- 3.6 管理対象マシンコンポーネントをアップグレードインストールする 94
- 3.7 Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへアップグレードインストールする 96
- 3.8 Windows Server 2008 Server Core 管理対象マシンへアップグレードインストールする 101
- 3.9 Linux 管理対象マシンへアップグレードインストールする 102
- 3.10 DPM クライアントを自動でアップグレードする 103

3.1. SigmaSystemCenter 3.1 へのアップグレードインストール

以降の節では、前のバージョンがインストールされた管理サーバ、および管理対象マシンを SigmaSystemCenter 3.1 へアップグレードする手順を説明します。

管理サーバをアップグレードするには、以下の流れに従ってください。

1. アップグレード前に必要な事前準備作業を実施する
「3.2 インストール (アップグレード) を始める前に」を参照してください。
2. SigmaSystemCenter 3.1 へアップグレードする
「3.3 管理サーバコンポーネントをインストール (アップグレード) する」を参照してください。
3. Apache Tomcat をアンインストールする (任意)
Apache Tomcat のアンインストールは、手動で行う必要があります。必要に応じて「3.4 Apache Tomcat をアンインストールする」を参照し、アンインストールしてください。
4. アップグレード後に必要な設定作業を実施する。
管理サーバコンポーネントのアップグレードインストール完了後に別途必要な設定があります。すべてのコンポーネントのアップグレードインストールが完了した後、「3.5 管理サーバコンポーネントをアップグレードインストールした後に」を参照し、設定してください。

管理対象マシンをアップグレードするには、「3.6 管理対象マシンコンポーネントをアップグレードインストールする」を参照してください。

注: Windows Server 2003 をご使用の場合、以下のアップグレードインストール手順の「プログラムと機能」を、「プログラムの追加と削除」と読み替えてください。

3.2. インストール (アップグレード) を始める前に

SigmaSystemCenter 3.1 へのインストール (アップグレード) を始める前に本節をよく読んでください。

3.2.1. 動作環境の確認・準備

SigmaSystemCenter のインストール (アップグレード) を始める前に、必ず最新の動作環境がご利用の環境に適しているか確認し、必要であればシステム要件を満たすバージョンにアップグレードする必要があります。

最新の動作環境に関しては、「SigmaSystemCenter ファーストステップガイド」の「3. 動作環境」を参照してください。

3.2.2. 管理サーバOSのWindows Server 2003 のサポート廃止について

SigmaSystemCenter 3.1 にて Windows Server 2003 は、管理サーバ OS のサポート対象外となりました。

SigmaSystemCenter 3.0 以前のバージョンから SigmaSystemCenter 3.1 にアップグレードインストールする場合、管理サーバ OS に Windows Server 2003 を使用している場合は、Windows Server 2008 R2、または Windows Server 2012 に移行する必要があります。この場合、別マシンを用意する必要があります。

注: 具体的な移行手順については、以下に掲載しています。アップグレードを実施する前に必ず参照してください。

<http://www.nec.co.jp/WebSAM/SigmaSystemCenter/faq.html>

アップグレードインストール、および移行手順の流れは、以下の通りです。

1. Windows Server 2003 (旧マシン) 上で SigmaSystemCenter 3.1 にアップグレードインストールする。
2. Windows Server 2003 (旧マシン) 上で SigmaSystemCenter 3.1 のデータをバックアップする。
ただし、ESMPRO/ServerManager を除く。
3. Windows Server 2008 R2 (新マシン) で SigmaSystemCenter 3.1 を新規インストールする。
4. Windows Server 2008 R2 (新マシン) に手順2でバックアップしたデータをリストアする。
ただし、ESMPRO/ServerManager を除く。
5. ESMPRO/ServerManager に対して管理対象マシンを再登録・再設定する。

3.2.3. アップグレードインストールを行う際の注意

SigmaSystemCenter をアップグレードインストールする際は、旧バージョンの環境でインストールされていたすべての SigmaSystemCenter コンポーネントをアップグレードインストールしてください。一部のコンポーネントのみをアップグレードインストールする運用はサポートしておりません。

アップグレードインストールを開始する前にご利用の環境をバックアップすることを推奨します。

◆ 1つのグループに複数の VM サーバモデルが存在する場合

SigmaSystemCenter 3.0 で、リソースプール管理機能が追加されました。この機能強化に伴い、仮想環境の最適配置機能における、仮想マシンの負荷分散の単位が、従来のグループ単位からモデル単位へと変更されました。

そのため、以下の場合、SigmaSystemCenter 2.0、および 2.1 から SigmaSystemCenter 3.1 へのアップグレードを行う前に、[運用] ビューでグループの設定を変更する必要があります。グループの設定を確認の上、変更を実施してください。

[設定変更が必要となる条件]

①、および②の条件を満たす場合、設定変更が必要です。

①1つのグループに複数の VM サーバモデルが存在する

グループプロパティ設定の [モデル] タブに、種別が [VM サーバ] のモデルが複数存在する。

②VM モデルと複数存在する VM サーバモデルが関連づけられている

種別が [VM] のモデルのモデルプロパティ設定の [全般] タブで、[VM サーバモデル] として、①の複数存在するモデルが設定されている。

[変更内容]

1つのグループに1つの VM サーバモデルとなるように、グループの設定を変更してください。

◆ EMC Storage (CLARiX) を使用している場合

[リソース] ビューのマシンで設定している各 HBA の接続先の SP 情報と、[運用] ビューのホストに設定しているディスクボリュームの SP 情報が異なっている場合は、アップグレードインストールでホスト設定にディスクボリュームが設定されません。アップグレードインストール開始前に以下の手順を実行して設定の確認を行ってください。

1. HBA に接続されている SP 情報は、naviseccli コマンドの getall -sg コマンドを使用して確認します。

```
> naviseccli getall -sg
```

関連情報: コマンドの詳細については Navisphere のマニュアルを参照してください。

2. [運用] ツリーから運用グループのアイコンをクリックし、[ホストー覧] グループボックスから [ホスト名] をクリックし、メインウィンドウにホストの詳細情報を表示します。
3. [設定] メニューから [プロパティ] をクリックし、[ストレージ] タブを選択します。[ストレージ一覧] のディスクボリュームに設定している SP 名、SP ポート番号が、HBA と接続されている SP 情報と一致していることを確認します。

異なる SP 情報 (ディスクボリューム) をホストに設定した状態でアップグレードインストールを行った場合は、ホスト設定にディスクボリュームが設定されません。その場合は、アップグレードインストール後にディスクボリュームの再設定を行ってください。

ディスクボリュームの設定については、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「4.9.3. [ストレージ] タブを設定するには」を参照してください。

◆ 管理中の仮想マシンサーバを ESXi へアップグレードする場合

SigmaSystemCenter で管理中の仮想マシンサーバを ESXi へアップグレードする場合は、「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編」の「1.4.1 仮想マシンサーバの ESXi 5.0 以降へのアップグレードについて」を参照してください。

また、ESXi には DPM クライアントがインストールできないため、インストール済みソフトウェア情報の取得など、DPM の一部の機能が利用できなくなります。機能の詳細については、「DeploymentManager ファーストステップガイド」の「付録 A サポート対応表」を参照してください。

そのため、[リソース] ビューのマシンの詳細情報にて表示されるインストール済みソフトウェアが更新されず、古い情報が残ります。下記コマンドを実行して、削除してください。その後、マシン収集を実行し、インストール済みソフトウェアが削除されていることを確認してください。

```
ssc dpminformation delete
```

3.2.4. 管理サーバに事前にインストールが必要なソフトウェア

SigmaSystemCenter を管理サーバにアップグレードインストールする前に、ご利用の環境に応じて、別途インストールが必要なソフトウェアがあります。

必要なソフトウェア、およびインストール手順については、SigmaSystemCenter のインストール時と同じです。

管理サーバに Windows Server 2008 / Windows Server 2008 R2 / Windows Server 2012 をご利用の場合は、「2.1.2 管理サーバに事前にインストールが必要なソフトウェア」を参照してください。

注: 管理サーバに Windows Server 2003 を使用し、SigmaSystemCenter 3.0 以前のバージョンから SigmaSystemCenter 3.1 にアップグレードする場合は、以下を参照してください。

<http://www.nec.co.jp/WebSAM/SigmaSystemCenter/faq.html>

3.2.5. Windowsファイアウォールの設定に関する注意

- ◆ "Windows Firewall / Internet Connection Sharing (ICS)" サービスが開始状態の場合、インストーラの設定で Windows ファイアウォールの例外リストにプログラム、またはポートを追加するように指定すると、インストーラは例外リストにプログラム、またはポートを追加します。
- ◆ SigmaSystemCenter をインストール (アップグレード) した後に、Windows ファイアウォールを使用するように変更する場合は、手動で例外リストにプログラム、またはポートを追加してください。詳細は、「付録 A ネットワークとプロトコル」を参照してください。

3.2.6. インストール (アップグレード) 実行前の注意

SigmaSystemCenter のインストール (アップグレード) を始める前に、必ず使用しているアプリケーション、および Web ブラウザをすべて終了してください。

3.2.7. SigmaSystemCenter 1.1 のSystemProvisioning Connector Framework をアンインストールする

SigmaSystemCenter 1.1 のバージョンで SystemProvisioning Connector Framework をインストールしていた場合、手動でアンインストールする必要があります。以下の手順に従ってアンインストールしてください。

1. [スタート] メニューから [コントロールパネル(C)] - [プログラムの追加と削除] を選択します。
2. 「プログラムの追加と削除」画面が表示されます。左ペインから [プログラムの変更と削除(H)] をクリックします。[現在インストールされているプログラム] から [NEC SystemProvisioning Connector Framework] を選択し、[削除] をクリックします。
3. 削除確認のダイアログボックスが表示されます。[はい(Y)] をクリックします。
4. アンインストールが正常に終了すると、「アンインストール完了」ウィザードが表示されず。[完了] をクリックします。

以上で SystemProvisioning Connector Framework のアンインストールは完了です。

3.2.8. DPMサーバ (管理サーバ for DPM) をアップグレードインストールする際の注意

- ◆ DeploymentManager 5.1 以前のバージョンから本バージョンにアップグレードインストールする場合は、旧バージョンで設定したリモートイメージビルダとの接続可能な LAN ボードの設定は、引き継がれません。DeploymentManager 5.2 以降、リモートイメージビルダとの接続可能 LAN ボード設定は、DPM の Web コンソールの「詳細設定」画面 - [全般] タブ - [IP アドレス] に指定した内容となります。
- ◆ SigmaSystemCenter 1.3 以前のバージョンからアップグレードする場合、シナリオ名に付加されている管理サーバ for DPM の名前と、管理サーバ for DPM がインストールされているサーバのホスト名が一致しないと、シナリオの配布、および削除ができなくなります。一致しない場合は、アップグレード前に、SystemProvisioning の運用管理ツールを起動し、[システムリソース] の [配布ソフトウェア] から DPM のシナリオを削除してください。グループ / サーバのプロパティに登録されているシナリオは、登録を解除後、削除してください。グループの [サーバ設定] に登録されているシナリオは、その設定が使用中の場合、シナリオの登録を解除することができません。稼動サーバを停止できる場合は、「メンテナンスモード」に移行し、[サーバ操作] の [プールで待機] を実行後、シナリオの登録を解除してください。稼動サーバを停止できない場合は、アップグレード後にシナリオの登録を解除してください。
- ◆ SigmaSystemCenter 2.1 以前のバージョンからアップグレードする場合、SigmaSystemCenter が DPM サーバと連携する際に、これまでの管理者パスワードではなく、DPM サーバに作成される「deployment_user」ユーザのパスワードを使用します。
既定値は "dpmmgr" となり、管理者パスワードは引き継がれません。
SigmaSystemCenter 2.0、および 2.1 からアップグレードする場合、管理者パスワードが "dpmmgr" と一致しないと DPM サーバとの連携処理で警告、または異常が発生します。そのため、アップグレードを実行する前に、以下の手順でパスワードを変更してください。

注: SigmaSystemCenter1.3 以前からアップグレードする場合、本手順は必要ありません。

1. DPM の Web コンソールを起動してください。
2. ツリービューで管理サーバを選択後、メニューバーの [管理サーバ] の [アクセスモード変更] にて、[更新モード] を選択してください。
3. メニューバーの [設定] の [管理者パスワード変更] を選択し、管理者パスワードを "dpmmgr" に変更してください。
4. ツリービューで管理サーバを選択後、メニューバーの [管理サーバ] の [アクセスモード変更] にて、[参照モード] を選択してください。

5. SigmaSystemCenter の Web コンソールを起動し、[管理] ビューに切り替えてください。
6. [管理] ツリーから [サブシステム] をクリックしてください。
7. [サブシステム一覧] より、製品名「DeploymentManager (Windows/Linux)」の [編集] をクリックしてください。
8. [パスワード更新] チェックボックスをオンに変更後、パスワードに "dpmmgr" を設定してください。
9. [OK] をクリックしてください。

- ◆ 下記のレジストリは、アップグレード後に引き継ぎませんので、必要に応じて再設定してください。

レジストリキー:

- x86 OS の場合
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥NEC¥PVM¥DPMPProvider
- x64 OS の場合
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥NEC¥PVM¥DPMPProvider

値の名称:

RebootTimeout
ShutdownTimeout

レジストリ値については、「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 概要編」の「1.7.8 DPM 経由電源制御のタイムアウト時間」を参照してください。

- ◆ SigmaSystemCenter 3.0 Update1 以降は、マシングループ名、およびシナリオグループ名に "/" (スラッシュ) は使用できません。このため、アップグレードインストールを行うと、グループ名に "/" を含む場合には、"/" が "_" (アンダーバー) に自動的に変換されます。この変換により、同じグループ名が発生する場合には、2つのグループの内容がマージされます。

3.2.9. SystemProvisioningのアップグレードインストールに関する注意

SigmaSystemCenter 3.1 で、IIS (インターネットインフォメーションサービス) の「Default Web Site」(既定値) に SystemProvisioning の仮想ディレクトリを作成するようになりました。

そのため、IIS に「Default Web Site」が存在しない場合、SystemProvisioning のアップグレードインストールが失敗します。アップグレードインストール前に IIS の「Default Web Site」が存在するか確認してください。

存在しない場合、または「Default Web Site」以外の Web サイトに SystemProvisioning の仮想ディレクトリを作成させる場合は、SigmaSystemCenter インストーラの実行時に以下のコマンドを実行してください。

「WebSiteName」には、IIS に存在する Web サイト名を指定してください。

```
インストール DVD-R: %ManagerSetup.exe /IISWEBSITE="WebSiteName"
```

なお、Windows Server 2003 の IIS6.0 では、Web サイト名の既定値は「既定の Web サイト」です。Windows Server 2003 の場合は、上記の「Default Web Site」を「既定の Web サイト」と読み替えてください。

3.2.10. 管理サーバ for DPM (HP-UX) と連携している場合

管理サーバ for DPM (HP-UX) と連携している場合、アップグレード前に連携を削除しておく必要があります。

- ◆ SigmaSystemCenter 1.3 以前からのアップグレードの場合
グループで稼働中のマシン、プールで待機中のマシン、およびグループやサーバ設定に割り当てているシナリオを削除してください。SystemProvisioning 運用管理ツールの環境設定の [DPM 情報] タブから [DPM for HP-UX] を選択し、削除してください。
- ◆ SigmaSystemCenter 2.0、および 2.1 からのアップグレードの場合
Web コンソールの [管理] ビューのサブシステムの詳細情報から、[管理サーバ for DPM (HP-UX)] を選択し、削除してください。

HP-UX 用の運用グループがある場合、アップグレード後にその運用グループが定義のみで残っています。不要であれば手動で削除してください。

3.2.11. NetvisorProと連携している場合

本項の内容は SigmaSystemCenter 1.3 以前からアップグレードインストールを行う場合にのみ有効です。

NetvisorPro と連携している場合、アップグレード前に NetvisorPro が管理する装置名と SigmaSystemCenter に登録した装置名を一致させておく必要があります。

- ◆ SigmaSystemCenter に登録した装置名を変更する場合
 1. SystemProvisioning 運用管理ツールを起動し、[システムリソース] ツリーの中から [スイッチ]、または [ロードバランサ] を選択します。
 2. 詳細情報表示ウィンドウに表示される一覧から、名前を変更する装置を選択します。
 3. コンテキストメニューから [プロパティ] を選択して [スイッチ名]、または [ロードバランサ名] を変更してください。

◆ NetvisorPro の管理装置名を変更する場合

1. [スタート] メニューから [すべてのプログラム] - [ESMPRO_Netvisor] - [オペレーションウィンドウ] を選択し、NetvisorPro のオペレーションウィンドウを起動します。
2. メニューバーから [オプション] - [編集許可] を選択し、編集許可の状態にします。
3. 名前を変更する装置を選択し、コンテキストメニューの中から [プロパティ] を選択します。
4. 選択した装置のプロパティが表示されるので、その中から [ホスト名] を変更してください。

3.2.12. Windows Vista以降、またはWindows Server 2008 以降にインストールする際の注意

Windows Vista 以降、または Windows Server 2008 以降の環境でインストーラを実行すると、「ユーザー アカウント制御」画面が表示される場合があります。その場合、[許可] をクリックして、続行してください。

3.2.13. SQL Server 2012 Express以外のSQL Serverを使用する場合

本項の内容は SigmaSystemCenter 1.3 以前からアップグレードインストールを行う場合にのみ有効です。

SigmaSystemCenter は、本製品に同梱された SQL Server 2012 Express を既定でインストールしますが、事前に SQL Server 2005 / 2008 / 2008 R2 / 2012 のインスタンスをインストールしておく、そのインスタンスを使用することができます。

注:

- SQL Server 2005 は、以前のバージョンからアップグレードに際してのみ、使用をサポートします。
 - SQL Server 2005 / 2008 / 2008 R2 / 2012 の上位エディションをインストールすると、データベースの復旧モデルは既定で「完全」に設定されます。このため、ジャーナルログが記録されるようになり、データベースが増加します。対処として、単純復旧モデルに設定するようにしてください。
-

1. SigmaSystemCenter をアップグレードインストールするまでの事前準備

SQL Server 2012 Express 以外の SQL Server を使用する場合は、SigmaSystemCenter をインストール (アップグレード) する前に SQL Server のインスタンスをインストールします。

以下の表は、各コンポーネントが使用する SQL Server のインスタンスとなります。

コンポーネント	インスタンス名
SystemProvisioning、および SystemMonitor 性能監視	SSCCMDB (既定値)
DeploymentManager	DPMDBI (固定値)

注:

- SystemProvisioning、および SystemMonitor 性能監視が使用する SQL Server のインスタンスをインストールする場合、「機能の選択」画面で、[データベースエンジンサービス] を選択してください。
- DeploymentManager が使用する SQL Server のインスタンスをインストールする場合、「機能の選択」画面で、[データベースエンジンサービス]、および [SQL Server レプリケーション] を選択してください。また、インスタンス名は必ず "DPMDBI" にする必要があります。

DPMDBI インスタンスが既に存在する場合は、DPM サーバのインストーラが DPMDBI インスタンスにデータベースを構築します。

2. SigmaSystemCenter をアップグレードインストール

- SystemProvisioning、および SystemMonitor 性能監視の場合
SigmaSystemCenter をインストール (アップグレード) する際に、SigmaSystemCenter インストールウィザードの「SQL Server 情報の設定 ("既に存在する SQL Server 2005 / 2008 / 2012 インスタンスを使用する")」から、インスタンス名を指定します。詳細については、「3.3.5 SQL Server 情報の設定」を参照してください。
- DeploymentManager の場合
SigmaSystemCenter をインストール (アップグレード) する際の設定は特にありません。

3.2.14. SystemProvisioningの構成情報データベースをリモートのSQLに構築している場合

SystemProvisioning の構成情報データベースをリモートの SQL に構築している場合、アップグレード前に Windows 認証で接続できるように設定してください。

3.2.15. 管理サーバのアップグレードインストールに関する注意

SigmaSystemCenter 管理サーバをドメインコントローラにすることはできません。詳細については、「2.1.10 管理サーバのインストールに関する注意」を参照してください。

3.3. 管理サーバコンポーネントをインストール (アップグレード) する

管理サーバへ管理サーバコンポーネントをインストール (アップグレード) する手順を説明します。

オプション、パラメータを指定せずにインストーラ (ManagerSetup.exe) を起動すると、各コンポーネントをインストールするためのウィザードが開始します。

下記のコンポーネントは、インストール中にアップグレードされます。

- ◆ ESMPRO/ServerManager
- ◆ DPM サーバ
- ◆ SystemMonitor 性能監視
- ◆ SystemProvisioning

3.3.1. DPMのサービスを停止する

アップグレードインストール前に、サービスの停止が必要となる場合があります。ご利用の環境に応じて以下の手順を実施してください。

- ◆ Apache Tomcat のサービス
Tomcat がインストールされている場合は、「Apache Tomcat」のサービスを停止してください。
- ◆ DPM のサービス
以下の環境でのアップグレードで、管理サーバ for DPM (SigmaSystemCenter 3.0 以降では DPM サーバに相当) のサービスを起動している場合は、アップグレードインストール前にサービスを停止しておく必要があります。
 - SigmaSystemCenter 1.1 / 1.2 / 1.3 からのアップグレードの場合
下記の「[管理サーバ for DPM のサービス停止手順](#)」に従ってサービスを停止してください。

注: SigmaSystemCenter 1.3 からのアップグレードインストールであり、かつ修正モジュール (SSC130008-0002「管理サーバ for DPM のサービス停止時に、停止処理中状態から完了しないことがある問題を改善」) を適用している場合は、「管理サーバ for DPM のサービス停止手順」を実行する必要はありません。

SigmaSystemCenter 1.3 の修正モジュールの適用情報を確認するには、以下の手順を実行してください。

1. [スタート] メニューから [コントロールパネル(C)] - [プログラムの追加と削除] を選択します。
 2. 「プログラムの追加と削除」画面が表示されます。左ペインから [プログラムの変更と削除(H)] をクリックします。[現在インストールされているプログラム] から [DeploymentManager (管理サーバ for DPM)] を選択し、[サポート情報を参照するには、ここをクリックしてください] をクリックします。
 3. [Version] に、[4.32.000] と表示されていれば、修正モジュールは適用済みです。
-

- SigmaSystemCenter 2.0、および 2.1 からのアップグレードで、データベース (DPM インスタンス) と管理サーバ for DPM を別のサーバにインストールしている場合
以下の「管理サーバ for DPM のサービス停止手順」に従ってサービスを停止してください。

<管理サーバ for DPM のサービス停止手順>

1. [スタート] メニューから [コントロールパネル(C)] - [管理ツール] - [サービス] を選択し、サービススナップインを起動します。
2. サービス一覧から "DeploymentManager" で始まるサービス (「DeploymentManager API Service」など) を選択し、[サービスの停止] をクリックして、すべての "DeploymentManager" で始まるサービスを停止します。

注: 停止しないサービスがある場合、以下の手順に従って対象サービスに該当するプロセスを強制終了した後、サービススナップインから残りのサービスを停止してください。

1. [スタート] メニューから [ファイル名を指定して実行(R)] をクリックし、[名前(O)] テキストボックスに「taskmgr」と入力し、Windows タスクマネージャを起動します。
2. [プロセス] タブを選択し、停止しないサービスに該当するプロセス (以下の表を参照) を強制終了します。

サービス名	プロセス名
DeploymentManager API Service	apiserv.exe
DeploymentManager Backup/Restore Management	bkressvc.exe
DeploymentManager Client Management	cliwatch.exe
DeploymentManager client start	clistart.exe
DeploymentManager Get Client Information	depssvc.exe
DeploymentManager PXE Management	pxesvc.exe
DeploymentManager PXE Mtftp	pxemtftp.exe
DeploymentManager Remote Update Service	rupdssvc.exe
DeploymentManager Scenario Management	snrwatch.exe
DeploymentManager Schedule Management	schwatch.exe
DeploymentManager Transfer Management	ftsvc.exe

3.3.2. インストール (アップグレード) を実行するには

1. SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R を DVD/CD-RW ドライブに挿入します。
2. コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行し、インストーラを起動します。

インストール DVD-R: ¥ManagerSetup.exe

3. インストーラが起動し、ウィザードが開始します。



ウィザードに従ってインストールを実行してください。

「3.3.3 コンポーネントの選択」～「3.3.9 インストール (アップグレード) の完了」では、各ウィザード画面の流れに沿って説明します。

3.3.3. コンポーネントの選択

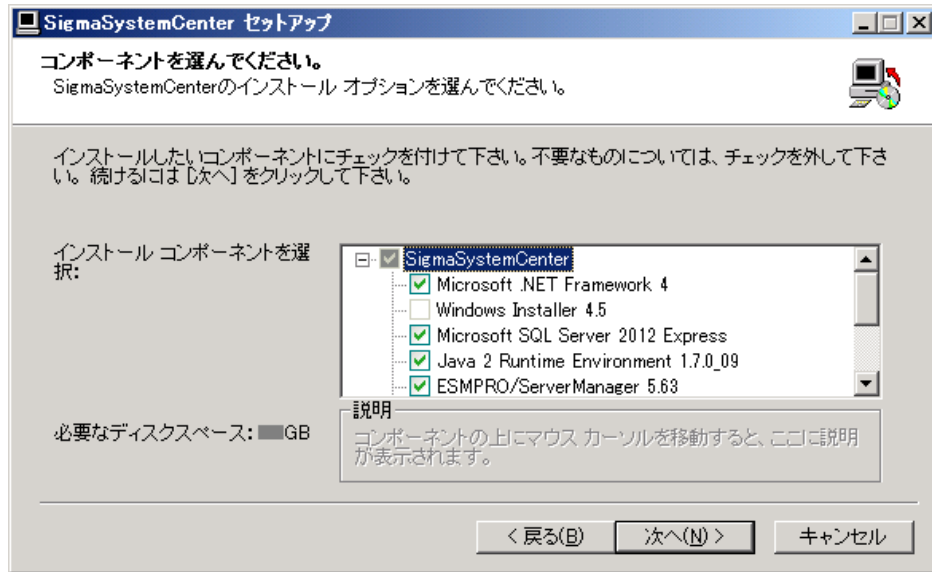
「コンポーネントの選択」画面が表示されます。

インストールするコンポーネントを選択してください。

本バージョンのコンポーネントが既にインストールされている場合は選択できません。

選択完了後、[次へ(N)>] をクリックします。

3 アップグレードインストールを実行する



SigmaSystemCenter	この項目を選択した場合、以下の選択可能なすべてのコンポーネントが自動的に選択されます。
.NET Framework 4	.NET Framework 4をインストールします。
Windows Installer 4.5	Windows Installer 4.5をインストールします。
SQL Server 2012 Express	SQL Server 2012 Expressをインストールします。
Java 2 Runtime Environment	Java 2 Runtime Environmentをインストールします。
ESMPRO/ServerManager	ESMPRO/ServerManagerをインストールします。 この項目を選択した場合、[.NET Framework 4] も自動的に選択されます。
DPM サーバ	DPMサーバをインストールします。 この項目は、IISがインストールされている場合のみ選択可能です。 この項目を選択した場合、[.NET Framework 4]、[Windows Installer 4.5]、および [Java 2 Runtime Environment] も自動的に選択されます。
SystemMonitor 性能監視	SystemMonitor性能監視をインストールします。 この項目を選択した場合、[.NET Framework 4]、[Windows Installer 4.5]、および [SQL Server 2012 Express] も自動的に選択されます。 既に存在するSQL Server 2005 / 2008 / 2008 R2 / 2012 インスタンスを使用する場合、手動で [SQL Server 2012 Express] チェックボックスをオフにしてください。

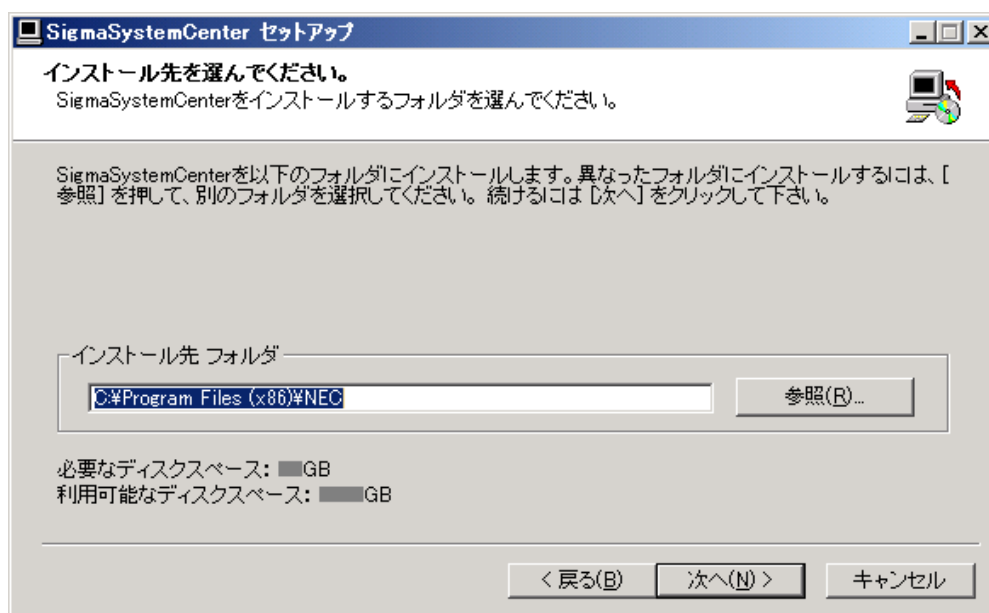
<p>SystemProvisioning</p>	<p>SystemProvisioningをインストールします。 IISがインストールされている場合のみ選択可能です。 この項目を選択した場合、[.NET Framework 4]、 [Windows Installer 4.5]、および [SQL Server 2012 Express] も自動的に選択されます。 既に存在するSQL Server 2005 / 2008 / 2008 R2 / 2012 インスタンスを使用する場合、手動で [SQL Server 2012 Express] チェックボックスをオフにしてください。</p>
----------------------------------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

注: SigmaSystemCenter 2.0 以降からのアップグレードインストールの場合、[SQL Server 2012 Express] チェックボックスをオフにしてください。

3.3.4. インストール先フォルダの選択

「3.3.3 コンポーネントの選択」で ESMPRO/ServerManager、DPM サーバ、SystemMonitor 性能監視、および SystemProvisioning を選択していた場合、「インストール先フォルダの選択」画面が表示されます。

コンポーネントのインストール先フォルダを指定し、[次へ(N)>] をクリックします。



インストール先フォルダ	ESMPRO/ServerManager、DPMサーバ、SystemMonitor性能監視、およびSystemProvisioningのインストール先フォルダを指定します。 80文字まで入力できます。 ただし、ESMPRO/ServerManagerをインストールする場合は、Unicode特有の文字を含むフォルダは指定しないでください。 既定値は x86 OSでは (%ProgramFiles%¥NEC) x64 OSでは (%ProgramFiles(x86)%¥NEC) です。
--------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

注:

- ・ Java 2 Runtime Environment はインストール先フォルダの変更はできません。
- ・ x64 OS では、インストール先フォルダに%ProgramFiles%を指定することはできません。
- ・ 既に ESMPRO/ServerManager がインストールされている場合、この画面で指定したインストール先フォルダのパスは無視され、既存の ESMPRO/ServerManager のインストールフォルダにアップグレードされます。
- ・ 既に DPM サーバがインストールされている場合、この画面で指定したインストール先フォルダのパスは無視され、既存の DPM サーバのインストールフォルダにアップグレードされます。

3.3.5. SQL Server情報の設定

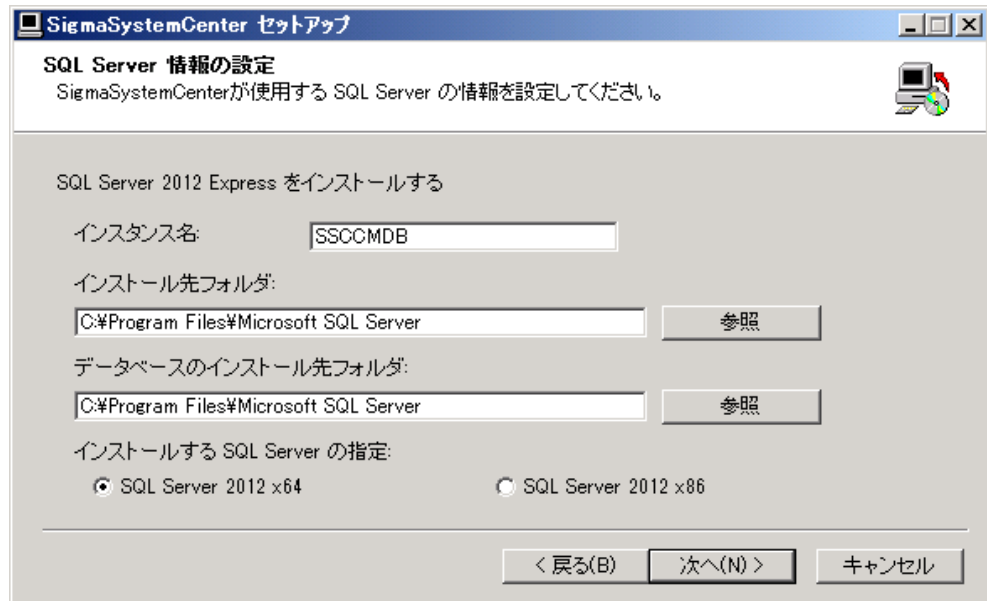
「3.3.3 コンポーネントの選択」で SystemMonitor 性能監視、SystemProvisioning を選択していた場合、「SQL Server 情報の設定」画面が表示されます。また、SQL Server 2012 Express の選択 / 非選択によって、設定画面が異なります。

SystemMonitor 性能監視、および SystemProvisioning が使用する SQL Server 情報の設定を行い、[次へ(N)>] をクリックします。

注:

- ・ SigmaSystemCenter 2.0 以降からのアップグレードで、アップグレードインストール前に SystemProvisioning の構成情報データベースをリモートの SQL に構築していた場合、[既に存在する SQL Server 2005 / 2008 / 2012 インスタンスを使用する] を有効にして、ローカルにインストールされている SQL インスタンス名を指定してください。ローカルに SQL インスタンスがインストールされていない場合は、[SQL Server 2012 Express をインストールする] を有効にしてください。
- ・ [SQL Server 2012 Express をインストールする]、[既に存在する SQL Server 2005 / 2008 / 2012 インスタンスを使用する] の有効の切り替えをするには、「3.3.3 コンポーネントの選択」まで戻って [SQL Server 2012 Express] チェックボックスを変更してください。

◆ SQL Server 2012 Express を選択した場合



<p>SQL Server 2012 Express をインストールする</p>	<p>ローカルマシン上に新規にSQL Server 2012 Expressのインスタンスをインストールします。この画面では、以下のSQLの情報が指定できます。Windows認証モードでインストールされます。「3.3.3 コンポーネントの選択」で「SQL Server 2012 Express」を選択した場合、この項目が有効になります。</p>
<p>インスタンス名</p>	<p>SQLのインスタンス名を指定します。16文字まで入力できます。既定値は (SSCCMDB) です。</p>
<p>インストール先フォルダ</p>	<p>SQLのインストール先フォルダを指定します。57文字まで入力できます。既定値は (%ProgramFiles%\Microsoft SQL Server) です。 x64 OSで、インストールするSQL Serverの指定にSQL Server 2012 x86を選択した場合の既定値は (%ProgramFiles(x86)%\Microsoft SQL Server) です。</p>

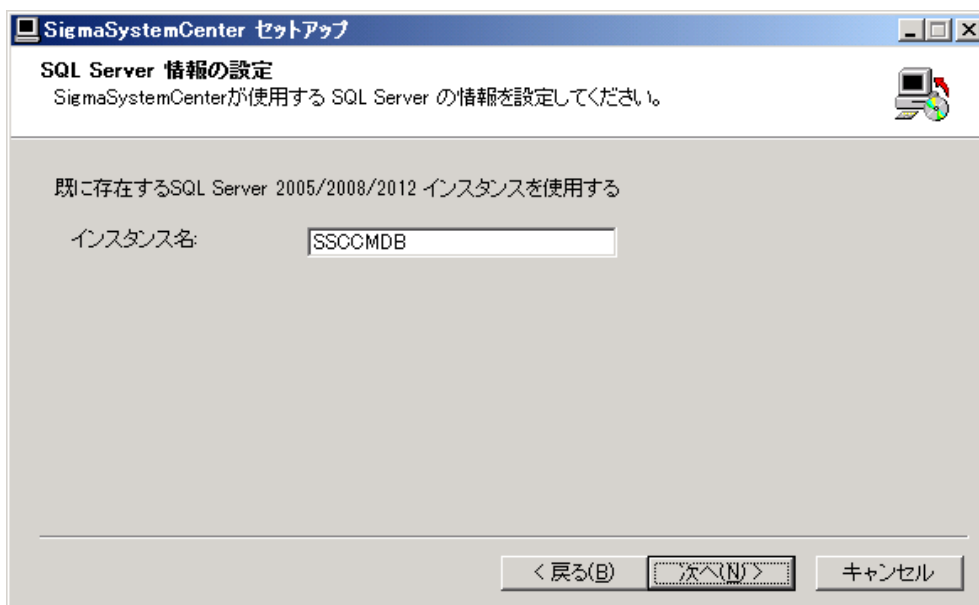
3 アップグレードインストールを実行する

データベースのインストール先フォルダ	SQLのデータベースのインストール先フォルダを指定します。 57文字まで入力できます。 既定値は (%ProgramFiles%\Microsoft SQL Server) です。 x64 OSで、インストールするSQL Serverの指定にSQL Server 2012 x86を選択した場合の既定値は (%ProgramFiles(x86)%\Microsoft SQL Server)です。 実際のインストール先パスは "指定したインストール先フォルダ\MSSQL11.<インスタンス名>\MSSQL\Data" になります。
インストールする SQL Server の指定	インストールするSQL Serverを指定します。 この項目は、x86 OSでは入力不可です。
SQL Server 2012 Express x64	ローカルマシン上にx64アーキテクチャのSQL Server 2012 Expressをインストールします。 既定で選択されています。
SQL Server 2012 Express x86	ローカルマシン上にx86アーキテクチャのSQL Server 2012 Expressをインストールします。

注:

- ・ [SQL Server 2012 Express をインストールする] が有効になっている状態で、[インスタンス名] に指定したのと同じ名前のインスタンスが既に存在している場合、新規にSQLのインスタンスはインストールされません。
- ・ DPM が使用する SQL インスタンスのインストール先フォルダを指定することはできません。%ProgramFiles%\Microsoft SQL Server 固定です。

◆ SQL Server 2012 Express を選択していない場合



<p>既に存在する SQL Server 2005 / 2008 / 2012 インスタンスを使用する</p>	<p>ローカルマシン上にSQL Server 2005 / 2008 / 2012 がインストールされている場合、既存のインスタンスにデータベースを作成します。この画面では、以下のSQLの情報が指定できます。</p> <p>「3.3.3 コンポーネントの選択」で [SQL Server 2012 Express] を選択していない場合、この項目が有効になります。</p>
<p>インスタンス名</p>	<p>SQLのインスタンス名を指定します。</p> <p>16文字まで入力できます。</p> <p>既定値は (SSCCMDB) です。</p>

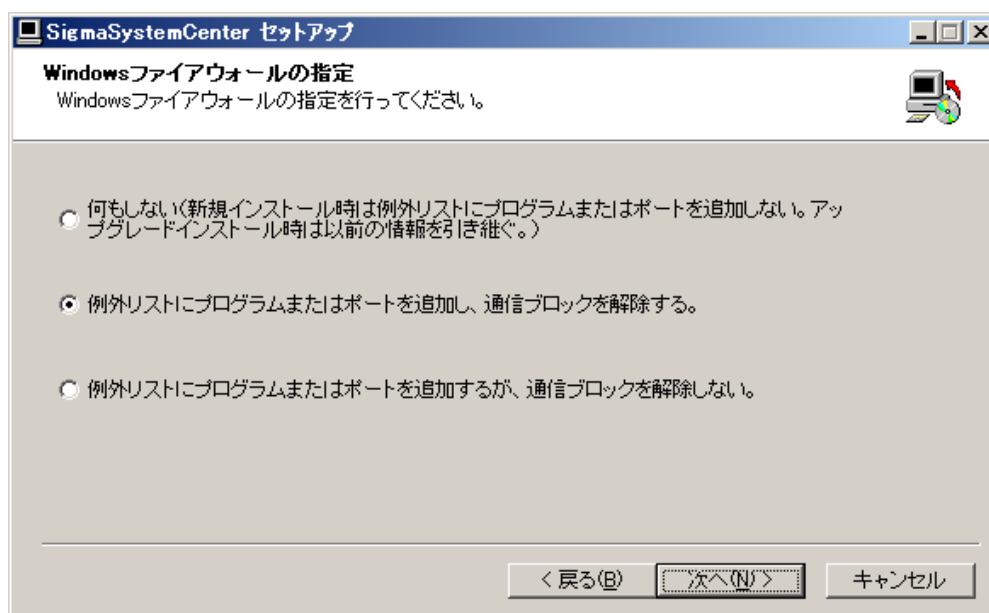
注:

- ・ SigmaSystemCenter 2.0 以降からのアップグレードの場合は、アップグレード前に使用していた SQL のインスタンス名を指定してください。
- ・ [既に存在する SQL Server 2005 / 2008 / 2012 インスタンスを使用する] が有効になっている状態で、[インスタンス名] に指定したのと同じ名前のインスタンスが存在していない場合、[次へ(N)>] をクリックすると、「指定されたインスタンスは存在しません。」というメッセージが表示されます。インスタンスをインストールする場合、「3.3.3 コンポーネントの選択」まで戻って [SQL Server 2012 Express] を選択してください。

3.3.6. Windowsファイアウォールの指定

「3.3.3 コンポーネントの選択」で ESMPRO/ServerManager、DPM サーバ、SystemMonitor 性能監視、および SystemProvisioning を選択していた場合、「Windows ファイアウォールの指定」画面が表示されます。

項目を指定し、[次へ(N)>] をクリックします。



3 アップグレードインストールを実行する

<p>何もしない (新規インストール時は例外リストにプログラムまたはポートを追加しない。アップグレードインストール時には以前の情報を引き継ぐ。)</p>	<p>この項目を選択した場合、アップグレードインストール前の情報を引き継ぎます。 ただし、SystemProvisioningに関しては、以前の情報を引き継ぎません。 後に手動で例外リストにプログラム、またはポートを追加する場合は、「付録 A ネットワークとプロトコル」を参照してください。</p>
<p>例外リストにプログラムまたはポートを追加し、通信ブロックを解除する。</p>	<p>この項目を選択した場合、例外リストにプログラム、またはポートを追加し、通信ブロックを解除します。 既定で選択されています。</p>
<p>例外リストにプログラムまたはポートを追加するが、通信ブロックを解除しない。</p>	<p>この項目を選択した場合、例外リストにプログラム、またはポートを追加しますが、通信ブロックは解除しません。 後に手動で通信ブロックを解除する必要があります。</p>

注: 「Windows ファイアウォールの指定」画面で [何もしない] を選択した場合、SystemProvisioning は以前の情報を引き継がないため、アップグレードインストール完了後に手動で例外リストにプログラム、またはポートを追加する必要があります。詳細は、「付録 A ネットワークとプロトコル」を参照してください。

3.3.7. ESMPRO/ServerManagerの設定

「3.3.3 コンポーネントの選択」で ESMPRO/ServerManager を選択していた場合、「ESMPRO/ServerManager の設定」画面が表示されます。

ESMPRO/ServerManager をインストールするにあたって必要な情報の設定を行います。

設定完了後、[次へ(N)>] をクリックします。

SigmaSystemCenter セットアップ

ESMPRO/ServerManager の設定
ESMPRO/ServerManager の設定を行ってください。

ESMPROユーザグループ: Administrators

アドミニストレータ名:

パスワード:

パスワード(確認):

HTTP接続ポート: 8185

更新パッケージの保存フォルダ:
C:\Program Files (x86)\NEC\SMM\ESMWEB\pkgepool

注意: 更新パッケージの保存フォルダは多くの容量を必要とするため、空き容量の多い場所を指定してください。

< 戻る(B) 次へ(N) > キャンセル

ESMPRO ユーザグループ	ESMPRO/ServerManagerのWindows GUIに適切な許可を与えるグループを表示します。 この項目は入力不可です。
アドミニストレータ名	ESMPRO/ServerManagerの管理者を指定します。アドミニストレータ名は1～16文字までの半角英数字を入力してください。
パスワード	ESMPRO/ServerManagerにログインするためのパスワードを指定します。パスワードは6～16文字までの半角英数字を入力してください。
パスワード (確認)	確認のため同じパスワードを再入力します。
HTTP 接続ポート	ESMPRO/ServerManagerが使用するHTTP接続ポートを指定します。HTTP接続ポートは1～65535の範囲の値を入力してください。 既定値は (8185) です。
更新パッケージの保存フォルダ	更新パッケージを保存するフォルダを指定します。更新パッケージの保存フォルダには、十分な空き容量を用意してください。 更新パッケージの保存フォルダには、ExpressUpdate機能で使用するファームウェアやソフトウェアの更新パッケージが格納されます。 既定値は (ESMPRO/ServerManagerインストールフォルダ¥ESMWEB¥pkgpool) です。

注:

- ESMPRO/ServerManager のインストールフォルダの既定値は以下の通りです。

x86 OS では (%ProgramFiles%¥NEC¥SMM)

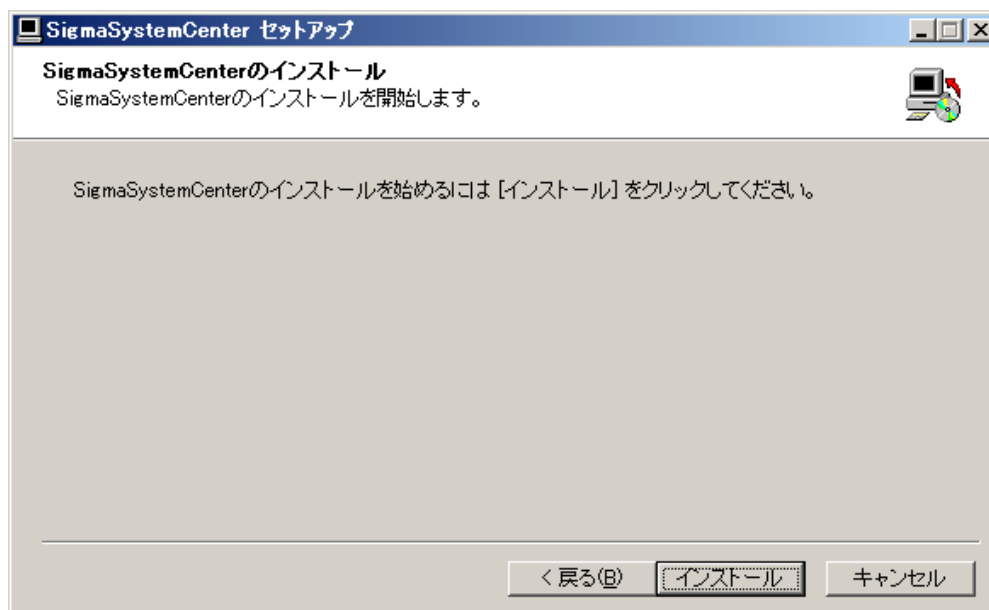
x64 OS では (%ProgramFiles(x86)%¥NEC¥SMM)

- 既に ESMPRO/ServerManager がインストールされている場合、不要な設定項目は入力不可となります。

3.3.8. インストール (アップグレード) の開始

選択したコンポーネントのインストール (アップグレード) 実行前に、確認のダイアログボックスが表示されます。

[インストール] をクリックするとインストール (アップグレード) が開始します。



- ◆ .NET Framework 4、または Windows Installer 4.5 を選択していた場合
.NET Framework 4、または Windows Installer 4.5 のインストール終了後にシステムの再起動が必要な場合は、システムの再起動を促すダイアログボックスが表示されます。
[はい(Y)] をクリックした場合、自動的にシステムの再起動が実施されます。
[いいえ(N)] をクリックした場合、インストーラが終了しますので、手動でシステムの再起動を行ってください。コンポーネントのインストールを続行する前に必ずシステムの再起動を行ってください。
システムの再起動後、「3.3.1 DPM のサービスを停止する」に従って、DPM のサービスを停止した後、「3.3.2 インストール (アップグレード) を実行するには」の手順を再度実行して、残りのコンポーネントのインストールを開始してください。
- ◆ ESMPRO/ServerManager を選択していた場合
アップグレードインストール完了後、環境によっては「このプログラムは正しくインストールされなかった可能性があります」のメッセージが表示される場合があります。
インストールは正常に完了していますので、[このプログラムは正しくインストールされました]、または [キャンセル] をクリックして終了してください。

3.3.9. インストール (アップグレード) の完了

選択したすべてのコンポーネントのインストール後、「完了」画面が表示されます。
システムの再起動を促すダイアログボックスが表示された場合は、システムを再起動してください。

以上で管理サーバコンポーネントの個別のインストール (アップグレード) は完了です。
Apache Tomcat のアンインストールが必要な場合は、「3.4 Apache Tomcat をアンインストールする」を参照してください。

「3.5 管理サーバコンポーネントをアップグレードインストールした後に」を参照し、必要に応じてアップグレード後の設定を行ってください。

3.4. Apache Tomcat をアンインストールする

SigmaSystemCenter 3.0 以降で利用する DeploymentManager では、Apache Tomcat を使用しません。また、SigmaSystemCenter 2.1 以前のバージョンからアップグレードインストールした場合、以前のバージョンの DeploymentManager で利用していた Apache Tomcat は削除されません。アンインストールが必要な場合、本節を参照して実施してください。

アップグレードインストール前のバージョンに応じて手順は変わります。対応する手順を以下より参照してください。

- ◆ SigmaSystemCenter 1.1 からアップグレードインストールした場合
「3.4.1 SigmaSystemCenter 1.1 の Apache Tomcat をアンインストールするには」を参照してください。
- ◆ SigmaSystemCenter 1.2 からアップグレードインストールした場合
「3.4.2 SigmaSystemCenter 1.2 の Apache Tomcat をアンインストールするには」を参照してください。
- ◆ SigmaSystemCenter 1.3 からアップグレードインストールした場合
「3.4.3 SigmaSystemCenter 1.3 の Apache Tomcat をアンインストールするには」を参照してください。
- ◆ SigmaSystemCenter 2.0、および 2.1 からアップグレードインストールした場合
「3.4.4 SigmaSystemCenter 2.0、および 2.1 の Apache Tomcat をアンインストールするには」を参照してください。

3.4.1. SigmaSystemCenter 1.1 の Apache Tomcat をアンインストールするには

プログラムの追加と削除から削除します。

1. [スタート] メニューから [コントロールパネル(C)] - [プログラムの追加と削除] を選択します。
2. 「プログラムの追加と削除」画面が表示されます。左ペインから [プログラムの変更と削除(H)] をクリックします。[現在インストールされているプログラム] から、[Apache Tomcat 4.1 (remove only)] を選択し、[変更と削除] をクリックします。「Apache Tomcat 4.1 Uninstall Confirmation」画面が表示されます。
3. [Uninstall] をクリックします。アンインストールが開始されます。

注: アンインストール中に以下のメッセージが表示された場合は、[はい] をクリックしてください。

Remove all files in your Tomcat xxx directory? (If you have anything you created that you want to keep, click No)

4. アンインストールの完了後、[Close] をクリックしてください。

以上で SigmaSystemCenter 1.1 の Apache Tomcat のアンインストールは完了です。

3.4.2. SigmaSystemCenter 1.2 の Apache Tomcat をアンインストールするには

下記 2 つのレジストリを確認してください。

1. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Apache Group¥Tomcat¥4.1
 2. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Uninstall¥Apache Tomcat 4.1
- ◆ 両方とも存在する場合、「3.4.1 SigmaSystemCenter 1.1 の Apache Tomcat をアンインストールするには」を参照して、「プログラムの追加と削除」画面から削除してください。
 - ◆ 1 のレジストリのみ存在する場合、SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R の下記のファイルを実行して削除してください。

```
¥DPM¥TOOLS¥TomcatUninstall¥Tomcat_Silent_Uninst_41.bat
```

以上で SigmaSystemCenter 1.2 の Apache Tomcat のアンインストールは完了です。

3.4.3. SigmaSystemCenter 1.3 の Apache Tomcat をアンインストールするには

下記 2 つのレジストリを確認してください。

1. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Apache Foundation¥Tomcat¥5.5 Software
 2. HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Uninstall¥Apache Tomcat5.5
- ◆ 両方とも存在する場合、「3.4.1 SigmaSystemCenter 1.1 の Apache Tomcat をアンインストールするには」を参照して、「プログラムの追加と削除」画面から削除してください。
 - ◆ 1 のレジストリのみ存在する場合、SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R の下記のファイルを実行して削除してください。

```
¥DPM¥TOOLS¥TomcatUninstall¥Tomcat_Silent_Uninst_55.bat
```

以上で SigmaSystemCenter 1.3 の Apache Tomcat のアンインストールは完了です。

3.4.4. SigmaSystemCenter 2.0、および 2.1 の Apache Tomcat をアンインストールするには

下記 2 つのレジストリを確認してください。

1. OS のアーキテクチャにより参照先が異なります。
 - x86 OS の場合
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Apache Software Foundation¥Tomcat¥6.0
 - x64 OS の場合
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥Apache Software Foundation¥Tomcat¥6.0
 2. OS のアーキテクチャにより参照先が異なります。
 - x86 OS の場合
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Uninstall¥Apache Tomcat 6.0
 - x64 OS の場合
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Wow6432Node¥Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Uninstall¥Apache Tomcat 6.0
- ◆ 両方とも存在する場合、「3.4.1 SigmaSystemCenter 1.1 の Apache Tomcat をアンインストールするには」を参照して、「プログラムと機能」画面からアンインストールしてください。
 - ◆ 1 のレジストリのみ存在する場合、SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R の下記のファイルを実行して削除してください。

```
¥DPM¥TOOLS¥TomcatUninstall¥Tomcat_Silent_Uninst_60.bat
```

以上で SigmaSystemCenter 2.0、および 2.1 の Apache Tomcat のアンインストールは完了です。

3.5. 管理サーバコンポーネントをアップグレードインストールした後に

アップグレードインストール完了後に別途必要な設定があります。SigmaSystemCenter 3.1 のアップグレードインストールが完了した後、インストール環境、およびインストール（アップグレード）したコンポーネントに応じて本節の設定を行ってください。

3.5.1. DPMサーバをアップグレードインストールした場合

- ◆ DPM クライアントについて

DPM サーバをアップグレードインストールした場合、すべてのアップグレードインストールの終了後、DPM クライアントのアップグレードインストールを行ってください。

DPM クライアントのアップグレードインストールについては、本書「3.6 管理対象マシンコンポーネントをアップグレードインストールする」、および「DeploymentManager インストールガイド」の「3.3. DPM クライアントをアップグレードインストールする」を参照してください。

- ◆ DPM サーバのアップグレードインストール前に DPM と NetvisorPro の TFTP サービスの連携設定を行っていた場合、アップグレードインストール後に再度設定を行う必要があります。

連携設定については、「DeploymentManager インストールガイド」の「付録 E DPM サーバと NetvisorPro V を同一マシンで使用する」を参照してください。

- ◆ SigmaSystemCenter 3.0 update 1 より前に取得した RAID 構成の管理対象マシンのバックアップイメージを SigmaSystemCenter 3.0 update 1 以降でリストアする場合は、「DeploymentManager ファーストステップガイド」の「付録 C 管理対象マシンを RAID 構成で利用のお客様へ」を参照してください。

- ◆ マシン名でマシンリソースを管理している場合

SigmaSystemCenter 3.0 update 1 に同梱されている DeploymentManager Ver.6.02 から、同じ名前のマシンが登録可能になりました。そのため、マシンの置換を実行した際、従来は置換後にグループプールへ移動したマシンの名前が「(マシン名)x」(x は任意の数字) に変更されていましたが、アップグレード後は変更されません。マシン名で管理を行っており、運用上影響がある場合は、運用方法の再検討をお願いいたします。名前でもマシンリソースの区別を行いたい場合は、アップグレード後、DPM の識別名を使用してください。識別名は、運用で変更されることがなく、SystemProvisioning のマシン名に反映されます。識別名の設定方法については、「DeploymentManager リファレンスガイド」の「3.7.2 管理対象マシン編集」を参照してください。

3.5.2. SigmaSystemCenter 2.1 以前でDPMをSystemProvisioningと別マシンにインストールしていた場合

SigmaSystemCenter 2.1 以前で DeploymentManager を SystemProvisioning と別のマシンにインストールしていた場合、アップグレードインストール後に以前のバージョンのコマンドライン for DPM を削除する必要があります。

以下の手順に従って、以前のバージョンのコマンドライン for DPM をアンインストールしてください。

注: アンインストールを行う前に、DPM に関する処理を終了させてください。

1. [スタート] メニューから [コントロールパネル(C)] - [プログラムと機能] をクリックし、「プログラムと機能」画面を開きます。
2. [DeploymentManager (コマンドライン for DPM)] を選択し、[アンインストール]、または [変更] をクリックします。
3. 「セットアップタイプ」画面が表示されますので、[アンインストール] を選択し、[次へ] をクリックします。
4. 「ファイル削除の確認」画面が表示されますので、[OK] をクリックします。
5. 「セットアップ ステータス」画面が表示され、アンインストールが開始されます。
6. 「メンテナンスの完了」画面が表示されますので、[完了] をクリックしてください。

以上で、コマンドライン for DPM のアンインストールは完了です。

3.5.3. SystemMonitor性能監視をアップグレードインストールした場合

- ◆ SigmaSystemCenter 1.3 以前のバージョンからアップグレードインストールした場合、以前のバージョンの SystemMonitor 性能監視で利用していたデータベースのインスタンスは削除されません。アンインストールが必要な場合、手動でアンインストールする必要があります。以下の手順に従ってアンインストールしてください。

1. [スタート] メニューから [コントロールパネル(C)] - [プログラムの追加と削除] を選択します。
2. 「プログラムの追加と削除」画面が表示されます。左ペインから [プログラムの変更と削除(H)] をクリックします。[現在インストールされているプログラム] から、以前のバージョンで利用していたデータベースのプログラムを選択し、[削除] をクリックします。既定の設定でデータベースを利用していた場合、プログラム名は、「Microsoft SQL Server Desktop Engine (RM_PFMDBIS)」です。
3. 削除確認のダイアログボックスが表示されます。[はい(Y)] をクリックします。
4. アンインストールが正常に終了すると、ダイアログが自動で閉じます。プログラム一覧から対象のプログラムが削除されたことを確認します。

- ◆ Linux 管理対象マシンが、StoragePathSavior によるパス冗長構成である環境で、SigmaSystemCenter 2.1 Update2、および Update3 からアップグレードインストールした場合、サービス設定ファイルの編集が必要になります。
詳細については、「SystemMonitor 性能監視ユーザズガイド」の「10.6 アップグレード時 / パッチ適用時の注意事項」を参照してください。

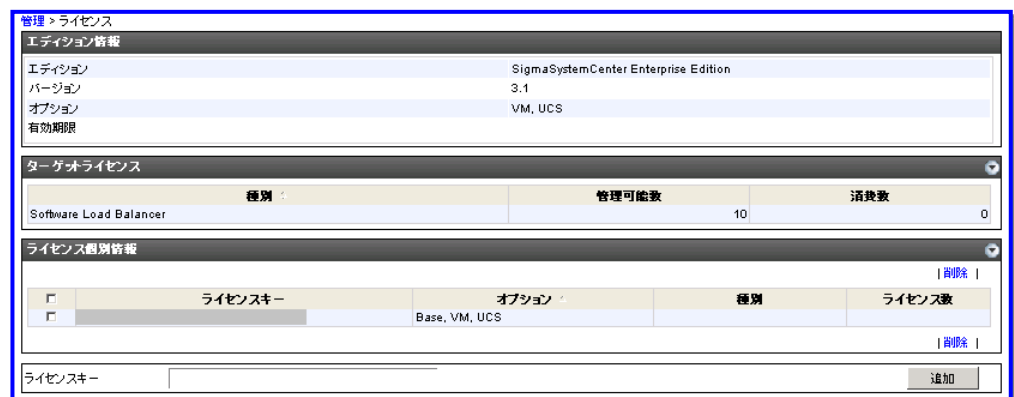
3.5.4. SystemProvisioningをアップグレードインストールした場合

- ◆ ライセンスの置き換えについて
SigmaSystemCenter の使用を開始する前に、以下の手順に従って、ライセンスの置き換えを行ってください。ライセンスの置き換え中に、マシンの稼動、仮想マシンの作成などの処理を実行するとライセンス不足によりエラーとなりますので注意してください。

注:

- ・ SigmaSystemCenter 1.3 以前からアップグレードの場合は、旧バージョンのライセンスの削除は不要です。
- ・ ライセンスキーを入力して [追加] をクリックすると、「PVM サービスを再起動し、ライセンスを有効化してください。」というメッセージが表示されますが、メッセージが表示されるたびに再起動する必要はありません。

1. Web コンソールを起動して、[管理] ビューに切り替えます。
2. [管理] ツリーから [ライセンス] をクリックします。
3. メインウィンドウに旧バージョンのライセンスの詳細情報が表示されます。
4. エディションライセンス以外のライセンスキーのチェックボックスをオンにして、[削除] をクリックします。
5. エディションライセンスのチェックボックスをオンにして、[削除] をクリックします。
6. [ライセンスキー] テキストボックスに、新バージョンのエディションライセンスのライセンスキーを入力して、[追加] をクリックします。
7. 新バージョンの残りのライセンスキーを順次、追加します。



8. SystemProvisioning を再起動します。

◆ 構成情報データベースのバックアップについて

アップグレードインストールを実行すると構成情報データベースのバックアップがインストール環境の以下のパスに保存されます。アップグレードインストールが完了すると、保存された構成情報データベースのバックアップは不要ですので、削除してください。

- SigmaSystemCenter 1.3 以前からのアップグレードの場合:

%windir%\system32\pvminf\YYYYMMDDhhmmss.dat ※1

例)

C:\Windows\system32\pvminf\20090703123456.dat

- SigmaSystemCenter 2.0、および 2.1 からのアップグレードの場合:

%ProgramFiles%\Microsoft SQL Server\

MSSQL.x\MSSQL\Backup\pvminf\YYYYMMDDhhmmss.dat ※2

例)

C:\Program Files\Microsoft SQL Server\

MSSQL.1\MSSQL\Backup\pvminf\20090703123456.dat

- SigmaSystemCenter 3.0 からのアップグレードの場合:

%ProgramFiles%\Microsoft SQL Server\

MSSQLx_y.SSCEMDB\MSSQL\Backup\pvminf\YYYYMMDDhhmmss.dat

※3

例)

C:\Program Files\Microsoft SQL Server\

MSSQL10_50.SSCEMDB\MSSQL\Backup\pvminf\20090703123456.dat

※1 YYYYMMDDhhmmss は、構成情報データベースをバックアップした日時です。

例) の場合は、2009 年 7 月 3 日 12 時 34 分 56 秒を意味します。

※2 MSSQL.x の x は、DB インスタンス数によって、自動で採番されるため、

"%ProgramFiles%\Microsoft SQL Server\MSSQL.x\MSSQL\Data" の下に、

"pvminf.mdf" が存在する階層を指します。

"pvminf.mdf" が "MSSQL.1" の下にあれば、バックアップの位置も "MSSQL.1" の階層になります。

※3 MSSQL.x_y の x_y は、インストールしている SQL Server の製品バージョンを意味します。SQL Server 2008 R2 をインストールする場合は、MSSQL10_50 になります。

◆ 「Universal RAID Utility」(URU) の監視イベントについて

SigmaSystemCenter 3.1 で、RAID システム管理ユーティリティである「Universal RAID Utility」(URU) の監視イベントのポリシー設定が可能になりました。

標準ポリシーのポリシーテンプレートにも URU 監視イベントに対するアクション設定が追加されていますが、アップグレードインストールした場合は、以前の設定内容を引き継ぐため、本イベントに対するアクションが設定されていません。

URU の監視イベントを有効にする場合には、以下のいずれかの手順を実施してください。

- 既存ポリシーに URU の監視イベントに対するアクションを追加する
- ポリシーテンプレートから再作成する

URU 監視イベントの詳細、標準ポリシーテンプレートについては、「SigmaSystemCenter リファレンスガイド データ編」の「1.2.1 ESM/ServerManager 経由で検出できる障害」、および「1.6.1 標準ポリシーの設定内容」を参照してください。

ポリシーの作成、編集手順については、「SigmaSystemCenter コンフィギュレーションガイド」の「4.10. ポリシーを作成する」を参照してください。

アップグレード前の環境に応じて、以下の手順を実行してください。

- ◆ SigmaSystemCenter 1.3 以前のバージョンからアップグレードインストールした場合
以前のバージョンで使用していた製品やコンポーネントの設定が引き継がれず、再度設定が必要となるものがあります。「3.5.5 SigmaSystemCenter 1.3 以前のバージョンからアップグレードした場合」を参照し、再度設定を行ってください。
- ◆ SigmaSystemCenter 2.0 以降のバージョンからアップグレードインストールした場合
以前のバージョンで使用していた製品やコンポーネントの設定が引き継がれず、再度設定が必要となるものがあります。「3.5.6 SigmaSystemCenter 2.0 以降のバージョンからアップグレードした場合」を参照し、再度設定を行ってください。

3.5.5. SigmaSystemCenter 1.3 以前のバージョンからアップグレードした 場合

SigmaSystemCenter 1.3 以前のバージョンからアップグレードインストールを行った場合には、アップグレードインストールを行った後に以下の設定が必要です。

- ◆ 使用していた関連製品を SigmaSystemCenter 3.1 で使用するには
SigmaSystemCenter 1.3 以前のバージョンで使用していた関連製品を SigmaSystemCenter 3.1 で使用するには、アップグレードインストールを行った後サブシステムとして登録する必要があります。

VMware vCenter Server、および VMware ESX については、以前のバージョンに設定していた情報がアップグレード後に引き継がれるため、サブシステムとしての登録は不要です。

注: アップグレードインストール後に ESX (仮想マシンサーバ) のキャパシティ値が [環境設定] - [仮想リソース] で設定していたキャパシティの値の変更になります。各 ESX (仮想マシンサーバ) のキャパシティを変更していた場合は、アップグレード後に再設定を行う必要があります。

以下の関連製品はアップグレードインストールを行った後、サブシステムとして登録が必要です。以下の製品について登録を行ってください。手順については、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「4.2 サブシステムを追加する」を参照してください。

- NetvisorPro
- ストレージ管理サーバ
- 120Ba-4 用インテリジェントスイッチ (L2)、または 110Ba-e3 用インテリジェントスイッチ (L2)
- DPM サーバ

注:

- 120Ba-4 用インテリジェントスイッチ (L2)、または 110Ba-e3 用インテリジェントスイッチ (L2) を SigmaSystemCenter 3.1 で管理するための設定手順については、お問い合わせください。
 - DPM サーバを追加する際は、DeploymentManager がインストールされているサーバのホスト名を指定して追加してください。
-

◆ 仮想環境を管理するためのポリシーの再設定

SigmaSystemCenter 2.0 以降のバージョンでは、VM 最適配置機能や省電力機能が追加され、仮想マシンサーバの管理機能が強化されました。

SigmaSystemCenter 1.3 以前のバージョンでは、仮想環境を管理するためのポリシーは、SystemProvisioning が管理するすべての仮想マシンサーバに対して一律に適用されていましたが、SigmaSystemCenter 2.0 以降のバージョンでは、運用グループ単位にポリシーを設定することができるようになりました。これらの機能強化に伴い、仮想環境を管理するためのポリシーの再設定が必要となります。

SigmaSystemCenter 1.3 以前のバージョンからアップグレードインストールを行った場合、既存のポリシー設定内容は、SigmaSystemCenter 2.0 以降のバージョンでのポリシーの形式に変換されます。ただし、仮想マシン単体の移動系ポリシーアクションは、SigmaSystemCenter 2.0 で廃止されたため、廃止されたポリシーアクションを登録していたポリシー設定は "何もしない" に変換されます。

変換されたポリシーは、[管理] ビューのポリシーの詳細情報画面から確認することができます。

変換されたポリシーは、仮想マシン用の運用グループに自動的に登録されます。必要に応じて設定内容の見直しを行ってください。

また、SigmaSystemCenter 2.0 以降のバージョンでは、仮想マシンサーバを管理対象マシンとして管理します。アップグレード後に、仮想マシンサーバを登録した運用グループを作成して仮想マシンサーバ用のポリシーを登録してください。仮想マシンサーバ用の標準ポリシー、変換された既存ポリシー、またはユーザが作成する専用のポリシーを使用することができます。

⇒「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「4.10 ポリシーを作成する」、および「7. マシンを運用するための操作 ([運用] ビュー)」を参照。

また、VM 最適配置機能を利用する場合は、以下を参照して設定を行ってください。

⇒「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「6.3 VM 最適配置機能を設定する」を参照。

◆ EMC Storage (Symmetrix / CLARiX) を管理としている場合

SigmaSystemCenter 2.0 以降のバージョンでは、EMC Storage についても、iStorage と同様の設定で SigmaSystemCenter から構成変更できるようになりました。そのため、SigmaSystemCenter 1.3 以前のバージョンで EMC Storage を管理していた場合、ストレージの設定情報は引き継がれません。以下の内容について再設定してください。

Symmetrix、または CLARiX のストレージ管理サーバをサブシステムに登録した後、ストレージの情報を収集して SigmaSystemCenter の管理対象として登録してください。

⇒「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「4.6. ストレージを登録する」を参照。

Symmetrix、または CLARiX に接続する HBA について、収集した HBA に設定し直してください (SigmaSystemCenter 2.0 以降のバージョンでは、CLARiX、および Symmetrix の HBA は、"- " (ハイフン) 区切りのアドレスになっています)。

⇒「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「4.9.3 [ストレージ] タブを設定するには」を参照。

注: SigmaSystemCenter 1.3 以前のバージョンで作成、使用していた CLARiX、Symmetrix ストレージ制御のためのローカルスクリプトは、SigmaSystemCenter 2.0 以降のバージョンでは使用できません。削除するか、使用しないよう注意してください。

◆ アップグレードインストール前に構成情報データベースをリモートの SQL に構築していた場合

アップグレードインストール前に SystemProvisioning の構成情報データベースをリモートの SQL に構築していた場合、SigmaSystemCenter 3.1 へアップグレードインストールした際に、ローカルの SQL にデータベースが構築されます。

アップグレードインストール後に「SigmaSystemCenter リファレンスガイド データ編」の「付録 B 構成情報データベースの移行」を参照して構成情報データベースをリモートの SQL に再構築してください。

- ◆ DPM シナリオの再登録
 - アップグレードインストール前に、グループ / サーバのプロパティから登録を解除後に、シナリオを削除していた場合
グループ / マシンに削除したシナリオを再登録してください。
 - アップグレードインストール前に、グループの [サーバ設定] が使用中のため、シナリオを削除できなかった場合
ホスト設定の [ソフトウェア] タブに登録されているシナリオを削除し、ソフトウェア名に DPM サーバのホスト名が付加されたシナリオを再登録してください。

注: シナリオ名に DPM サーバのホスト名と異なる名前が付加されているシナリオは、配布することができません。グループ / モデル / ホスト / マシンに設定しないでください。

- ◆ VM 稼働時に DPM サーバへ登録する設定を行っている場合
SigmaSystemCenter 3.0 update 1 で、仮想マシンを稼働時に DPM へ登録する場合、仮想マシンが所属している運用グループの階層をそのまま DPM に作成し、登録されるようになりました。
そのため、アップグレード直後の起動時に、SystemProvisioning の運用グループ構成を DPM に反映する処理を行います。しかし、SigmaSystemCenter 1.3 以前からアップグレードした場合、DPM サーバ (管理サーバ for DPM) 情報が引き継がれないため、上記処理が実行されません。DPM サーバをサブシステムに登録し、収集処理が完了したことを確認後、下記のコマンドを実行してください。その後、[リソース] ビューにて、仮想マシンのマシン収集を実行してください。

```
ssc dpm-location notify -all
```

3.5.6. SigmaSystemCenter 2.0 以降のバージョンからアップグレードした場合

SigmaSystemCenter 2.0 以降のバージョンからアップグレードインストールを行った場合には、アップグレードインストールを行った後に以下を確認してください。

- ◆ SQL Server について

注: SigmaSystemCenter 2.0~3.0 からアップグレードインストールした場合、アップグレードインストールを行った後に以下を確認する必要があります。

SigmaSystemCenter 3.1 update 1 で、SigmaSystemCenter は SQL Server 2012 Express をインストールするようになりました。

以下の各バージョンからアップグレードインストールした場合、以下の注意事項があります。

<SigmaSystemCenter 2.0~3.0 からアップグレードインストールした場合>

アップグレード前に使用していた SQL インスタンスをそのまま使用します。

既存の SQL Server インスタンスを SQL Server 2012 にアップグレードする場合は、すべてのコンポーネントのインストール（アップグレード）が完了した後に、手動でアップグレードを実施してください。

アップグレード手順については、以下を参照してください。

<http://www.nec.co.jp/WebSAM/SigmaSystemCenter/faq.html>

「SigmaSystemCenter 管理サーバのデータベースとして製品版の SQL Server を利用できますか？」

◆ EMC Storage (CLARiX) を使用している場合

注: SigmaSystemCenter 2.0~3.1 からアップグレードインストールした場合、アップグレードインストールを行った後に以下を確認する必要があります。

SigmaSystemCenter 3.1 まではフェイルオーバー・モードの既定値は "1" でしたが、SigmaSystemCenter 3.1 update 1 以降では、フェイルオーバー・モードの既定値は "4" に変更になりました。ご使用の構成によって、既定値以外の値を使用したい場合、レジストリを変更することで設定を変更することができます。

フェイルオーバー・モードの既定値を変更する場合は、「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 概要編」の「4.4.9 CLARiX / VNX のフェイルオーバー・モードの設定変更方法について」を参照してください。

注: SigmaSystemCenter 2.0~2.1 update 2 からアップグレードインストールした場合、アップグレードインストールを行った後に以下を確認する必要があります。

- 停止中のホストに設定されている HBA とストレージの情報は引き継がれません。以下の手順に従って、再度ストレージ情報の収集 / 登録を行い、HBA をホストに登録してください。グループで稼働中のホストに設定されている HBA とストレージの情報は引き継がれますので、再設定の必要はありません。

ストレージの情報を収集して SigmaSystemCenter の管理対象としてディスクボリュームを登録してください。

⇒「SigmaSystemCenter コンフィギュレーションガイド」の「4.6. ストレージを登録する」を参照。

ディスクボリュームの登録後、接続する HBA について、以下のいずれかの方法で再設定してください。

3 アップグレードインストールを実行する

- コマンドより接続する HBA を再登録後、HBA をホストに設定してください。
⇒「ssc コマンドリファレンス」の「2.12.3 HBA の設定」を参照。
⇒「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「4.9.3 [ストレージ] タブを設定するには」を参照。
- 各ストレージの事前設定の手順を参照して、ストレージグループに論理ディスクとホストを割り当て、HBA 情報を収集した後、HBA をホストに設定してください。
⇒「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「3.5.1 各ストレージの事前設定を行う」を参照。
⇒「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「4.9.3 [ストレージ] タブを設定するには」を参照。

HBA に接続されている SP 情報と、異なる SP 情報 (ディスクボリューム) をホストに設定した場合、アップグレードインストールでホスト設定にディスクボリュームが設定されません。確認や対処については、「3.2.3 アップグレードインストールを行う際の注意」を参照してください。

- SigmaSystemCenter 2.1 Update 3 以降から、CLARiX のディスクボリュームの管理対象がストレージグループから LUN に変更されました。アップグレードインストール後に、待機マシンのストレージ設定を行う必要があります。以下の内容について設定を行ってください。

1. 待機マシンのストレージグループの作成

SigmaSystemCenter 2.1 update 3 以降から待機マシン用のストレージグループを作成する必要があります。

1. 管理サーバから以下の Navisphere CLI のコマンドを実行します。

```
naviseccli -h SP の IP storagegroup -create -gname ストレージグループ名 -o
```

2. 管理サーバから [リソース] ビューのストレージからストレージ収集を行い、SigmaSystemCenter に作成したストレージグループを反映します。

2. 待機マシンの HBA、パス情報の登録

待機マシンの HBA、パス情報はアップグレードでは引き継がれないため、登録を行う必要があります。

1. 管理サーバから以下の SSC コマンドを実行し、待機マシンのパス情報を確認します。

```
ssc show diskarraypath ディスクアレイ名
```


2. 管理サーバから以下の SSC コマンドを実行し、待機マシンの HBA とパス情報を登録します。

```
ssc set hba ディスクアレイ名 ディスクアレイパス WWPN -wwnn WWNN
```

3. 待機マシンに HBA を設定します。
[リソース] ビューからマシンプロパティ設定の [ストレージ] タブにて上記で登録した HBA 情報を待機マシンに登録します。

◆ 設定ファイルの書き換えを行っていた場合

注: SigmaSystemCenter 2.0~3.0 update 1 からアップグレードインストールした場合、アップグレードインストールを行った後に以下を確認する必要があります。

アップグレードインストールした際に、以下のファイルは SigmaSystemCenter 3.1 の初期ファイルに上書きされます。

アップグレードインストール前のファイルは SystemProvisioning インストールフォルダ配下の backup フォルダに保存されますので、SigmaSystemCenter 2.0 ~ 3.0 update 1 で対象のファイルを書き換えていた場合は、アップグレード後に手動で再修正を行ってください。

SystemProvisioning インストールフォルダ配下
(x86 OS の既定値: %ProgramFiles%¥NEC¥PVM¥)
(x64 OS の既定値: %ProgramFiles(x86)%¥NEC¥PVM¥)

注: backup フォルダの PVMServiceProc.exe.config を再利用する場合、以下のエントリを追記する必要があります。

```
<runtime>  
  <legacyCorruptedStateExceptionsPolicy enabled="true" />  
</runtime>
```

なお、アップグレード前のバージョンによって、対象のファイルが異なります。
各バージョンの対象のファイルは以下の通りです。

<SigmaSystemCenter 2.0~2.1 update 3 からアップグレードした場合>

- bin¥PVMServiceProc.exe.config
- bin¥pvmutil.exe.config
- bin¥ssc.exe.config
- bin¥ManagementServer.config
- bin¥EsmEvents.xml

3 アップグレードインストールを実行する

- bin¥EventFormatter.xml
- Provisioning¥Web.config
- Provisioning¥Log4net.config
- Provisioning¥App_Data¥Config¥CustomizationConfig.xml

なお、以下のファイルは SigmaSystemCenter 3.0 で conf フォルダ配下にインストールされるように変更されました。

- bin¥EsmEvents.xml
- bin¥EventFormatter.xml
- bin¥PIMSensorTemplate.xml
- bin¥SensorEventID.xml
- bin¥PolicyTemplate.xml (conf¥policy フォルダ配下に、分割されてインストールされます。)

<SigmaSystemCenter 3.0～3.0 update 1 からアップグレードした場合>

- bin¥PVMServiceProc.exe.config
- bin¥pvmutil.exe.config
- bin¥ssc.exe.config
- bin¥ManagementServer.config
- Provisioning¥Web.config
- Provisioning¥Log4net.config
- Provisioning¥App_Data¥Config¥CustomizationConfig.xml
- conf¥log_base.config
- conf¥log.config
- conf¥EsmEvents.xml
- conf¥EventFormatter.xml
- conf¥VMwareEvents.xml
- conf¥StandaloneEsxEvents.xml
- conf¥oscustom¥sysprep_win2k3.inf
- conf¥oscustom¥sysprep_win2k8r2.xml
- conf¥oscustom¥sysprep_win7.xml
- conf¥oscustom¥sysprep_win7x64.xml
- conf¥oscustom¥sysprep_winxp.inf

- ◆ PVM サービス起動時の収集をオフにしていた場合

注: SigmaSystemCenter 2.1 update 3～3.0 update 1 からアップグレードインストールした場合、アップグレードインストールを行った後に以下を確認する必要があります。

アップグレードインストールを行う前に、PVM サービス起動時の収集をオフにしていた場合、SigmaSystemCenter 3.1 の初期値のオンで上書きされます。

オフにする場合は、コマンドより再設定してください。

⇒「ssc コマンドリファレンス」の「2.3.2 起動時収集の設定」を参照。

◆ テンプレート関連の注意事項

注: SigmaSystemCenter 2.1~3.0 update 1 からアップグレードインストールした場合、アップグレードインストールを行った後に以下を確認する必要があります。

SigmaSystemCenter 2.1~3.0 update 1 で作成していたテンプレートに関して注意事項があります。

詳細については、「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編」の「1.2.6 テンプレートについて」、「2.2.1 SigmaSystemCenter 3.0 以降にアップデートすると Differential Clone 用のテンプレートが使用できない」、および「2.2.2 SigmaSystemCenter 2.1 Update 3 以降にアップデートすると Disk Clone 用のテンプレートが使用できない」を参照してください。

◆ ロール機能を使用している場合

注: SigmaSystemCenter 2.0~2.1 update 3 からアップグレードインストールした場合、アップグレードインストールを行った後に以下を確認する必要があります。

SigmaSystemCenter 3.0 でロール機能は機能強化されました。SigmaSystemCenter 2.0、および 2.1 でロール機能をご利用の場合、従来の設定は引き継がれません。

新規にロールの設定を実施してください。

詳細については、「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 概要編」の「1.1. ユーザとロール」を参照してください。

◆ VM 稼働時に DPM サーバへ登録する設定を行っている場合

注: SigmaSystemCenter 2.0~3.0 からアップグレードインストールした場合、アップグレードインストールを行った後に以下を確認する必要があります。

SigmaSystemCenter 3.0 update1 で、仮想マシンを稼働時に DPM へ登録する場合、仮想マシンが所属している運用グループの階層をそのまま DPM に作成し、登録されるようになりました。そのため、アップグレード直後の起動時に、SystemProvisioning の運用グループ構成を DPM に反映する処理を行います。通信エラーなどにより反映処理が失敗していた場合は、失敗した原因を取り除いた後、下記のコマンドを実行してください。その後、[リソース] ビューにて、仮想マシンのマシン収集を実行してください。

```
ssc dpm-location notify -all
```

3 アップグレードインストールを実行する

◆ リソースプール監視機能について

注: SigmaSystemCenter 2.0~3.0 からアップグレードインストールした場合、アップグレードインストールを行った後に以下を確認する必要があります。

- SigmaSystemCenter 3.0 Update 1 で、リソースプール監視機能を追加し、仮想マシンサーバに対する標準ポリシーで通報を行うようになりました。

しかし、既存のポリシー、および標準ポリシーは、アップグレードインストール時に以前の設定内容が引き継がれるため、自動では本機能による通報は有効になりません。

本機能による通報を行うようにするためには、既存ポリシーに手動で本機能のイベントに対するアクションを追加するか、ポリシーテンプレートからポリシーを再作成する必要があります。

詳細については、「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 概要編」の「2.11. リソースプール」、および「SigmaSystemCenter リファレンスガイド データ編」の「1.6. 標準ポリシーについて」を参照してください。

注: SigmaSystemCenter 3.0 Update 1 からアップグレードインストールした場合、アップグレードインストールを行った後に以下を確認する必要があります。

- SigmaSystemCenter 3.1 では、ルートリソースプールとサブリソースプールに対するイベントを分離しました。

このため、アップグレードインストール後は、サブリソースプールに対するイベントが変わるため、サブリソースプールに対する監視が行われなくなります。

アップグレードインストール後にも、リソースプール監視機能によるサブリソースプールの監視を行いたい場合は、サブリソースプールのイベントに対するアクションを追加してください。

詳細については、「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 概要編」の「2.11. リソースプール」、および「SigmaSystemCenter リファレンスガイド データ編」の「1.6. 標準ポリシーについて」を参照してください。

◆ 最適配置機能について

注: SigmaSystemCenter 3.0~3.0 update 1 からアップグレードした場合、アップグレードインストールを行った後に以下を確認する必要があります。

SigmaSystemCenter 3.1 update 1 で、VM 配置制約機能を利用している場合、アップグレードインストール後に以下のコマンドを実行し、配置制約設定の妥当性の確認を行ってください。

```
ssc vmop verify-rule
```

確認を行うまでは、アップグレードインストール前に設定された配置制約のうち、VM-VM (EQ) 制約の編集を行うことができません。(編集以外の操作については影響ありません。)

なお、アップグレードインストール前の配置制約に不正制約 (Loop を除く) が存在する場合、不正制約と判断された VM-VM (EQ) 制約は引き継ぎません。

不正制約の詳細については、当該バージョンの「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 概要編」の「2.12.12 VM-VMS (Pin) 制約と VM-VM (EQ)制約の複合設定」を参照してください。

◆ テンプレートの表示 / 設定について

注: SigmaSystemCenter 2.0~2.1 Update 3 からアップグレードインストールした場合、アップグレードインストールを行った後に以下を確認する必要があります。

- アップグレード前に作成された Disk Clone テンプレートは、リソース画面のソフトウェアの基本情報で OS タイプは "不明" と表示されます。正しく表示するには、再度テンプレート編集で再設定を行ってください。
- アップグレード前に作成された HW Profile Clone テンプレート、Disk Clone テンプレートを登録した運用グループは、[ホストプロファイル] タブの [OS 設定] グループボックスで Owner 名、組織名、プロダクトキーは自動で設定されないの、アップグレード後に設定を行ってください。

◆ HW 予兆の異常系イベントによる復旧処理について

注: SigmaSystemCenter 2.1 Update 3 からアップグレードインストールした場合、アップグレードインストールを行った後に以下を確認する必要があります。

SigmaSystemCenter 3.0 で HW 予兆の異常系イベントによる復旧処理の内容が変更されました。

- 標準ポリシー (仮想マシンサーバ)
- 標準ポリシー (仮想マシンサーバ 省電力)
- 標準ポリシー (仮想マシンサーバ 予兆)
- 標準ポリシー (仮想マシンサーバ ESXi)
- 標準ポリシー (仮想マシンサーバ Hyper-V)
- 標準ポリシー (仮想マシンサーバ Hyper-V 予兆)

上記のポリシーテンプレートからポリシーを作成して利用していた場合は、以下に記載する変更内容に従って既存ポリシーに手動で本機能のイベントに対するアクションを変更するか、ポリシーテンプレートからポリシーを再作成する必要があります。

3 アップグレードインストールを実行する

1. 標準ポリシー (仮想マシンサーバ ESXi) 以外の場合

対応処置設定名が「稼働中の VM を移動・サーバシャットダウン」のアクション設定

<変更前>

- マシン設定 / HW センサー状態解析、故障ステータス設定
- 通報 / E-mail 通報、イベントログ出力
- VMS 操作 / 稼働中の VM を移動 (Hot Migration, Failover)
- マシン操作 / マシン停止 (シャットダウン)

<変更後>

- マシン設定 / センサー診断、故障ステータス設定
- 通報 / E-mail 通報、イベントログ出力
- VMS 操作 / 稼働中の VM を移動 (Migration, Failover)
- マシン操作 / VM サーバ停止 (予兆)

※「VMS 操作 / VM サーバ停止 (予兆)」は、アクションの実行条件を "Completed" にしてください。

2. 標準ポリシー (仮想マシンサーバ ESXi) の場合

対応処置設定名が「稼働中の VM を移動・サーバシャットダウン」のアクション設定

<変更前>

- マシン設定 / HW センサー状態解析、故障ステータス設定
- 通報 / E-mail 通報、イベントログ出力
- マシン操作 / マシン停止 (シャットダウン)
- VMS 操作 / 全 VM を移動 (Failover)

<変更後>

- マシン設定 / センサー診断、故障ステータス設定
- 通報 / E-mail 通報、イベント出力
- VMS 操作 / 全 VM を移動 (Quick Migration, Failover)
- VMS 操作 / VM サーバ停止 (予兆)

※「VMS 操作 / VM サーバ停止 (予兆)」は、アクションの実行条件を "Completed" にしてください。

3.5.7. SigmaSystemCenter 2.1 以前のESMPRO/ServerManager Ver.4 からアップグレードインストールした場合

SigmaSystemCenter 2.1 以前の ESMPRO/ServerManager Ver.4 からアップグレードインストールを行った場合は、Web GUI 上で自動登録を行ってください。

注:

- DianaScope Manager がインストールされていた場合、アップグレードインストール後、DianaScope Manager の管理対象マシンのみが登録されます。
 - Ver. 4.1 未満の ESMPRO/ServerAgent などの管理対象外のマシン、およびマップは登録されません。
-

3.6. 管理対象マシンコンポーネントをアップグレードインストールする

次節以降では、管理対象マシンコンポーネントである DPM クライアント (SigmaSystemCenter 2.1 までのクライアントサービス for DPMに相当) をアップグレードインストールする手順を説明します。

ESMPRO/ServerAgent は、SigmaSystemCenter のアップグレードに合わせてアップグレードを行う必要はありません。

管理対象マシンの OS によって、アップグレードインストール方法が異なります。ご利用の環境に応じて対応する節を参照してください。

- ◆ Windows (x86 / x64) 管理対象マシンの場合
「3.7 Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへアップグレードインストールする」、「3.8 Windows Server 2008 Server Core 管理対象マシンへアップグレードインストールする」
または
「3.10 DPM クライアントを自動でアップグレードする」を参照してください。
- ◆ Linux 管理対象マシンの場合
「3.9 Linux 管理対象マシンへアップグレードインストールする」
または
「3.10 DPM クライアントを自動でアップグレードする」を参照してください。
- ◆ VMware ESX 管理対象マシンの場合
「3.9 Linux 管理対象マシンへアップグレードインストールする」を参照してください。
- ◆ Citrix XenServer 管理対象マシンの場合
「3.9 Linux 管理対象マシンへアップグレードインストールする」を参照してください。
- ◆ Microsoft Hyper-V 管理対象マシンの場合
「3.7 Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへアップグレードインストールする」
または
「3.10 DPM クライアントを自動でアップグレードする」を参照してください。

- ◆ 管理対象マシンが仮想マシン場合
仮想マシンの OS により、
「3.7 Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへアップグレードインストールする」
または
「3.9 Linux 管理対象マシンへアップグレードインストールする」を参照してインストールしてください。
自動でアップグレードを行う場合は、「3.10 DPM クライアントを自動でアップグレードする」を参照してください。

3.7. Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへアップグレードインストールする

OSがWindows (x86 / x64) の管理対象マシンへは、DPM クライアントをアップグレードインストールする必要があります。ウィザードを使用して DPM クライアントをアップグレードインストールする手順を説明します。

オプション、パラメータを指定せずにインストーラ (AgentSetup.exe) を起動すると、コンポーネントをインストールするためのウィザードが開始します。

詳細は次項以降を参照してください。

注: 本章のアップグレードインストール手順は、SigmaSystemCenter 1.2 以降のバージョンからアップグレードインストールする場合にのみ適用されます。

SigmaSystemCenter 1.1 の DPM クライアントをアップグレードインストールする場合は、「DeploymentManager インストールガイド」の「3.3. DPM クライアントをアップグレードインストールする」を参照してください。

3.7.1. アップグレードインストールを実行するには

1. SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R を DVD/CD-RW ドライブに挿入します。
2. コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行し、インストーラを起動します。

インストール DVD-R: ¥AgentSetup.exe

3. インストーラが起動し、ウィザードが開始します。



ウィザードに従ってインストールを実行してください。

「3.7.2 コンポーネントの選択」～「3.7.6 アップグレードインストールの完了」では、各ウィザード画面の流れに沿って説明します。

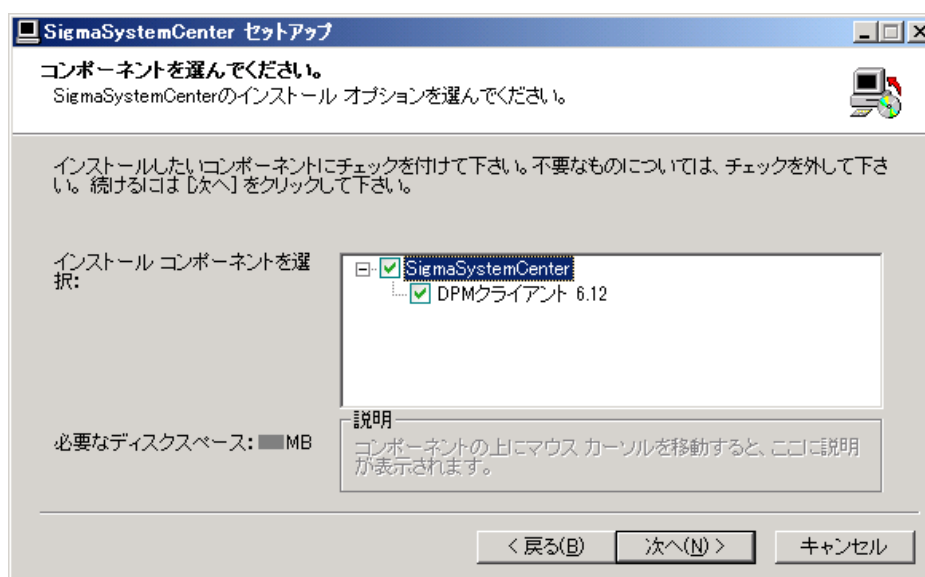
3.7.2. コンポーネントの選択

「コンポーネントの選択」画面が表示されます。

インストールするコンポーネントを選択してください。

本バージョンのコンポーネントが既にインストールされている場合は選択できません。

選択完了後、[次へ(N)>] をクリックします。



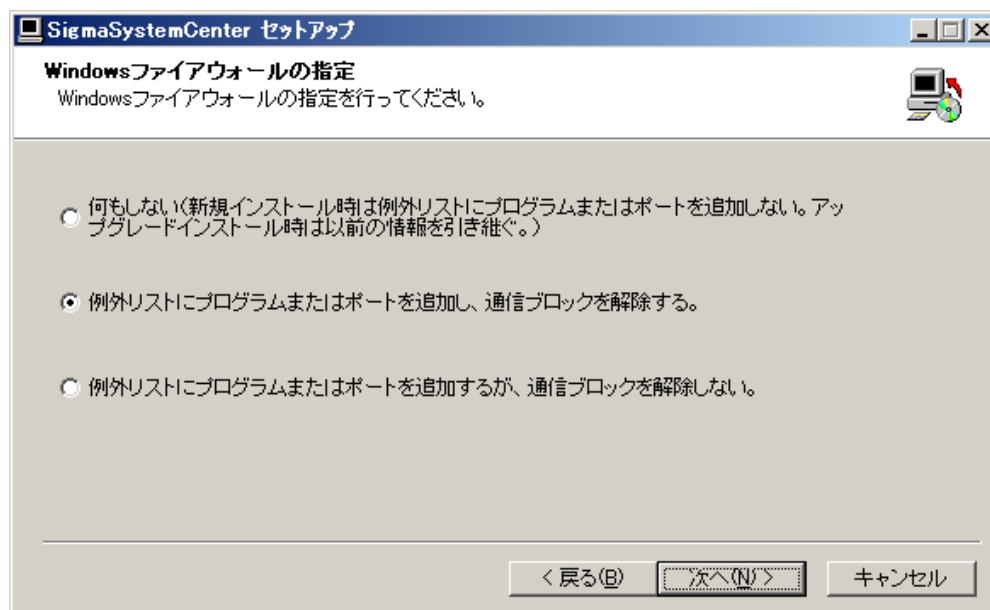
SigmaSystemCenter	この項目を選択した場合、以下のすべてのコンポーネントが自動的に選択されます。
DPM クライアント	DPMクライアントをインストールします。

3.7.3. Windowsファイアウォールの指定

「Windows ファイアウォールの指定」画面が表示されます。

項目を指定し、[次へ(N)>] をクリックします。

3 アップグレードインストールを実行する



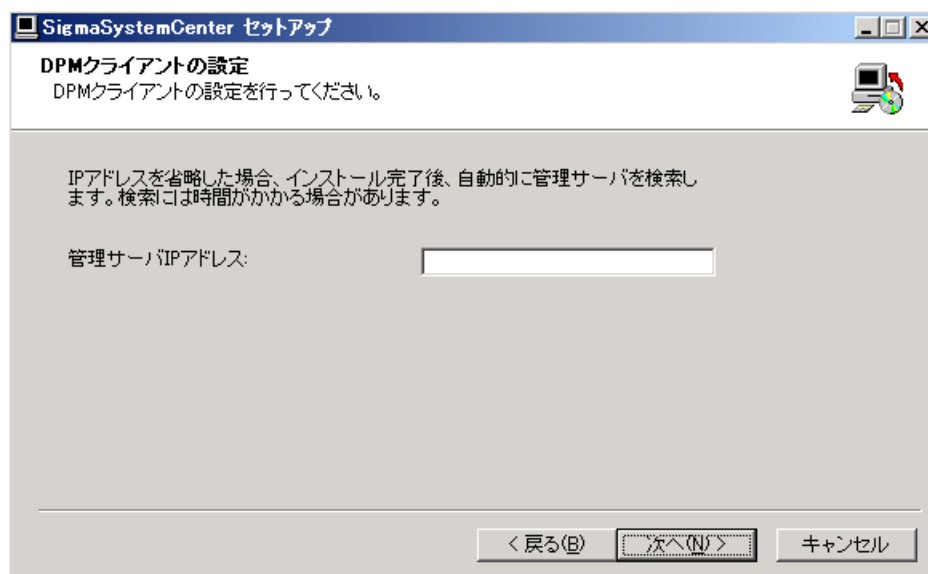
何もしない (新規インストール時は例外リストにプログラムまたはポートを追加しない。アップグレードインストール時には以前の情報を引き継ぐ。)	この項目を選択した場合、アップグレードインストール前の情報を引き継ぎます。 後に手動で例外リストにプログラム、またはポートを追加する場合は、「付録 A ネットワークとプロトコル」を参照してください。
例外リストにプログラムまたはポートを追加し、通信ブロックを解除する。	この項目を選択した場合、例外リストにプログラム、またはポートを追加し、通信ブロックを解除します。 既定で選択されています。
例外リストにプログラムまたはポートを追加するが、通信ブロックを解除しない。	この項目を選択した場合、例外リストにプログラム、またはポートを追加しますが、通信ブロックは解除しません。 後に手動で通信ブロックを解除する必要があります。

3.7.4. DPMの設定

「DPM クライアントの設定」画面が表示されます。

DPM クライアントをインストールするにあたって必要な情報を設定してください。

設定完了後、[次へ(N)>] をクリックします

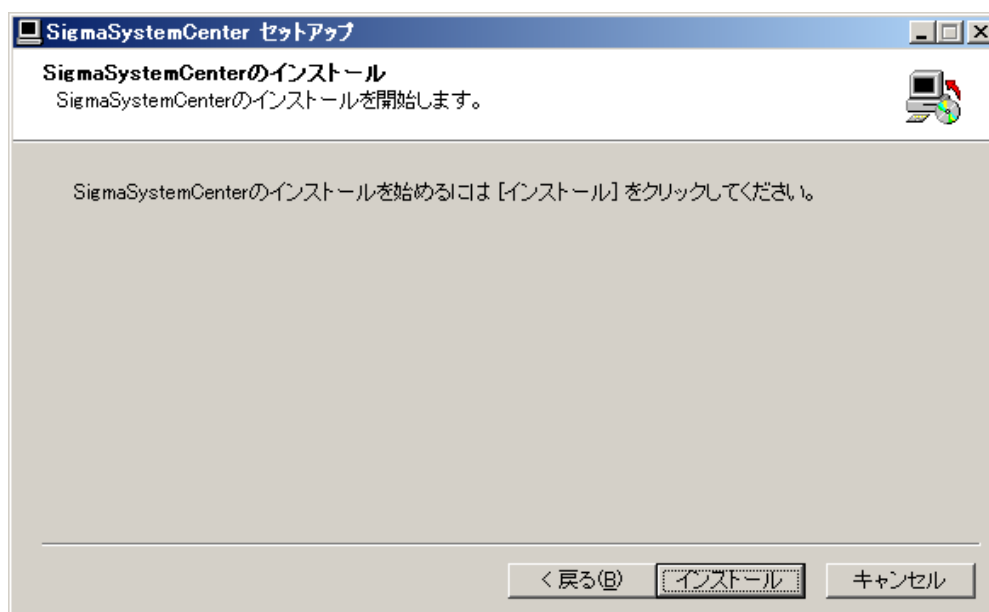


管理サーバ IP アドレス	DPMの管理サーバのIPアドレスを指定します。IPアドレスを省略した場合、インストール完了後、自動的に管理サーバを検索します。検索には時間がかかる場合があります。
----------------------	-----------------------------------------------------------------------------------

3.7.5. アップグレードインストールの開始

選択したコンポーネントのアップグレードインストール実行前に、確認のダイアログボックスが表示されます。

[インストール] をクリックするとインストールが開始します。



3.7.6. アップグレードインストールの完了

選択したすべてのコンポーネントのインストール後、「完了」画面が表示されます。

以上で、ウィザードを使用した管理対象マシンコンポーネントのアップグレードインストールは完了です。

3.8. Windows Server 2008 Server Core 管理対象マシンへアップグレードインストールする

OSがWindows Server 2008 Server Coreの管理対象マシンへは、DPMクライアントをアップグレードインストールする必要があります。

SigmaSystemCenterのインストーラは、Windows Server 2008 Server Core 管理対象マシンに対応していないため、「DeploymentManager インストレーションガイド」の「3.3. DPM クライアントをアップグレードインストールする」を参照し、インストールしてください。

3.9. Linux 管理対象マシンへアップグレードインストールする

OS が Linux の管理対象マシンへは、DPM クライアントをアップグレードインストールする必要があります。

SigmaSystemCenter のインストーラは Linux 管理対象マシンに対応していないため、DPM クライアントを Linux 管理対象マシンにアップグレードインストールする場合、SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R から個別にインストールする必要があります。

Linux 管理対象マシンへの DPM クライアントのアップグレード手順はインストール手順と同じですので、「2.10 Linux 管理対象マシンへインストールする」を参照し、インストールしてください。

3.10. DPM クライアントを自動でアップグレードする

OS が Windows、もしくは Linux の管理対象マシンで、DPM Ver. 4.0 以降がインストールされている場合、DPM の機能で自動的にアップグレードすることができます。

以下の手順に従って、自動アップグレードを行ってください。

注: DPM クライアントの自動アップグレードの注意事項については、「DeploymentManager インストールガイド」の「3.3.1 DPM クライアントを自動アップグレードインストールする」を参照してください。

1. DPM の Web コンソールを起動します。
2. Web コンソール上で、タイトルバーの [管理] をクリックして、[管理] ビューに切り替えます。
3. ツリービュー上で、[DPM サーバ] をクリックします。または、メインウィンドウに[管理機能一覧] グループボックスが表示されますので、[DPM サーバ] をクリックします。
4. [基本情報] グループボックスが表示されますので、[設定] メニューの [詳細設定] をクリックします。
5. [全般] タブを選択し、[DPM クライアントを自動アップグレードする] チェックボックスをオンにします。
6. 管理対象マシンを再起動、または「DeploymentManager Remote Update Service Client」サービスを再起動します。DPM クライアントの自動アップグレードが実行されます。
7. Web コンソール上で、タイトルバーの [運用] をクリックして、[運用] ビューに切り替えます。
8. [リソース] ツリーから [イメージ] をクリックし、[イメージ一覧] グループボックスを表示します。[イメージ一覧] グループボックスから AgentUpgrade (Windows の場合)、または LinuxAgentUpgrade (Linux の場合) の「適用状況」の [>>] をクリックすると、パッケージ適用状況 (マシン一覧) が表示され、アップグレードが完了したことを確認できます。

以上で DPM クライアントの自動アップグレードは完了です。

4. アンインストールを実行する

本章では、SigmaSystemCenter のアンインストール手順について説明します。管理サーバコンポーネントを、個別でアンインストールする場合と一括でアンインストールする場合について説明します。また、管理対象マシンコンポーネントをアンインストールする場合について説明します。

本章で説明する項目は以下の通りです。

- 4.1 管理サーバコンポーネントのアンインストール 106
- 4.2 アンインストールを始める前に 107
- 4.3 管理サーバコンポーネントを個別にアンインストールする 108
- 4.4 管理サーバコンポーネントを一括でアンインストールする 116
- 4.5 管理対象マシンコンポーネントのアンインストール 119

4.1. 管理サーバコンポーネントのアンインストール

次節以降では、管理サーバコンポーネントをアンインストールする手順を説明します。

管理サーバコンポーネントを選択し、個別にアンインストールする場合は、「4.3 管理サーバコンポーネントを個別にアンインストールする」を参照してください。

すべての管理サーバコンポーネントを一括でアンインストールする場合は、「4.4 管理サーバコンポーネントを一括でアンインストールする」を参照してください。

4.2. アンインストールを始める前に

SigmaSystemCenter 3.1 のアンインストールを始める前に本節をよく読んでください。

4.2.1. アンインストール実行前の注意

- ◆ SigmaSystemCenter のアンインストールを始める前に、必ず使用しているアプリケーション、および Web ブラウザをすべて終了してください。
- ◆ アンインストールすると、SystemProvisioning インストールフォルダ配下の opt フォルダ、および conf フォルダ内の設定ファイルは削除されます。
アンインストール前に必要に応じてバックアップしてください。

注: SystemProvisioning インストールフォルダの既定値は以下の通りです。

x86 OS では (%ProgramFiles%¥NEC¥PVM¥)

x64 OS では (%ProgramFiles(x86)%¥NEC¥PVM¥)

4.2.2. DPMサーバをアンインストールする際の注意

DPM サーバを「プログラムと機能」画面からアンインストールしないでください。正常にアンインストールできない場合があります。

なお、SigmaSystemCenter のインストーラを実行してインストールを行う場合には、DPM サーバは「プログラムと機能」画面には表示されません。

「DeploymentManager セットアップ」(インストール DVD-R:¥DPM¥Launch.exe) から、DPM サーバを個別にインストールする場合にのみ表示されます。

4.2.3. Windows Vista以降、またはWindows Server 2008 以降から アンインストールする際の注意

Windows Vista 以降、または Windows Server 2008 以降の環境でインストーラを実行すると、「ユーザー アカウント制御」画面が表示される場合があります。その場合、[許可] をクリックして、続行してください。

4.3. 管理サーバコンポーネントを個別にアンインストールする

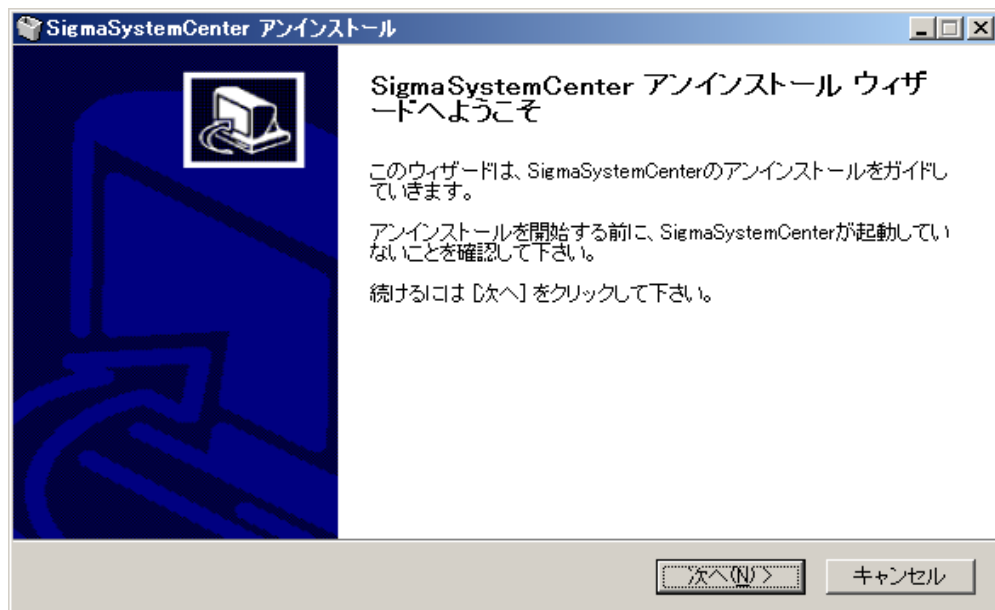
管理サーバから、個別に管理サーバコンポーネントをアンインストールする手順を説明します。

コンポーネントを個別にアンインストールする場合、本節を参照し、不要なコンポーネントをアンインストールしてください。

4.3.1. アンインストールを実行するには

注: アンインストールの開始前に、実行中のアプリケーションをすべて終了させてください。

1. [スタート] メニューから [コントロールパネル(C)] - [プログラムと機能] をクリックし、「プログラムと機能」画面を開きます。
2. [SigmaSystemCenter] を選択し、[アンインストール] をクリックします。
3. 「SigmaSystemCenter アンインストールウィザード」が起動し、アンインストールを開始するダイアログが表示されます。



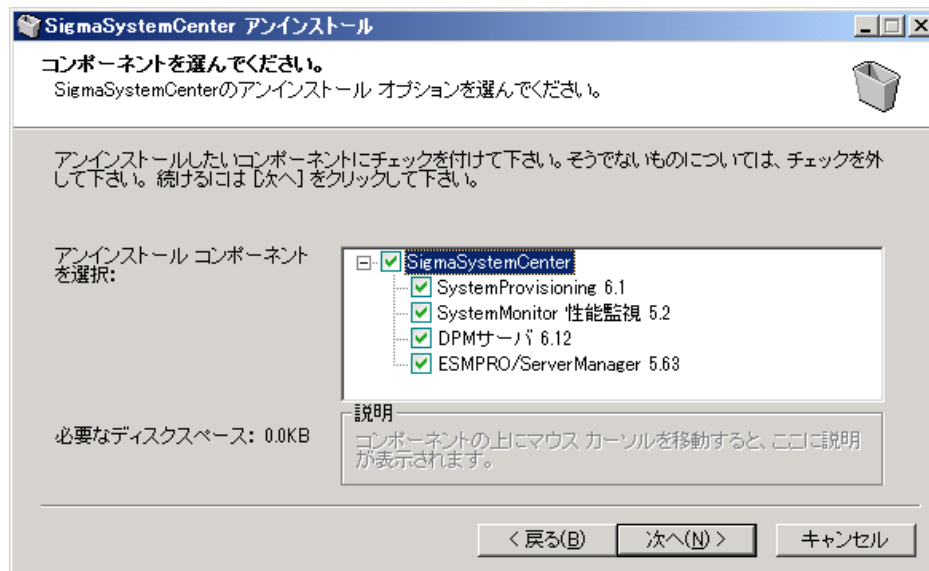
ウィザードに従ってアンインストールを実行してください。

「4.3.2 コンポーネントの選択」～「4.3.6 アンインストールの完了」では、各ウィザード画面の流れに沿って説明します。

4.3.2. コンポーネントの選択

「コンポーネントの選択」画面が表示されます。

アンインストールするコンポーネントを選択し、[次へ(N)>] をクリックします。



SigmaSystemCenter	この項目を選択した場合、以下の選択可能なすべてのコンポーネントが自動的に選択されます。
SystemProvisioning	SystemProvisioningをアンインストールします。
SystemMonitor 性能監視	SystemMonitor性能監視をアンインストールします。
DPM サーバ	DPMサーバをアンインストールします。
ESMPRO/ServerManager	ESMPRO/ServerManagerをアンインストールします。

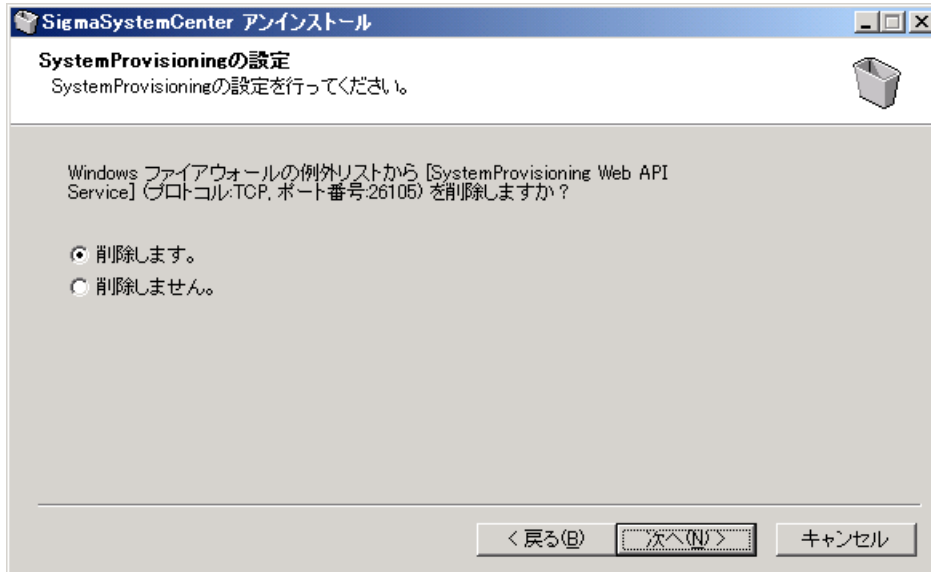
4.3.3. SystemProvisioningの設定

「4.3.2 コンポーネントの選択」で SystemProvisioning を選択していた場合、「SystemProvisioning の設定」画面が表示されます。

SystemProvisioning をアンインストールするにあたって必要な情報を設定してください。

設定完了後、[次へ(N)>] をクリックします。

4 アンインストールを実行する



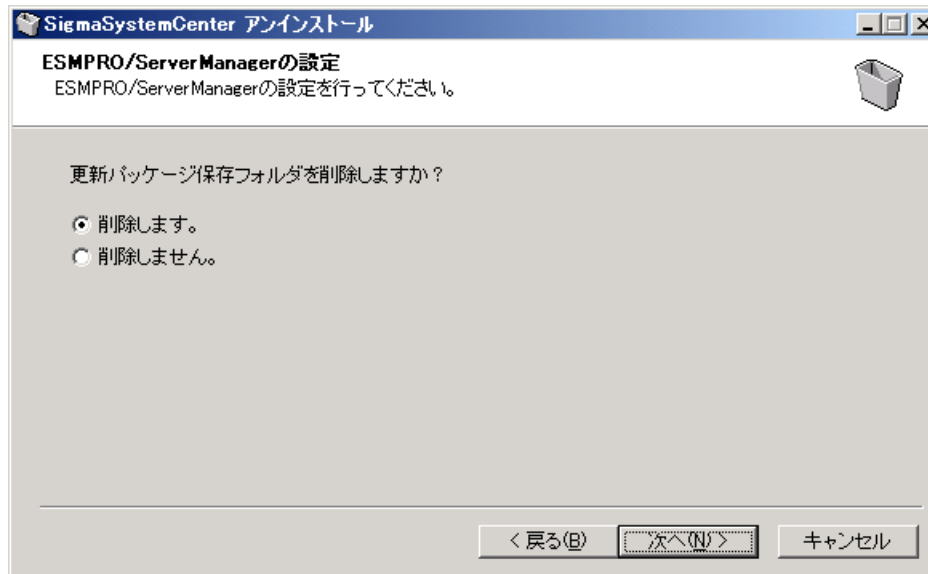
Windows ファイアウォールの例外リストから [SystemProvisioning Web API Service] (プロトコル:TCP, ポート番号:26105) を削除しますか？	Windowsファイアウォールの例外リストから [SystemProvisioning Web API Service] (プロトコル:TCP, ポート番号:26105) の削除を選択します。
削除します。	Windowsファイアウォールの例外リストから [SystemProvisioning Web API Service] を削除します。既定で選択されています。
削除しません。	Windowsファイアウォールの例外リストから [SystemProvisioning Web API Service] を削除しません。

4.3.4. ESMPRO/ServerManagerの設定

「4.3.2 コンポーネントの選択」で ESMPRO/ServerManager を選択していた場合、「ESMPRO/ServerManager の設定」画面が表示されます。

ESMPRO/ServerManager をアンインストールするにあたって必要な情報を設定してください。

設定完了後、「次へ(N)>」をクリックします。

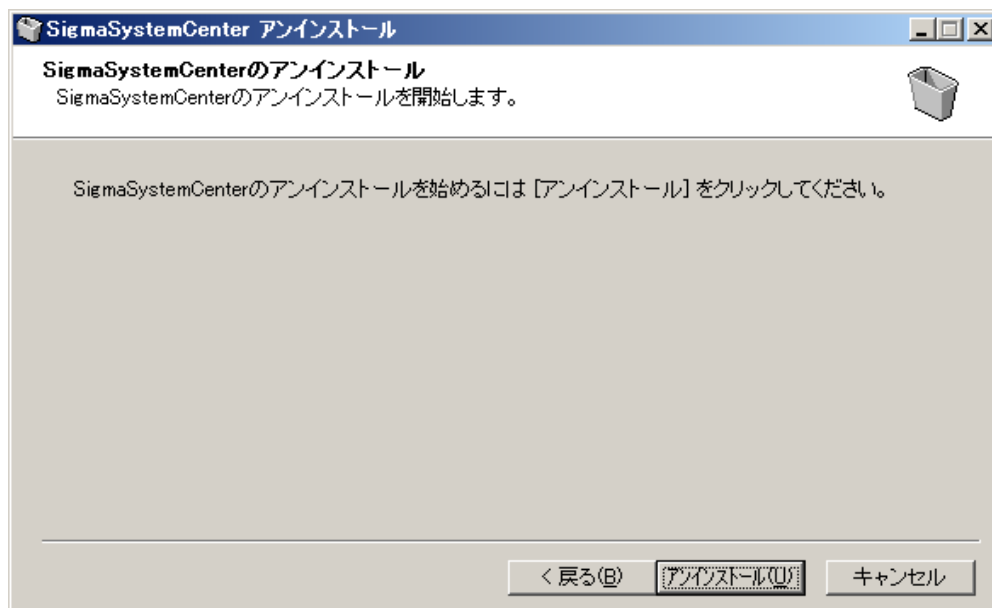


更新パッケージ保存フォルダを削除しますか？	更新パッケージ保存フォルダの削除を選択します。
削除します。	更新パッケージ保存フォルダを削除します。既定で選択されています。
削除しません。	更新パッケージ保存フォルダを削除しません。

4.3.5. アンインストールの開始

選択したコンポーネントのアンインストール実行前に、確認のダイアログボックスが表示されます。

[アンインストール(U)] をクリックすると、アンインストールが開始します。



- ◆ ESMPRO/ServerManager を選択していた場合

ESMPRO/ServerManager のアンインストール完了後、環境によっては「このプログラムは正しくアンインストールされなかった可能性があります」とのメッセージが表示される場合があります。アンインストールは正常に完了していますので、[このプログラムは正しくアンインストールされました]、または [キャンセル] をクリックして終了してください。

4.3.6. アンインストールの完了

選択したすべてのコンポーネントのアンインストール後、「完了」画面が表示されます。システムの再起動を促すダイアログボックスが表示された場合は、システムを再起動してください。

以上で管理サーバコンポーネントの個別のアンインストールは完了です。

アンインストール完了後に別途手順が必要な場合があります。SigmaSystemCenter のアンインストールが完了した後、環境、およびアンインストールしたコンポーネントに応じて次項以降の手順を行ってください。

4.3.7. Java 2 Runtime Environmentをアンインストールするには

SigmaSystemCenter のインストーラは、Java 2 Runtime Environment のアンインストールをサポートしておりません。Java 2 Runtime Environment は、「プログラムと機能」画面からアンインストールしてください。

4.3.8. ESMPRO/ServerManagerをアンインストールした場合の注意

ESMPRO/ServerManager をアンインストールした場合に以下の注意事項があります。

ESMPRO/ServerManager のアンインストール後、Windows ファイアウォールの [例外] タブに ESMPRO/ServerManager の例外登録が残ることがあります。

必要に応じて手動で削除してください。

- ◆ ESMPRO 関連製品のアプリケーションがインストールされている環境

例外登録:

[Alert Manager Socket(R) Service]

[ESM Base Service]

ESMPRO 関連製品:

ESMPRO/ServerAgent

WebSAM ClientManager

WebSAM Netvisor

WebSAM NetvisorPro

WebSAM UXServerManager

WebSAM SystemManager

WebSAM AlertManager
MCOperations

◆ プログラムと機能から ESMPRO/ServerManager をアンインストールした場合

例外登録:

[Alert Manager Socket(R) Service]
[ESM Base Service]
[ESMPRO/SM Common Component]
[ESMPRO/SM Web Container]
[ESMPRO/SM Event Manager]

[例外の削除手順]

1. [スタート] メニューから [コントロールパネル(C)] - [Windows ファイアウォール] を選択します。
2. 「Windows ファイアウォール」画面が表示されます。[例外] タブを選択し、[プログラムおよびサービス(P):] グループボックスの [Alert Manager Socket(R) Service]、[ESM Base Service]、[ESMPRO/SM Common Component]、[ESMPRO/SM Web Container]、[ESMPRO/SM Event Manager] を選択します。
3. [削除(D)] をクリックします。
4. 確認ダイアログボックスが表示されます。[はい(Y)] をクリックします。
5. [OK] をクリックし、「Windows ファイアウォール」画面を閉じます。

4.3.9. SystemProvisioning、およびESMPRO/ServerManagerをアンインストールした場合の注意

SystemProvisioning、および ESMPRO/ServerManager をアンインストールした場合に、以下の注意事項があります。

SystemProvisioning、および ESMPRO/ServerManager のアンインストール後、Windows ファイアウォールの [例外] タブに、以下の例外登録が残る場合があります。

必要に応じて削除してください。

例外登録: [SNMP Trap Service]

注: [SNMP Trap Service] は、SigmaSystemCenter インストーラによって登録される例外です。[SNMP Trap] とは異なりますので、注意してください。

[例外の削除手順]

1. [スタート] メニューから [コントロールパネル(C)] - [Windows ファイアウォール] を選択します。
2. 「Windows ファイアウォール」画面が表示されます。[例外] タブを選択し、[プログラムおよびサービス(P)] グループボックスの [SNMP Trap Service] を選択します。

3. [削除 (D)] をクリックします。
4. 確認ダイアログボックスが表示されます。[はい(Y)] をクリックします。
5. [OK] をクリックし、「Windows ファイアウォール」画面を閉じます。

4.3.10. SQL Server 2012 Expressをアンインストールするには

SigmaSystemCenter のインストーラは、SQL Server 2012 Express のアンインストールをサポートしていません。アンインストールするには、以下の手順に従ってください。

1. [スタート] メニューから [コントロールパネル(C)] - [プログラムと機能] を選択します。
2. 「プログラムと機能」画面が表示されます。[Microsoft SQL Server 2012] を選択し、[アンインストールと変更] をクリックします。
3. 「SQL Server 2012」画面が表示されます。[削除] をクリックします。
4. 「セットアップ サポート ルール」の状態確認が実行されます。[OK] をクリックします。
5. 「インスタンスの選択」画面が表示されます。[機能を削除するインスタンス] プルダウンボックスから、SigmaSystemCenter のインストーラからインストールしたインスタンスをオンにします。

注: 既定でインストールされていると、"SSCCMDB" と表示されます。

6. [次へ] をクリックします。
7. 「機能の選択」画面が表示されます。手順 5 で選択したインスタンスの [データベース エンジン サービス] チェックボックスをオンにします。[次へ] をクリックします。
以降はウィザードに従ってアンインストールを実施してください。
8. アンインストールが正常に完了すると、「プログラムと機能」画面に戻ります。

また、他のアプリケーションで Microsoft SQL Server 2012 Express を使用していない場合には、[プログラムと機能] から以下のコンポーネントも削除してください。

注:

- ・ 削除したコンポーネントに関連するコンポーネントが自動で削除されている場合がありますので、コンポーネントを削除した後は、**F5** キーを押して最新の情報に更新してください。
 - ・ Microsoft SQL Server VSS Writer については、他のアプリケーションから使用されていない場合、必ず削除してください。削除しないと、次回サーバ起動時にエラーが表示されます。
-

- ◆ Microsoft SQL Server 2008 セットアップ サポート ファイル
- ◆ Microsoft SQL Server 2012 Native Client
- ◆ Microsoft SQL Server 2012 Transact-SQL ScriptDom
- ◆ Microsoft SQL Server 2012 セットアップ (日本語版)
- ◆ Microsoft VSS Writer for SQL Server 2012

- ◆ SQL Server 2012 用 SQL Server Browser

以上で SQL Server 2012 Express のアンインストールは完了です。

4.4. 管理サーバコンポーネントを一括でアンインストールする

管理サーバから管理サーバコンポーネントを一括でアンインストールする手順を説明します。

SigmaSystemCenter をインストールした際に、システムのハードディスクドライブ上の所定のフォルダにアンインストーラが登録されています。オプションを指定してそのアンインストーラを実行すると、ウィザードなしで各コンポーネントをアンインストールします。

コンポーネントを一括でアンインストールする場合、本節を参照し、アンインストールしてください。

4.4.1. アンインストールを実行するには

注: アンインストールの開始前に、実行中のアプリケーションをすべて終了させてください。

1. コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行し、アンインストールを開始します。

アンインストーラ格納フォルダ¥ManagerUninstall.exe /S

注: コマンドプロンプトで、「ManagerUninstall.exe /S」を実行すると、すぐにプロンプトが表示され、アンインストールが終了したように見えます。アンインストール処理が終了するまでプロンプトが表示されないようにすることはできません。

オプション	説明
/S	一括でアンインストールを行います。

オプション "/S" が指定されていない場合、アンインストールのウィザードが開始されません。

注: アンインストーラ格納フォルダ (固定値) は以下の通りです。

- x86 OS では (%ProgramFiles%¥NEC¥SSC¥31¥ManagerUninstall.exe)
 - x64 OS では (%ProgramFiles(x86)%¥NEC¥SSC¥31¥ManagerUninstall.exe)
-

2. アンインストールが開始されます。

コンポーネントのアンインストール中に画面が表示される場合がありますが、操作は不要で、アンインストール処理は継続して正常に動作します。

アンインストールは完了まで数分かかります。

インストーラは下記の表の終了コードで終了します。インストーラは、インストーラのログと終了コードを以下のファイルに記録します。

<Windows Server 2008 以降の場合>

%USERPROFILE%\AppData\Local\SSC\SetupProvisioning.log

注: 以下の方法でログを参照することができます。

1. コマンドプロンプトでカレントディレクトリを移動します。

```
cd %USERPROFILE%\AppData\Local\SSC
```

2. メモ帳でログファイルを開きます。

```
notepad SetupProvisioning.log
```

	終了コード		アンインストール 対象コンポーネント	順番
	再起動不要	再起動必要		
成功	0	64	—	—
エラー ※1	32	96	—	—
エラー ※2	8	72	SystemProvisioning	1
エラー ※2	7	71	SystemMonitor性能監視	2
エラー ※2	6	70	DPMサーバ	3

※1 PVMサービスの停止に失敗した場合

※2 対象コンポーネントのアンインストールに失敗した場合

以上で管理サーバコンポーネントの一括アンインストールは完了です。

終了コードが「再起動必要」のコードである場合は、システムを再起動してください。

アンインストール完了後に別途手順が必要な場合があります。SigmaSystemCenter のアンインストールが完了した後、環境、およびアンインストールしたコンポーネントに応じて次項以降の手順を行ってください。

4.4.2. ESMPRO/ServerManagerをアンインストールするには

ESMPRO/ServerManager は、一括でアンインストールされません。アンインストールするには、プログラムと機能から手動でアンインストールしてください。

ESMPRO/ServerManager をアンインストールした場合の注意事項について、「4.3.8 ESMPRO/ServerManager をアンインストールした場合の注意」を参照してください。

4.4.3. Java 2 Runtime Environmentをアンインストールするには

SigmaSystemCenter のインストーラは、Java 2 Runtime Environment のアンインストールをサポートしていません。Java 2 Runtime Environment は、「プログラムと機能」画面からアンインストールしてください。

4.4.4. SystemProvisioning、およびESMPRO/ServerManagerをアンインストールした場合の注意

SystemProvisioning、および ESMPRO/ServerManager をアンインストールした場合の注意事項について、「4.3.9 SystemProvisioning、および ESMPRO/ServerManager をアンインストールした場合の注意」を参照してください。

4.4.5. SQL Server 2012 Expressをアンインストールするには

SigmaSystemCenter のインストーラは、SQL Server 2012 Express のアンインストールをサポートしていません。SQL Server 2012 Express をアンインストールするには、「4.3.10 SQL Server 2012 Expressをアンインストールするには」に従ってアンインストールしてください。

4.5. 管理対象マシンコンポーネントのアンインストール

次節以降では、管理対象マシンコンポーネント (DPM クライアント) をアンインストールする手順を説明します。

管理対象マシンの OS によって、アンインストール方法が異なります。

ご利用の環境に応じてアンインストールしてください。

注: アンインストールの開始前に、実行中のアプリケーションをすべて終了させてください。

◆ Windows (x86 / x64) 管理対象マシンの場合

注: Windows Server 2008 (Server Core インストール) / Windows Server 2012 (Server Core インストール) の場合は、コマンドラインから、以下ファイルを実行してください。ファイル実行後は、以下に記載している手順 3 を実行してください。

- IA32 アーキテクチャマシンの場合
"%SystemDrive%\Program Files\InstallShield Installation Information\{6F68AC00-5FFD-42DE-B52E-D690D3DD4278}\setup.exe"
-runfromtemp -I0x0011uninstall -removeonly
 - EM64T アーキテクチャマシンの場合
"%SystemDrive%\Program Files (x86)\InstallShield Installation Information\{6F68AC00-5FFD-42DE-B52E-D690D3DD4278}\setup.exe"
-runfromtemp -I0x0011uninstall -removeonly
-

「プログラムと機能」画面から DPM クライアントをアンインストールします。

1. [スタート] メニューから [コントロールパネル(C)] - [プログラムと機能] をクリックし、「プログラムと機能」画面を開きます。
2. [DeploymentManager] を選択し、[アンインストール] をクリックします。
3. 「セットアップタイプ」画面が表示されますので、[アンインストール] を選択し、[次へ] をクリックします。
4. 「ファイル削除の確認」画面が表示されますので、[OK] をクリックします。
5. 「セットアップステータス」画面が表示され、アンインストールが開始されます。自動的に処理が進み、「メンテナンスの完了」画面が表示されますので、[完了] をクリックしてください。

◆ Linux 管理対象マシンの場合

注: Red Hat Enterprise Linux AS4 / ES4、SUSE Linux Enterprise 9 の場合は、"/mnt" 部を "/media" に読み替えて作業を進めてください。

SUSE Linux Enterprise 10 の場合は、"/mnt/dvd" 部を "/media/DVD-R のボリュームラベル" に読み替えて作業を進めてください。

4 アンインストールを実行する

1. root アカウントでシステムにログインします。
2. SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R を DVD/CD-RW ドライブに挿入します。
3. 以下のコマンドを実行し、DVD-R をマウントします。この例では、マウントポイントを "/mnt/dvd" と仮定しています。

```
# mount /mnt/dvd
```

4. ディレクトリを変更するために、以下のコマンドを実行します。

```
# cd /mnt/dvd/DPM/Linux/ia32/bin/agent
```

5. depuninst.sh を実行します。

```
# ./depuninst.sh
```

注: 実行する環境によっては、インストール DVD-R 上の depuninst.sh を実行する権限がないため、実行できない場合があります。

このような場合は、インストール DVD-R の Linux ディレクトリ配下にある DPM クライアントのモジュールをハードディスクの適当なディレクトリ配下にコピーし、以下の例のように chmod コマンドですべてのファイルに実行権限を与えてから depuninst.sh を起動してください。

例)

```
# cd /mnt/コピー先ディレクトリ/agent  
# chmod 755
```

以上で DPM クライアントのアンインストールは完了です。

5. トラブルシューティング

本章では、SigmaSystemCenter のインストール、アップグレードインストール、およびアンインストール中に問題が起こった際の対処方法について説明します。

本章で説明する項目は以下の通りです。

- 5.1 インストール / アップグレード / アンインストール時のエラー 122

5.1. インストール / アップグレード / アンインストール時のエラー

5.1.1. アップグレードインストール時に構成情報データベースのコンバートに失敗する

[現象]

管理サーバへの SystemProvisioning のアップグレードインストール時に、以下のメッセージが表示されてインストールが中断する。

[メッセージ 1]

コンバート前の構成情報データベースへの接続に失敗しました。
コンバート前の構成情報データベースのサービスが起動していない可能性があります。
「MSSQL\$PVMINF_INSTANCE」サービスを確認してください。

[原因 1]

コンバート前の構成情報データベースのサービスが起動していないために、コンバート前の構成情報データベースへ接続できない場合に表示されます。

[メッセージ 2]

新規の構成情報データベースへの接続に失敗しました。
新規の構成情報データベースのサービスが起動していない可能性があります。
「SQL Server (SSCCMDB)」サービス(既定値)を確認してください。

[原因 2]

新規の構成情報データベースのサービスが起動していないために、新規の構成情報データベースへ接続できない場合に表示されます。

[メッセージ 3]

データベースのコンバート中にエラーが発生しました。
コンバート前のバックアップデータをリストアしてください。

もしくは

データベースのコンバート中にエラーが発生しました。

[原因 3]

コンバート前の構成情報データベースから新規の構成情報データベースへ構成を変換する処理で、内部処理エラーが発生した場合にこのメッセージが表示されます。

[メッセージ 4]

データベースのコンバート中にタイムアウトが発生しました。
コンバート前のバックアップデータをリストアしてください。

[原因 4]

コンバート前の構成情報データベースから新規の構成情報データベースへ構成を変換する処理で、内部処理のタイムアウトが発生した場合にこのメッセージが表示されます。

[対処方法]

上記のメッセージが表示された場合は、お問い合わせください。

5.1.2. 管理サーバ for DPM (HP-UX) が連携設定された状態でのアップグレード時のエラー

[現象]

管理サーバ for DPM (HP-UX) が連携設定されている場合に SystemProvisioning のアップグレードインストールを行うと、以下のエラーメッセージが表示されてアップグレードインストールが中断する。

[メッセージ]

管理サーバ for DPM (HP-UX) がサブシステムに登録されています。
サブシステムから管理サーバ for DPM (HP-UX) を削除した後、
アップグレードインストールを実行してください。

[原因]

SigmaSystemCenter による管理サーバ for DPM (HP-UX) 機能サポート終了により、管理サーバ for DPM (HP-UX) が連携設定されている状態ではアップグレードできません。

[対処方法]

- ◆ SigmaSystemCenter 1.3 以前からのアップグレードの場合
SystemProvisioning 運用管理ツールの [環境設定] の [DPM 情報] タブから [DPM for HP-UX] を選択し、削除した後、再度アップグレードインストールを実行してください。
- ◆ SigmaSystemCenter 2.0、および 2.1 からのアップグレードの場合
Web コンソールの [管理] ビューのサブシステムの詳細情報から [管理サーバ for DPM (HP-UX)] を選択し、削除した後、再度アップグレードインストールを実行してください。

5.1.3. ESMPRO/ServerManagerインストール / アンインストール時のメッセージについて

[現象]

使用する OS によって、ESMPRO/ServerManager のインストール、またはアンインストールを実行すると、エクスプローラが動作を停止したとのメッセージが表示される場合があります。

[メッセージ]

エクスプローラは動作を停止しました

[原因]

インストールソフトウェアとの互換問題により発生します。

[対処方法]

対処は必要ありません。インストール、またはアンインストールは正常に完了しており、システムに影響はありません。

5.1.4. ESMPRO/ServerManagerアンインストール後のメッセージについて

[現象]

ESMPRO/ServerManager のアンインストール後、初回再起動時に以下のエラーメッセージが表示される場合があります。

[メッセージ]

'setup.exe' が見つかりません。名前を正しく入力したかどうかを確認してから、やり直してください。ファイルを検索するには、[スタート] をクリックしてから、[検索] をクリックしてください。

[原因]

InstallShield 2008 の不具合により発生します。

[対処方法]

対処は必要ありません。アンインストールは正常に完了しており、システムに影響はありません。

5.1.5. SystemProvisioningのブラウザ画面表示が不正となる

[現象]

SigmaSystemCenter をアップグレード後、ブラウザより SystemProvisioning にログインした場合、[設定] メニューが表示されないなど、一部の画面にて表示が不正となる場合があります。

[原因]

SigmaSystemCenter 2.0 以降を利用し、ブラウザにて画面表示を行っていた場合、アップグレード後、ブラウザのキャッシュに残っている情報と管理サーバにて更新された画面情報が不一致となり、表示が不正となる場合があります。

[対処方法]

ブラウザを起動する端末のブラウザキャッシュのクリアを行ってください。

キャッシュクリアの方法については、ご利用のブラウザごとに異なります。ご利用のブラウザに応じた方法を別途確認し、実行してください。

以下に、主なブラウザについて記載します。

◆ Internet Explorer 8、または Internet Explorer 9 をご利用の場合

1. ブラウザの [ツール] メニューから [インターネットオプション] をクリックします。
2. 「インターネット オプション」ダイアログボックスの [全般] タブを選択し、[閲覧の履歴] グループボックスの [削除] をクリックします。
3. 「閲覧履歴の削除」画面が表示されます。[インターネット一時ファイル] チェックボックスをオンにし、[削除] をクリックしてください。

◆ Firefox 4.0 をご利用の場合

1. ブラウザの [ツール] メニューから [最近の履歴を消去] をクリックします。
2. 「最近の履歴を消去」ダイアログボックスが表示されます。[消去する履歴の期間] に [すべての履歴] を選択します。
また、[消去する項目] グループボックスで [キャッシュ]、および [Cookie] チェックボックスが選択されていることを確認してください。
3. [今すぐ消去] をクリックします。

5.1.6. 管理サーバにインストール後、Webコンソールが起動できない

[現象]

管理サーバに SigmaSystemCenter をインストール後、以下のメッセージが表示されて、Web コンソールが起動できない場合がある。

[メッセージ]

Internet Explorer ではこのページは表示できません。

[原因]

IIS (インターネットインフォメーションサービス) の「Default Web Site」のポートに "80" (既定値) 以外が設定されている場合に発生します。

[対処方法]

インターネットインフォメーションサービス (IIS) マネージャーで「Default Web Site」のポートを確認してください。"80" 以外が設定されている場合は、Web コンソール起動時の URL にそのポートを指定してください。

記載例)

`http://localhost:8080/Provisioning/Default.aspx`

確認手順は以下の通りです。

1. [スタート] メニューから [管理ツール] - [インターネットインフォメーションサービス (IIS) マネージャー] を選択し、インターネットインフォメーションサービス (IIS) マネージャーを起動します。
2. 左側のツリービューで [(既定値: マシン名)] ノードから、[サイト] - [Default Web Site] を選択します。
3. 右側の [操作] - [サイトの編集] から [バインド...] をクリックします。
4. 「サイト バインド」ダイアログボックスが表示されます。このダイアログボックスからポート番号を確認してください。

付録

- 付録 A ネットワークとプロトコル 129
- 付録 B ターミナルサービスでの操作 137
- 付録 C 改版履歴 139
- 付録 D ライセンス情報 141

付録 A ネットワークとプロトコル

SigmaSystemCenter のコンポーネントは既定で以下のネットワークポートを使用するよう設定してあります。管理サーバや管理対象マシンを含むシステム環境で Windows Firewall などのファイアウォール機能が有効な場合、以下のポートを開いてください。

SigmaSystemCenter インストーラの「Windows ファイアウォールの指定」画面の指定で、Windows ファイアウォールの例外リストにプログラム、またはポートを追加することができます。

- ◆ 「自動」: インストーラにより登録されるプログラム、またはポート
- ◆ 「手動」: インストーラでは登録されないプログラム、またはポート

関連情報: 接続対象、方向、機能概要を含む詳細情報については、「SigmaSystemCenter リファレンスガイド データ編」の「付録 A ネットワークポートとプロトコル一覧」を参照してください。

注: x64 OS の場合、"¥Program Files¥NEC" を "¥Program Files (x86)¥NEC" と読み替えてください。

管理サーバ

	項目	プロトコル	ポート番号	プログラム名	自動 / 手動
DeploymentManager ※1	DPMサーバ (Windows)	UDP	69	¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager¥pxemtftp.exe	自動
		UDP	4011	¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager¥pxesvc.exe	自動
		UDP	67	¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager¥pxesvc.exe	自動
		TCP	26504	¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager¥depssvc.exe	自動
		TCP	26503, 26501, 26502	¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager¥bkr essvc.exe	自動

	項目	プロトコル	ポート番号	プログラム名	自動 / 手動
		TCP	26508	¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager¥ftsv c.exe	自動
		TCP	26506, 26507	¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager¥rupdssvc.exe	自動
		TCP	26505 ※2	¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager¥pxe svc.exe	自動
	Webサービス (IIS) との内部処理用	TCP	26500 ※3	¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager¥apiserv.exe	自動
	Webコンソールとの接続	HTTP	80	¥Windows¥system32¥svchost.exe (OSの環境によってパスは異なります。)	手動
	DPMコマンドラインとの接続	HTTP	80	¥Windows¥system32¥svchost.exe (OSの環境によってパスは異なります。)	手動
	イメージビルダ (リモートコンソール) との接続	TCP	26508	¥Program Files¥NEC¥DeploymentManager¥ftsv c.exe	自動
SystemProvisioning	SystemProvisioning	TCP	26102	¥Program Files¥NEC¥PVM¥bin¥PVMServiceProc.exe	自動
	SystemProvisioning	TCP	26150 ※4	¥Program Files¥NEC¥PVM¥bin¥PVMServiceProc.exe	手動
	SystemProvisioning Web API Service	TCP	26105	¥Program Files¥NEC¥PVM¥bin¥PVMServiceProc.exe	自動
	ICMP Echo Reply	ICMP	-	¥Program Files¥NEC¥PVM¥bin¥PVMServiceProc.exe	手動
	SNMP Trap Service	UDP	162	¥WINDOWS¥System32¥snmptrap.exe	自動 ※5

	項目	プロトコル	ポート番号	プログラム名	自動 / 手動
SystemMonitor性能監視	SystemMonitor性能監視	TCP	26200	¥Program Files¥NEC¥SystemMonitorPerformance¥bin¥rm_pfmsevice.exe	自動
ESMPRO/ServerManager	ESMPRO/ServerManager	UDP	162 ※6	¥WINDOWS¥System32¥snmptrap.exe	自動 ※5
		UDP	162 ※6	¥Program Files¥NEC¥SMM¥NVBASE¥bin¥nvbase.exe	自動
		TCP	8806 ※7		自動
		UDP	7893 ※8		自動
		TCP	8807 ※9	¥Program Files¥NEC¥SMM¥NVBASE¥bin¥esm asvnt.exe	—
		TCP	31134 ※10	¥Program Files¥NEC¥SMM¥NVBASE¥bin¥amv sckr.exe	自動
		UDP	47115	¥Program Files¥NEC¥SMM¥ESMWEB¥esmcm n¥jsl.exe	自動
		UDP	47117 ※11		
		UDP	47170~47179 ※12		
		UDP	47180~47189 ※12		
		TCP	1099		
		UDP	51099~51107 ※12		
		TCP	47140~47149 ※12	¥WINDOWS¥system32¥DianaScopeModemAgent.exe	自動
TCP	6736 ※13	¥Program Files¥ESMPRO¥ESMWEB¥jsem¥jsl.exe	自動		

- ※1 DPM 6.1より前のバージョンとDPM 6.1の新規インストールでは、使用するポート番号が変更されています。DPM 6.1より前のバージョンからアップグレードインストールした場合は、従来使用していたポート番号をそのまま引き継ぐため、DPM 6.1新規インストール時のポート番号（上記記載の表）とは異なります。旧バージョンのポート番号は、該当するバージョンのユーザーズガイドを参照してください。
- ※2 「DHCPサーバを使用しない」運用の場合のみ、ポートを開いてください。
- ※3 このポート（TCP:26500）は、内部処理（DPMサーバとWebサービス（IIS）との通信）に使用します。そのため、ファイアウォールの例外に追加する必要はありません。
- ※4 [監視] ビューの管理サーバ群を利用する場合、手動でポートを開いてください。

- ※5 新規インストール時のみ、インストーラによりWindowsファイアウォールの例外リストにプログラムが登録されます。
- ※6 SNMPトラップ受信方式を "SNMPトラップサービスを使用する" にしている場合は、"%windir%\system32\snmptrap.exe" を使用します。
SNMPトラップ受信方式を "独自方式を使用する" にしている場合は、"%Program Files%\NEC\SMM\NVBASE\bin\nvbase.exe" を使用します。
SNMPトラップ受信方式は以下で確認できます。
Web GUI : アラートビューアの [SNMPトラップ受信設定]
Windows GUI: オペレーションウィンドウの [オプション] - [カスタマイズ] - [自マネージャ]
- ※7 ESMPRO/ServerManagerのWindows GUIでのみ変更できます。
Windows GUI: オペレーションウィンドウの [オプション] - [カスタマイズ] - [自マネージャ]
マネージャ間通信を行っている場合は、あわせて隣接マネージャ上で [オプション] - [カスタマイズ] - [マネージャ間通信] で隣接マネージャ設定の変更が必要です。
マネージャ間通信はWindows GUIのみの機能です。
- ※8 ファイアウォールでの設定は不要です。
- ※9 ESMPRO/ServerManagerのWindows GUIでのみ変更できます。
ファイアウォールでの設定は不要です。
Windows GUI: アラートビューアの [ツール] - [ポート設定]
- ※10 ESMPRO/ServerManagerの以下で変更できます。
Windows GUI: アラートビューアの [ツール] - [通報の設定]
Web GUI : アラートビューアの [TCP/IP通報受信設定]
- ※11 ESMPRO/ServerManagerの [環境設定] から変更できます。
- ※12 記載された範囲のうち、最も若い番号の未使用ポートを1つ使用します。
- ※13 ESMPRO/ServerManagerのWeb GUIでのみ変更できます。
Web GUI : アラートビューアの [アラート受信設定] - [CIM-Indication受信設定] - [ポート番号]

管理対象マシン

	項目	プロトコル	ポート番号	プログラム名	自動 / 手動
DeploymentManager ※1	ICMP Echo ※2	ICMP	—	DeploymentManager	自動 (Windows) 手動 (Linux)
	バックアップデータ	UDP	26530	DeploymentManager	—
	DPMクライアント (Windows) ※2	UDP	26529	¥WINDOWS¥system32¥rupdsvc.exe	自動
			26510, 26511		自動
		TCP	26509	¥WINDOWS¥system32¥DepAgent.exe	自動
		UDP	68	¥WINDOWS¥system32¥GetBootServerIP.exe	手動
	DPMクライアント (Linux)	UDP	26529	/opt/dpmclient/agent/bin/depagtd	手動
		TCP	26510, 26509		手動
UDP		68	/opt/dpmclient/agent/bin/GetBootServerIP	手動	
Out-of-Band Management	RMCP/RMCP+	UDP	623 ※3	-	手動
SystemMonitor性能監視	性能データ取得	UDP	137 ※4	(システム)	手動
		TCP	139, 445 ※4	(システム)	手動
			22, 23 ※5		手動
			443 ※6		手動
ESMPRO/ServerAgent監視	ICMP Echo	ICMP	—		手動
	Remote Wake Up	UDP	10101	ネットワークカード	手動
	ESMPRO/ServerAgent (Windows)	UDP	161		手動
		TCP	不定		手動
	ESMPRO/ServerAgent (Linux)	UDP	161		手動
			111 ※7		自動
TCP	111, 不定 ※7		自動		
ESMPRO/ServerAgent Extension	情報収集、スケジュール運転	TCP	47120~47129 ※8		手動
ExpressUpdate Agent, Universal RAID Utility	ExpressUpdate Agent検出	UDP	427		自動
	Universal RAID Utility検出				

	項目	プロトコル	ポート番号	プログラム名	自動 / 手動
	ExpressUpdate機能	UDP	不定		自動
	RAIDシステム情報収集/操作				
System BIOS	リモートコンソール (CUI/SOL未使用)	UDP	2069		手動
OS	ExpressUpdate Agentリモートインストール (管理対象マシンのOSがWindows系の場合)	TCP	137		自動
		UDP	445		自動
	ExpressUpdate Agentリモートインストール (管理対象マシンのOSがLinux系の場合)	TCP	22		自動
vPro	vProとの通信	HTTP	16992		自動
	リモートコンソール	TCP	16994		自動
VMware ESXi 5	VMware ESXi 5 サーバ検出	UDP	427		自動
	サーバ監視 (WS-Man)	TCP	443		自動
	CIM Indication予約	TCP	5989		自動

- ※1 DPM 6.1より前のバージョンとDPM 6.1の新規インストールでは、使用するポート番号が変更されています。DPM 6.1より前のバージョンからアップグレードインストールした場合は、従来使用していたポート番号をそのまま引き継ぐため、DPM 6.1新規インストール時のポート番号 (上記記載の表) とは異なります。旧バージョンのポート番号は、該当するバージョンのユーザーズガイドを参照してください。
- ※2 管理対象マシンをマスタマシンやマスタVMとして使用して、ドメインに参加させる場合、ドメインネットワークのポートもオープンする必要があります。詳細については、「SigmaSystemCenterリファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編」の「1.1.1 ディスク複製OSインストールを行う場合の環境構築の注意」、および「1.2.1 システム構成について」の仮想環境全般を参照してください。
- ※3 OSが認識しているNICではなく、BMCのネットワークインターフェースで使用します。
- ※4 Windows管理対象マシンの性能データ収集時に使用します。
- ※5 Telnet (23)、もしくはSSH (22) 経由で性能データを収集する場合に使用します。
- ※6 VMware ESX、Citrix XenServerの性能データ収集時に使用します。詳細については、「SystemMonitor性能監視ユーザーズガイド」の「1.7.4. 管理サーバと監視対象マシン間の使用ポート」を参照してください。
- ※7 111 (UDP/TCP)、不定 (TCP) はESMPRO/ServerAgent (Linux) が使用する内部ポートです。iptablesなどを利用し設定する場合はアクセスを許可する設定を行ってください。
不定 (TCP) は、OSにより使用可能ポート範囲内で割り振られます。ポート範囲は以下のファイルを参照してください。
/proc/sys/net/ipv4/ip_local_port_range
- ※8 記載された範囲のうち、最も若い番号の未使用ポートを1つ使用します。

その他

	項目	プロトコル	ポート番号	プログラム名	自動 / 手動
DHCP Server	Network Boot	UDP	67		自動
NFS	Linux OS Clear Installation	UDP	111, 1048, 2049		自動
		TCP	111, 1048, 2049		自動
SystemMonitor性能監視	SystemMonitor管理コンソール	TCP	26202	¥Program Files¥NEC¥SystemMonitorPerformance¥bin¥RM_PFMCONSOLE.exe	手動
ESMPRO/ServerManager	ESMPRO/Server Manager	TCP	8185, 8105, 8109	¥Program Files¥NEC¥SMM¥ESMWEB¥esmweb¥jsl.exe	自動

付録 B ターミナルサービスでの操作

Windows Server 2008 のターミナルサービスには、以下の 2 つの動作モードがあります。ご利用の環境を確認し、環境に応じたインストール、およびアップグレードを実行する必要があります。アンインストールは通常通りの手順となります。

<Windows Server 2008 の場合>

◆ ターミナルサーバー

ターミナルサーバーは [サーバー マネージャ] の [役割の追加] で [ターミナル サービス] を選択し、[役割サービスの選択] で "ターミナル サーバー" を追加することで有効になります。

◆ リモートデスクトップ

リモートデスクトップはコントロールパネルの [システム] の [リモートの設定 (R)] をクリックして表示される [システムプロパティ] の [リモート] タブで、以下のいずれかをクリックすることで有効になります。

- ・ [リモート デスクトップを実行しているコンピュータからの接続を許可する (セキュリティのレベルは低くなります)(L)]
- ・ [ネットワーク レベル認証でリモート デスクトップを実行しているコンピュータからのみ接続を許可する (セキュリティのレベルは高くなります)(N)]

注:

・ これまで "ターミナル サービス" と呼ばれていた Windows Server の機能は、Windows Server 2008 R2 にて "リモート デスクトップ サービス" に名称が変更されました。Windows Server 2008 R2 をご使用の場合、本章では以下のように読み替えてください。

- ・ 「ターミナルサーバー」を「リモート デスクトップ サービス」
 - ・ 「ターミナル サーバへのアプリケーションのインストール」を「リモート デスクトップ サーバーへのアプリケーションのインストール」
 - ・ Windows Server 2012 を使用する場合は、お問い合わせください。
-

管理用リモートデスクトップ、またはリモートデスクトップの管理サーバコンポーネント、または管理対象マシンコンポーネントをインストール、もしくはアップグレードする場合、通常通りの手順となります。各手順については、2 章、もしくは 3 章を参照して操作を行ってください。

Windows Server 2008 のターミナルサーバー環境へインストール、およびアップグレードを行う場合には、以下に従って、SigmaSystemCenter のインストールウィザードを起動して操作を行ってください。

注:

- ・ 本手順は、SigmaSystemCenter 3.1 の新規インストール、および SigmaSystemCenter 2.0 以降からのアップグレードインストールを対象としています。
 - ・ ターミナルサービスのクライアントからターミナルサービスのマシンに対してインストール操作を行うことはできますが、SigmaSystemCenter DVD-R は、サーバマシンの DVD/CD-RW ドライブに挿入しておく必要があります。
- ※UNC パス、もしくはネットワークドライブを割り当てたドライブ上で、インストーラは実行できません。
-

<Windows Server 2008 の場合>

1. SigmaSystemCenter 3.1 DVD-R を DVD/CD-RW ドライブに挿入します。
2. [スタート] メニューから [コントロールパネル(C)] - [ターミナル サーバーへのアプリケーションのインストール] を選択します。
3. 「フロッピー ディスクまたは CD-ROM からのインストール」画面が表示されます。[次へ(N)] をクリックします。
4. 「インストールプログラムの実行」画面が表示されます。SigmaSystemCenter のインストーラ (ManagerSetup.exe、または AgentSetup.exe) を指定し、[次へ(N)] をクリックします。SigmaSystemCenter のインストールウィザードが起動します。
5. 以降、通常と同じ手順でインストール、またはアップグレードを実行します。
 - ・ インストール
通常のインストールの詳細については、「2.3 管理サーバコンポーネントを個別にインストールする」、および「2.7 Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへインストーラ画面からインストールする」を参照してください。
 - ・ アップグレード
通常のアップグレードインストールの詳細については、「3.3 管理サーバコンポーネントをインストール (アップグレード) する」、および「3.7 Windows (x86 / x64) 管理対象マシンへアップグレードインストールする」を参照してください。

注: インストール / アップグレード中、.NET Framework 4、Windows Installer 4.5、SQL Server 2012 Express、および DPM サーバのインストール完了後に、システムの再起動を促すダイアログボックスが表示される場合があります。その場合は、以下の点に注意してください。

- ・ 手動でシステムを再起動する必要があります。
ダイアログボックスで [いいえ] をクリックし、以下の手順 6 を実施してインストールをいったん終了させてください。その後、手動でシステムを再起動してください。
 - ・ システムを再起動後、残りのコンポーネントをインストールする際も、本手順の手順 1 から再度実施してインストールしてください。
-

6. SigmaSystemCenter のインストール / アップグレードが完了すると、「管理者インストールの完了」画面が表示されます。[完了] をクリックします。SigmaSystemCenter インストーラの完了画面で再起動を促すメッセージが表示された場合は、[後で手動で再起動する] を選択して、SigmaSystemCenter のインストーラを終了してください。

以上でターミナルサーバーへのインストール / アップグレードは完了です。

付録 C 改版履歴

- ◆ 第 2 版 (2013.1): Update 1 での機能強化に関する記載を追加して改版

.NET Framework 4 サポートによる記載追加

- 1章 「1.3 SigmaSystemCenter 3.1のDVD-R構成」
- 2章 「2.1.2 管理サーバに事前にインストールが必要なソフトウェア」
「2.3.2 コンポーネントの選択」
「2.3.8 インストールの開始」
「2.4.1 インストールを実行するには」
- 3章 「3.2.4 管理サーバに事前にインストールが必要なソフトウェア」
「3.3.3 コンポーネントの選択」

ASP.NET v4.0 対応のため記載を追加

- 2章 「2.1.2 管理サーバに事前にインストールが必要なソフトウェア」

SQL Server 2012 サポートによる記載追加

- 1章 「1.3 SigmaSystemCenter 3.1のDVD-R構成」
- 2章 「2.1.9 SQL Server 2012 Express以外のSQL Serverを使用する場合」
「2.3.2 コンポーネントの選択」
「2.3.4 SQL Server情報の設定」
「2.3.7 DPMの設定」
「2.3.8 インストールの開始」
「2.4.1 インストールを実行するには」
- 3章 「3.2.13 SQL Server 2012 Express以外のSQL Serverを使用する場合」
「3.3.3 コンポーネントの選択」
「3.3.5 SQL Server情報の設定」
「3.5.6 SigmaSystemCenter 2.0以降のバージョンからアップグレードした場合」
- 4章 「4.3.10 SQL Server 2012 Expressをアンインストールするには」
「4.4.5 SQL Server 2012 Expressをアンインストールするには」

Windows Server 2012 サポートによる記載追加

- 2章 「2.1.2 管理サーバに事前にインストールが必要なソフトウェア」
「2.1.6 Windows Vista以降、またはWindows Server 2008以降にインストールする際の注意」
「2.4.1 インストールを実行するには」
「2.6 管理対象マシンコンポーネントのインストール」
「2.7.5 インストールの開始」
「2.8.1 インストールを実行するには」
「2.9 Windows Server 2008 Server Core / Windows Server 2012 Server Core管理対象マシンへインストールする」
- 3章 「3.2.12 Windows Vista以降、またはWindows Server 2008以降にインストールする際の注意」

- 4章 「4.2.3 Windows Vista以降、またはWindows Server 2008以降からアンインストールする際の注意」
「4.5 管理対象マシンコンポーネントのアンインストール」
- 付録 「付録 B ターミナルサービスでの操作」

Windows 8 サポートによる記載追加

- 2章 「2.1.6 Windows Vista以降、またはWindows Server 2008以降にインストールする際の注意」
「2.7.5 インストールの開始」
「2.8.1 インストールを実行するには」
- 3章 「3.2.12 Windows Vista以降、またはWindows Server 2008以降にインストールする際の注意」
- 4章 「4.2.3 Windows Vista以降、またはWindows Server 2008以降からアンインストールする際の注意」

- ◆ 第1版 (2012.6): 新規作成

付録 D ライセンス情報

本製品には、一部、オープンソースソフトウェアが含まれています。当該ソフトウェアのライセンス条件の詳細につきましては、以下に同梱されているファイルを参照してください。また、LGPLに基づきソースコードを開示しています。当該オープンソースソフトウェアの複製、改変、頒布を希望される方は、お問い合わせください。

<SigmaSystemCenterインストールDVD>¥doc¥OSS

- PXE Software Copyright (C) 1997 - 2000 Intel Corporation.
- 本製品には、Oracle Corporationが無償で配布しているJRE (Java Runtime Environment) を含んでいます。使用許諾に同意したうえで利用してください。著作権、所有権の詳細につきましては、以下のLICENSEファイルを参照してください。
<JREをインストールしたフォルダ>¥LICENSE
- 本製品には、Microsoft Corporationが無償で配布しているMicrosoft SQL Server Expressを含んでいます。使用許諾に同意したうえで利用してください。著作権、所有権の詳細につきましては、以下のLICENSEファイルを参照してください。
<Microsoft SQL Server Expressをインストールしたフォルダ>¥License Terms
- Some icons used in this program are based on Silk Icons released by Mark James under a Creative Commons Attribution 2.5 License. Visit <http://www.famfamfam.com/lab/icons/silk/> for more details.
- This product includes software developed by Routrek Networks, Inc.
- Copyright 2005 - 2010 NetApp, Inc. All rights reserved.

